岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (19)

倉敷市(児島)
城遺跡発掘調査報告

―県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査―

1977.3

岡山県教育委員会

文化課

序　　文

現在の児島半島は，今では岡山平野と陸続きになっています。しかし，「平家物語」が書かれた鎌倉時代には，児島は独立した島であったことを物語る記事が随所に散見できます。河川による土砂の堆積作用や江戸時代以降の干拓によって今日見られる景観を呈してきたのであります。

児島の南岸には見るべき平野はほとんどなく，山間の谷に猫額大の水田が展開しています。隣接の玉野市が明治以降の造船業や築港として発展したのに対し，児島は繊維業あるいは塩の主要産地として発展してきました。

県立児島高等学校は，大正８年に創立した古い伝統を持つ高校でありますが，生徒数の増加によって県立高等学校の中では一番校地も狭く，諸々の活動に制約を受けるようになってまいりました。そのため，地元からの校地拡張の強い要望が以前からあり数年前から適地をさがしてまいりました。土地柄山陵の多い児島にあって，必要面積の土地を確保することは困難であり，このため埋蔵文化財包蔵地との競合問題が惹起されました。

その対策として昭和４８年度に新しい校地予定地における埋蔵文化財の予備調査を行い，また今回新しく発見された地点については，校地内にできるだけ有効な形で保存するよう努力しましたが，やむなく削平する部分は記録保存を実施いたしました。今回の報告は，第１次調査を含め昭和５０年の７月～１１月に行った調査時にいちじるしく出土した弥生時代中期の土器，石器の事実を中心としたものでありますが，その間，関係各位から多大の支援と協力があったことに感謝するとともに，小報が一つの研究資料として寄与できるならば幸甚に存じます。

昭和５２年　３　月

岡山県教育委員会

教育長　　小　野　啓　三

例　　言

1. この報告書は，岡山県教育委員会が倉敷市味野城・ハンド。焼山に存する遺跡を，県立児島高校移転用地埋蔵文化財発掘調査委員会に調査を委託し，その報告にもとづいた発掘調査報告である。

2. 発掘調査は，県立児島高校移転用地文化財発掘調査団が担当し，昭和50年8月18日～11月28日にかけて実施した。

発掘作業は地元城部落を中心に，

青山　敏男	瀬尾　浩一	三浦　広吉	小寺喜多雄
岩崎　一雄	岩崎　武一	岩崎　利夫	岩崎喜多郎
大森　　毅	平口　寛治	生田　　寛	松浦　好助
森貞　年松	岩崎　隆雄	岩崎　敏子	岩崎　定子
岩崎　鶴枝	岩崎　文子	旅田登士子	岩崎千恵子
岩崎　達子	片山　徳恵	古谷　恵子	岩崎久仁子
藤田スミ子	井上　克子	片山　兼子	松井千恵子

の援助を受け，第1次調査を担当した出石収，村上幸雄両氏には種々の教示を受けた。また，県立児島高等学校，光畑正夫校長をはじめ，土屋信文事務長，小倉昇の諸氏には諸々の迷惑をかけた。記して感謝の意を表したい。

3. レベルの数値は海抜高である。

4. 遺構図面は，1／60で，出土遺物の内土器・土製品は1／4に石器類は1／2にしている。

5. この報告書の作成・編集には，調査を担当した伊藤・山磨が行い，出土遺物の内石器に関しては県文化課主事　秀島貞康が分担した。

また，遺物整理・実測等において，柳瀬昭彦，竹田　勝，中野雅美，平井泰男，山本悦世，後谷日出子の援助を受けた。

目　　次

序　文

例　言

児島高校移転用地発掘調査委員会会則 …… 1

県立児島高校移転用地文化財発掘調査委員会・調査団名簿 …… 3

第1章　遺跡の立地および環境 …… 4

第2章　調査にいたる経過 …… 10

第3章　調査の概要 …… 12

第1節　第1地点 …… 12

第2節　第3地点西半部 …… 50

第3節　第3地点東半部 …… 61

第4節　その他の出土遺物 …… 84

1）　分銅形土製品 …… 84

2）　紡錘車・土錘 …… 85

3）　石庖丁 …… 87

4）　打製石鏃 …… 90

5）　石　斧 …… 94

6）　片面加工器 …… 95

7）　打製石槍 …… 95

8）　石　匙 …… 95

9）　原　材 …… 95

10）　砥　石 …… 95

第4章　まとめにかえて …… 96

図　版　目　次

図版－1　1－1遺跡遠景（西鷲羽山有料道路から） …… 101

1－2　〃　（南仁伍遺跡から） …… 101

〃　－2　2－1第1地点北斜面全景（北西から） …… 102

2－2　〃　東斜面（東から） …… 102

〃　－3　3－1第1地点南斜面第3号・4号住居址（南から） …… 103

3－2第1地点南斜面第4号・5号住居址（南から） …… 103

図版－4　4－1第1地点南斜面第3号・4号住居址（南から）…… 104
4－2第1地点南斜面第3～5号住居址および建物址（東から）…… 104
〃　－5　5－1第1地点南斜面第6号住居址（西から）…… 105
5－2第1地点北斜面土層断面（北から）…… 105
〃　－6　6－1第3地点西半部全景および建物群（西から）…… 106
6－2第3地点南谷トレンチ（南から）…… 106
〃　－7　7－1第3地点西半部第1号住居址周辺全景（南から）…… 107
7－2第3地点西半部第1号住居址全景（南から）…… 107
〃　－8　8－1第3地点東半部第2号住居址（西から）…… 108
8－2第3地点西半部第8号住居址（北西から）…… 108
〃　－9　9－1第3地点西半部建物址群（東から）…… 109
9－2第1地点西半部建物址群（北から）…… 109
〃　－10　第1地点南斜面および北斜面出土遺物…… 110
〃　－11　第1地点北斜面出土遺物…… 111
〃　－12　〃　〃　〃　…… 112
〃　－13　第3地点東半部出土遺物…… 113
〃　－14　〃　西半部および南谷各トレンチ出土遺物…… 114
〃　－15　15-1　分銅形土製品…… 115
15-2　石　庖　丁…… 115
〃　－16　16-1　各地点出土石器類…… 116
16-2　石　　鏃…… 116

児島高校移転用地文化財発掘調査委員会会則

（設　置）

第1条　児島高校移転用地整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するため児島高校移転用地文化財発掘調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（目　的）

第2条　委員会は，児島高校移転用地整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を行うことを目的とする。

（事　業）

第3条　委員会は前条目的を達成するため，次の事業を行う。

1）　児島高校移転用地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関すること。

2）　その他目的を達成するために必要な事業

（組　織）

第4条　委員会の委員は，次の各号に掲げる者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

1）　学識経験者

2）　関係行政機関職員

（委員長）

第5条　本委員会に次のとおり委員長および副委員長を置く。

1）　委員長　　1名

2）　副委員長　　1名

2.　委員長は，岡山県教育委員会教育次長をもってあてる。副委員長は，委員のうちから委員長が委嘱する。

3.　委員長は，委員会を代表し会務を掌理する。

4.　副委員長は，委員会を補佐し，委員長に事故あるときはその職務を代理する。

（任　期）

第6条　委員の任期は，調査が完了するまでとする。ただし，それぞれの機関等の代表たる委員は，その役職に存る期間に限るものとする。

（会　議）

第7条　委員会は，委員長が招集する。

2　委員会は，次の事項について審議する。

1.）会則の制定および改廃に関すること。

2.）調査の基本方針に関すること。

3.）その他重要な事項

（事務局）

第8条　委員会の事務を処理するため，岡山県教育庁文化課に事務局を置く。

2　事務局員は，委員長が委嘱する。

（監　査）

第9条　委員会は会計監査を実施するために監事を置きその監事は，委員長が委嘱する

（調査団）

第10条　委員会に発掘調査とその他の事業を専門的に実施するため，調査団を置き．その調査委員は岡山県教育委員会委員長が委嘱する。

2　調査団に団長を置く。

（補　足）

第11条　この会則に定めるものが，委員会の運営に関して必要な事項は本委員会が定める。

附　則

この会則は昭和５０年８月１１日から実施する。

県立児島高校移転用地文化財発掘調査委員会名簿

役名	氏名	所属
委員長	岡田政敏	県教育委員会教育次長
副委員長	鎌木義昌	岡山県文化財専門委員
委員	出石収	郷土史家
〃	多和和彦	〃
〃	山本慶一	〃
〃	光畑正夫	児島高等学校長
〃	小林孝男	県教育庁文化課長
〃	西口秀俊	県教育庁文化課参事
事務局長	小林孝男	県教育庁文化課長
次長	西口秀俊	〃 文化課参事
	水田稔	〃 〃 主幹
	光吉勝彦	〃 〃 主任
監事	長瀬日出明	県教育庁総務課係長
	土屋信文	児島高校事務長

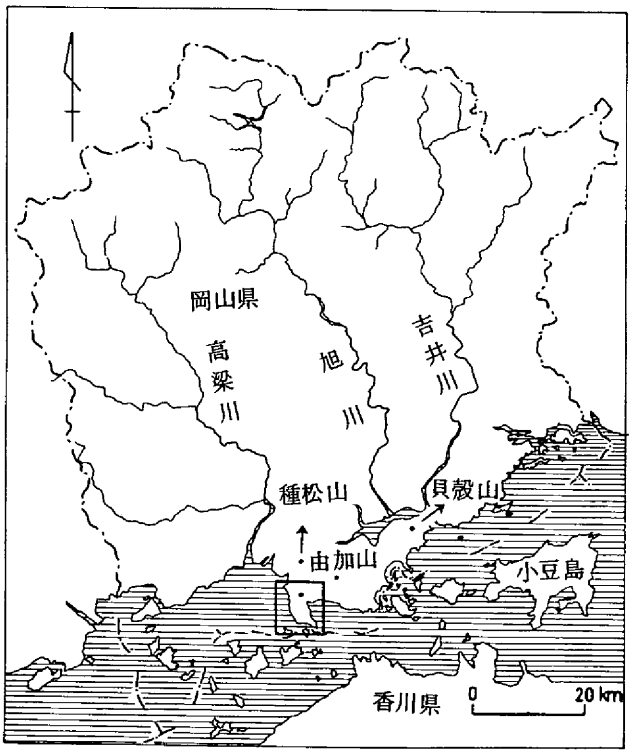
調査団

役名	氏名	所属
団長	鎌木義昌	岡山県文化財専門委員
	出石収	郷土史家
	多和和彦	〃
	山本慶一	〃
	葛原克人	県教育庁文化課文化財保護主事
	伊藤晃	〃
	栗野克巳	〃
	山磨康平	〃

第1章　遺跡の立地および環境

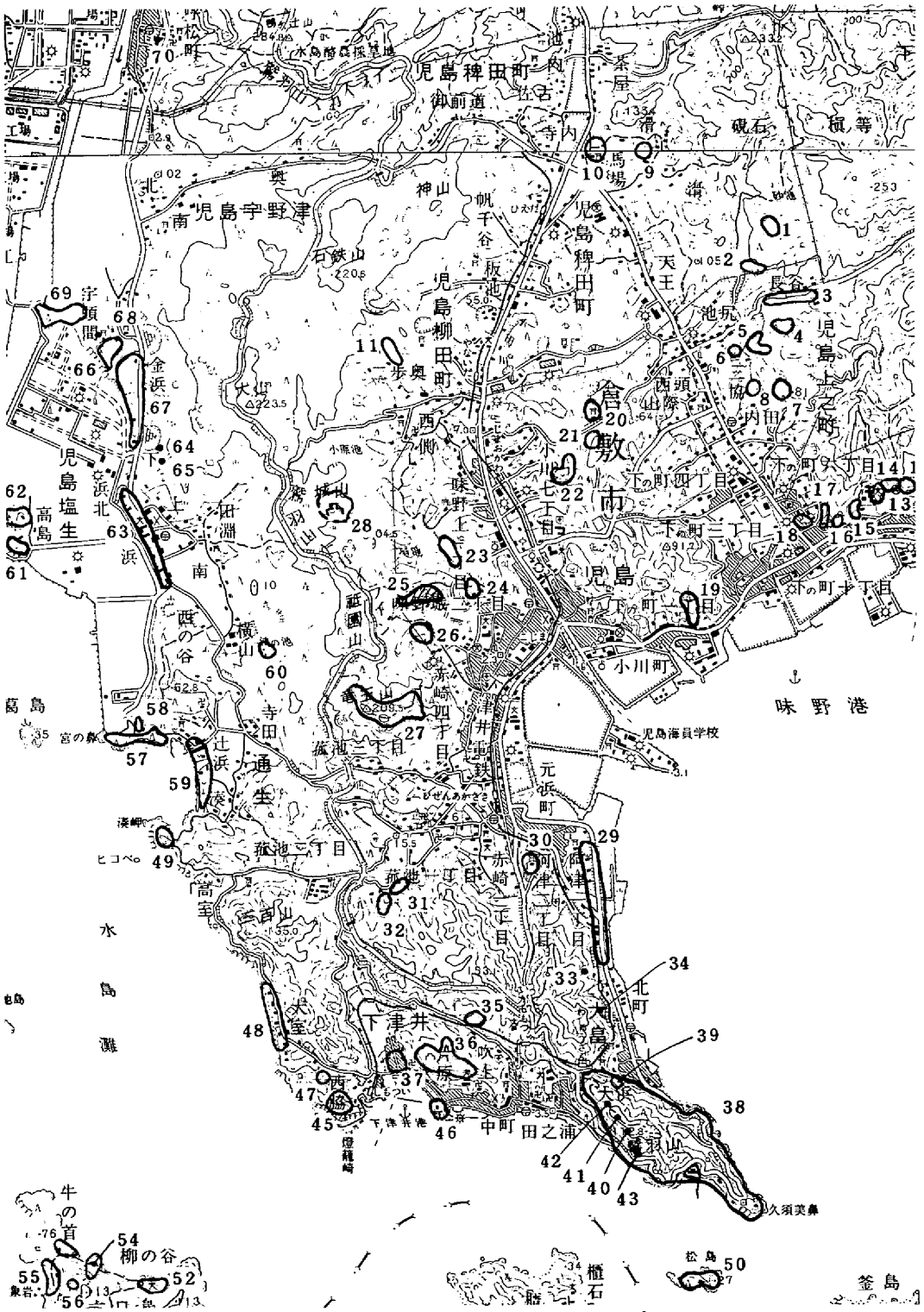
児島が岡山平野と陸続きになったのは，近世以降になってからのことである。江戸時代後半から明治時代の開拓，あるいは北西部からの高梁川による堆積作用，それに続く近年の児島湾〆切堤防は，かっての児島と本土との間を陸地化し，沃野をつくり出し，あるいは淡水湖と化し現在にいたり児島半島と呼称されている。かっての児島は，北側の郷内，荘内地域の小平野を除いてみるべき平野は皆無といってもいいであろう。しかしここには旧石器時代の鷲羽山遺跡・宮山遺跡をはじめ著名な遺跡の多い所としても知られている。弥生時代中期の標式遺跡ともなっている。前山遺跡，戸津田遺跡，菰池遺跡，仁伍遺跡，高地性集落地として知られる，種松山，貝殻山遺跡，銅剣の出土した由加山遺跡，後期には，特殊器台が出土した向木見遺跡などが知られ，また奈良時代には小豆島，塩飽諸島を含めた備前児島は塩の一大供給地としてその役割をになっているのである。

児島半島を東西に走る250m前後の山地から南に突出した半島の突先が鷲羽山である。この城遺跡は，この鷲羽山に伸びる1つの山塊である城山があり，この中世の山城である城山に登る表道の途中にあたる。味野から塩生（しおなす）・通生（かよう）への山越へ道であり最近まで使用されていた街道である。第2次戦争前後の開拓時に，土器片が出土し，地元の郷土史家である多和和彦氏などにより遺物が採集され保管されていた。この複雑に入りこんだ小丘陵の一つにこの遺跡は存在している。また，この遺跡のすぐ南150 mの所に存する仁伍遺跡は，同じ様な立地を示し，貝塚を伴いその周辺を中心に発掘が行われ，最近その報告も公にされるにいたっている。



第1図　児島半島の位置

そして，この谷を中心に小さな支谷にも弥生時代中期の遺跡を中心に数多く確認されている。仁伍，城，菰池，味野保育園遺跡（池尻遺跡）などが報告されている遺跡である。これら小支丘上の遺跡とは別に，西の種松山（258 m）東の貝殻山山頂（288.6m）には，弥生時代中期の高地集落遺跡が，又由加山（273 m）からは平型銅剣が5本出土している地点が知られている。時期的にこれらの諸遺跡と競合関係にありこの問題をも含め今後追求されなければならない問題が山積している。

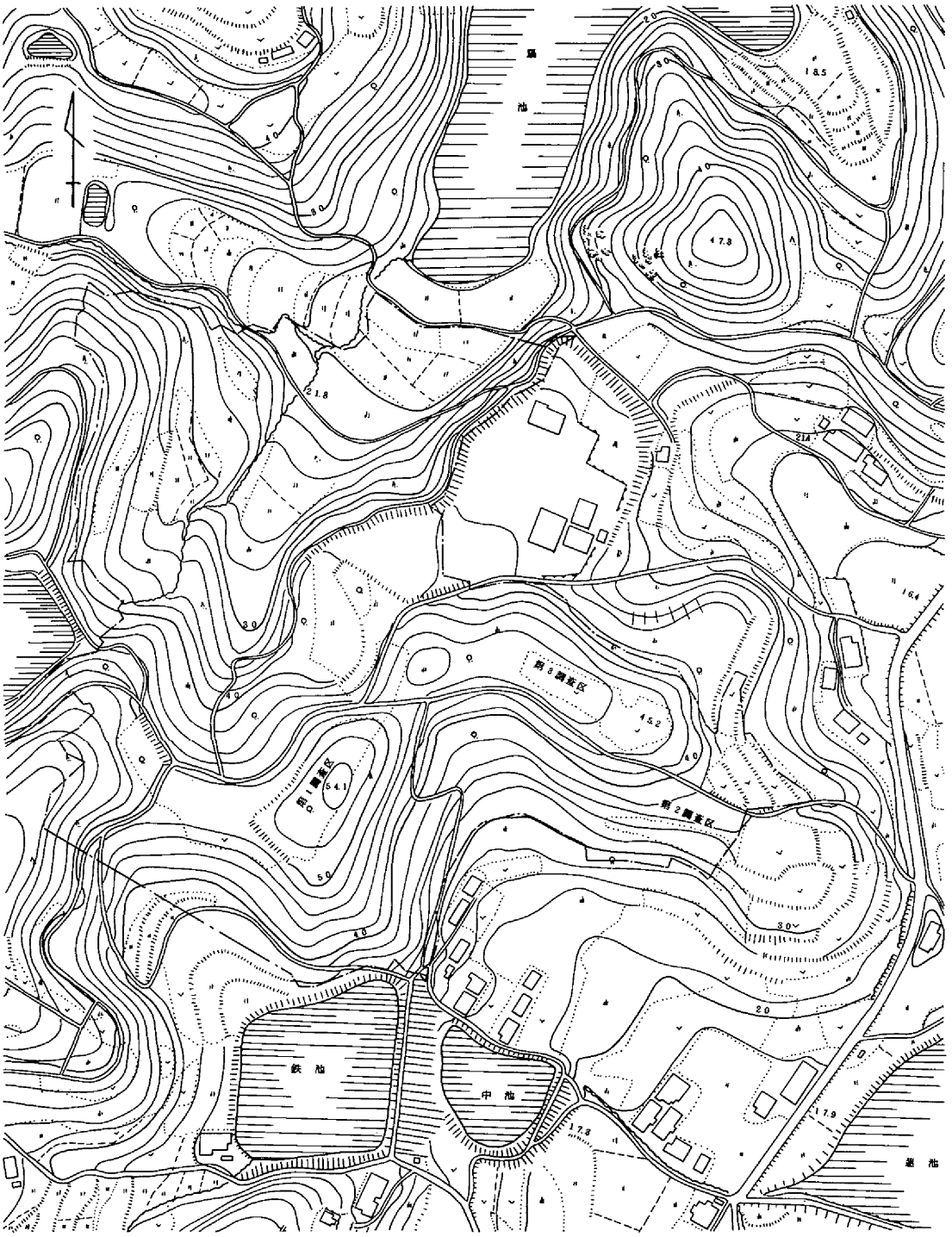


第２図　城遺跡周辺地形図および周辺遺跡分布図（１／５万）

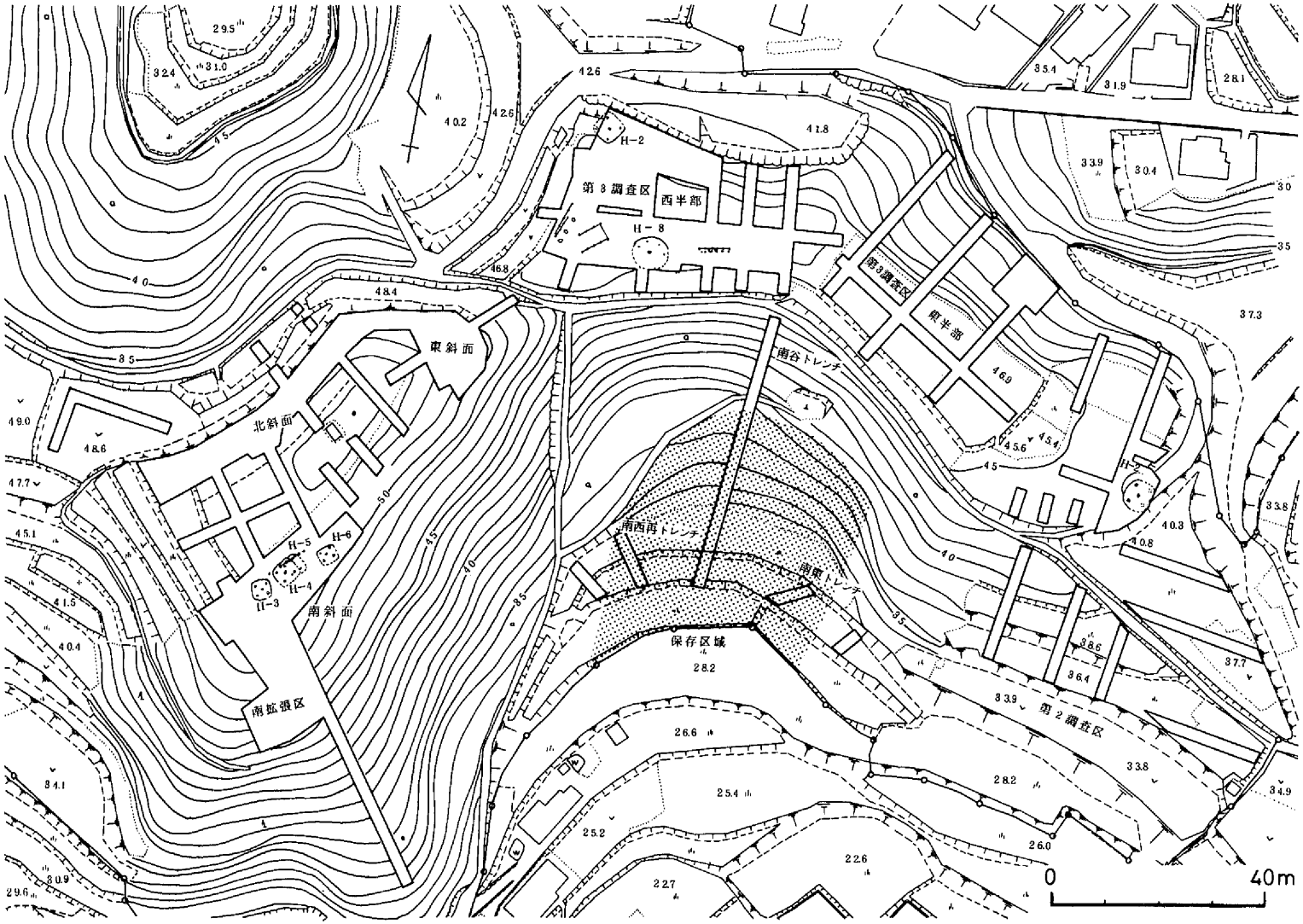
城遺跡周辺遺跡地名表

地図番号	遺跡地図番号	種別	年代	名称	所在地	備考	参考文献
1	6-125	包含地	弥生	高山遺跡	児島上之町	城の辻遺跡ともいう	
2	6-126	散布地	古墳	高辻遺跡	〃	土師器片散布	
3	6-127	包含地	弥生	大池北遺跡	〃		
4	6-128	〃	古墳	大池南遺跡	〃	土師器包含	
5	6-129	〃	弥生	積泉池遺跡	〃	千本池遺跡ともいう	
6	6-130	〃	〃	池尻遺跡	〃	上之町保育園遺跡ともいう	間壁葭子「児島上の町保育園内遺跡」倉敷考古館研究集報6号
7	6-131	〃	〃	児島上之町内田東遺跡	〃		山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」倉敷考古館研究集報8号
8	6-132	散布地	弥生～古墳	児島上之町内田西遺跡	〃		
9	6-140	〃	弥生	滑遺跡	稗田		
0	6-141	〃	〃	稗田八幡宮遺跡	〃		
11	6-142	寺院址	中世	堂の谷寺跡	柳田		
12	9-32	散布地	先土器～弥生	琴浦向山遺跡東地点	児島田の口	石片・石鏃散布	
13	9-33	〃	縄文～弥生	琴浦向山遺跡西地点	児島下の町	土器・石器散布	
14	9-34	〃	〃	葛谷遺跡	〃	銅鏃・石器・土器散布消滅	
15	9-35	包含地	縄文	琴浦掘江遺跡	〃		
16	9-36	〃	中世	鴻八幡宮東遺跡	〃	土器片包含	
17	9-37	散布地	弥生	鴻八幡宮西遺跡	〃	石片散布	
18	9-38	包含地	古墳	鴻八幡宮馬場遺跡	〃	師楽式土器製塩遺跡	
19	9-41	散布地	先土器～弥生	萱刈遺跡	〃	石片散布	
20	9-52	包含地	弥生	小川林山神社遺跡	児島小川		
21	9-53	〃	弥生 古墳	中山野球場北遺跡	〃		
22	9-54	〃	弥生	小川平田遺跡	〃		
23	9-59	〃	〃	長原遺跡	児島味野上		
24	9-60	包含地	弥生	焼山遺跡	児島味野城		
25	9-61	〃	〃	城遺跡	〃	一部をハンド遺跡ともいう	山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」倉敷考古館研究集報8号
26	9-64	〃	〃	味野仁伍遺跡	児島味野		〃
27	9-69		先土器	竜王山遺跡	〃	石器・石庁散布	
28	9-70	城址	中世	神水城址	〃		
29	9-71	包含地	古墳	阿津走出遺跡	児島阿津	師楽式土器製塩遺跡	
30	9-72	〃	弥生・平安・中世	赤崎新庄八幡宮遺跡	児島赤崎		
31	9-73	〃	弥生	菰池遺跡	菰池	広畑遺跡ともいう	鎌木義昌「弥生式土器集成」
32	9-74	散布地	〃	菰池越遺跡			
33	9-75	古墳	古墳後期	琴海古墳群1号	大畠	横穴式石室，東開口	
34	9-76	〃	〃	〃 2号	〃	〃 〃	
35	9-79	散布地	弥生	吹上山田遺跡	下津井吹上		

地図番号	遺跡地図番号	種別	年代	名称	所在地	備考	参考文献
36	9－80	城址	近世	下津井城址	下津井吹上		
37	9－81	包含地	古墳	古下津井遺跡	下津井	師楽式土器製塩遺跡	
38	9－85	〃	先土器～古墳	鷲羽山遺跡	下津井、大畠。田之浦		山本慶一「鷲羽山採集の石器と土器」倉敷考古館研究集報6号
39	9－86	古墳	古墳後期	鷲羽山東麓古墳群	大畠	横穴式石室 2－3基	
40	9－87	〃	〃	鷲羽山古墳群 1号	下津井・田之浦	横穴式石室・天井石を失う 南西開口	
41	9－88	〃	〃	〃 2号	〃	横穴式石室・石材露出	
42	9－89	〃	〃	〃 3号	〃	横穴式石室露出・南西開口	
43	9－90	〃	古墳	〃 4号	〃	箱式石棺・消滅	
44	9－91	包含地	〃	大浜遺跡	大畠	師楽式土器製塩遺跡	
45	9－93	散布地	先土器～縄文	灯籠崎遺跡	下津井	石器・石片散布	
46	9－121	城址	中世	古下津井城跡	〃		
47	10－27	散布地	先土器	上濃地島遺跡	上濃 地島	石片散布	
48	10－25	包含地	古墳	大室遺跡	下津井	師楽式土器製塩遺跡	
49	10－26	散布地	先土器	湊岬遺跡	児島通生	石片散布	
50	9－136	〃	〃	松島遺跡	松島	石器・石片散布	
51	10－30	古墳	古墳	六口島茶屋鼻古墳	六口島	箱式石棺一部残存	
52	10－33	包含地	縄文～古墳	六口島柳谷遺跡	〃	土器・石器包含	
53	10－34	〃	先土器～縄文	六口島茶屋鼻遺跡	〃	石器・土器片散布	
54	10－35	〃	古墳	六口島大首遺跡	〃	師楽式土器製塩遺跡	
55	10－36	〃	縄文～古墳	六口島西の浜遺跡	〃	土器・石器包含	
56	10－37	散布地	縄文	六口島西の浜上遺跡	〃	土器片散布	
57	10－23	〃	先土器～縄文	通生宮の鼻遺跡	児島通生	石器・石片散布	
58	10－20	〃	中世	本荘八幡宮遺跡	〃	土師器散布	
59	10－220	包含地	古墳	通生遺跡	〃	師楽式土器製塩遺跡	
60	10－17	古墳	古墳後期	横山古墳群	児島通生	横穴式石室 2基確認	
61	10－15	散布地	先土器	高島南遺跡	高島	石片散布	
62	10－14	〃	〃	高島東遺跡	〃	〃	
63	10－8	包含地	弥生～古墳	塩生遺跡	塩生遺跡	弥生前期・師楽式土器製塩遺跡	
64	10－6	古墳	古墳後期	馬乗場古墳群1号	〃	横穴式石室・西開口	
65	10－7	〃	〃	〃 2号	〃	横穴式石室らしき石材あり	
66	7－38	散布地	先土器	金浜上遺跡	〃	石器・石片散布	間壁忠彦「高梁川下流域の無土器時代遺跡」倉敷考古館研究集報2号
67	7－33		古墳	金浜遺跡	〃	師楽式土器製塩遺跡	
68	7－30	古墳	〃	天神山古墳	〃	円墳・ハニワあり	多和和彦「児島市字頭間の古墳群について」吉備考古85号
69	7－29	城址	中世	本太城址	〃		
70	7－26	古墳	古墳後期	上町古墳	呼松町	横穴式石室 一部残在	



第3図　児島高校移転用地地形図



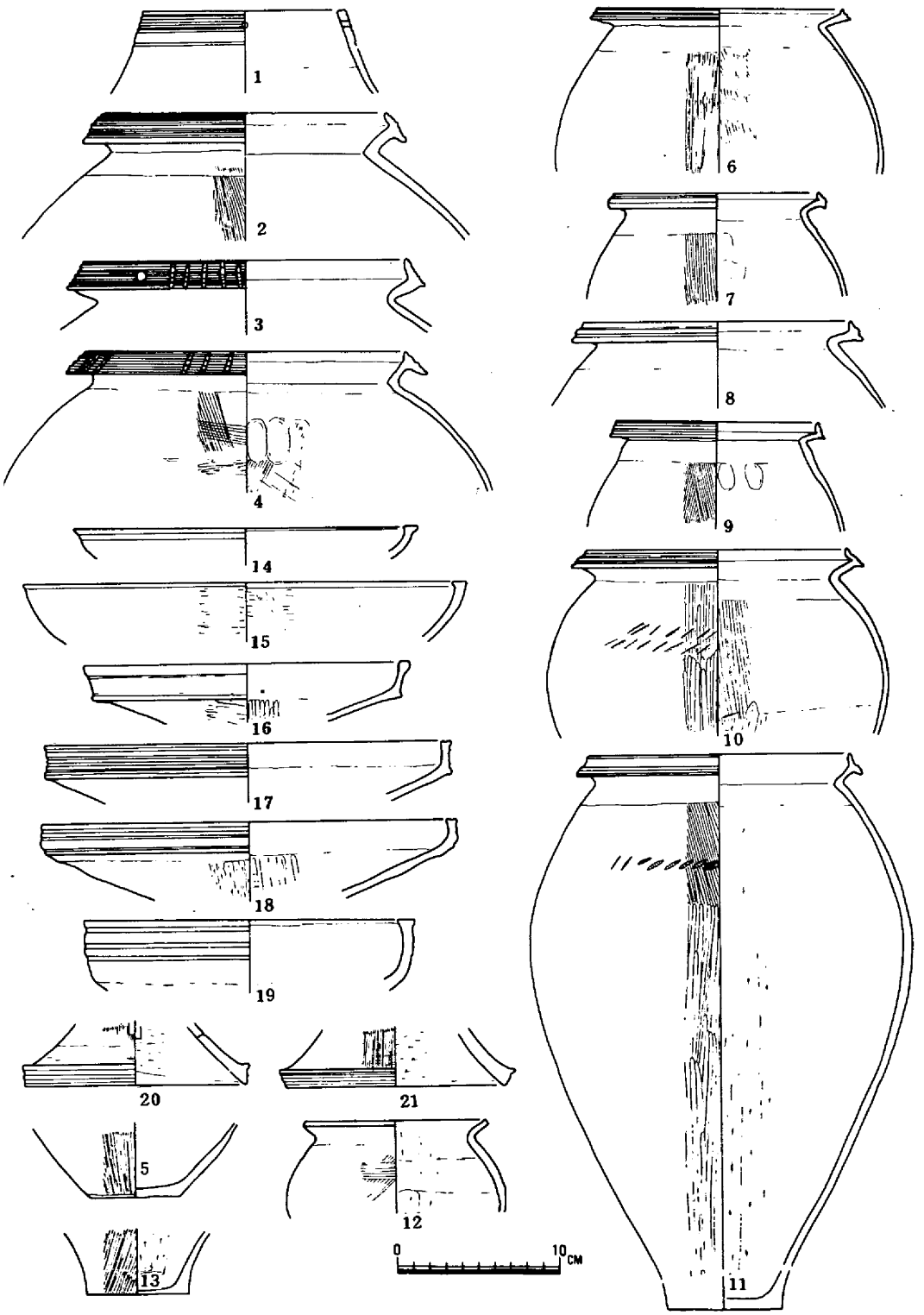
第4図　　トレンチおよび調査遺構配置図

第２章　調査にいたる経過

県立児島高校は，大正８年に創立され，数多くの卒業生を送り出して来た。近年の高校進学率の増加等と合いまり，現在の敷地では，新しく校舎を建築することさえ困難であった。このため適地を数年前からさがしていた。児島地区においてそれでなくとも校地に見合う適地を確保することは困難な面が多く，一時は，広大な塩田跡地なども考えられていたらしいが，結局，遺跡との競合関係を生ずるが，現在地に決定された。

第１次調査は１９７３（昭・４８）年８月に出石収，村上幸雄両氏によって行われた。この段階では，まだ校地を決定するための予備調査段階であったため，調査範囲，地点も制約されたものであった。この時は主に第１地点と第２地点の調査が行われ，第１地点からの遺構は，果樹野菜栽培などのため深耕され確認されなかったが，多くの遺物が出土した（第５図）。第２地点からは遺構・遺物の出土もみられなかった。

第２次調査は，第１次調査の結果をふまえ，１９７５（昭．５０）年７月から第１次調査の行えなかった第３地点も加え，トレンチ．グリッドを各所に設けた。その結果，第１地点は遺構の残る可能性もあるので全面を，第２地点は，その可能性が全くなく，また第３地点は，どのトレンチに於いても丘陵頂部より東，西，北それぞれの端部に遺物が集中しており，遺物の多い所を中心に掘り拡げた。第１地点と第３地点間の谷部斜面にも校地境までトレンチを設けた。この南谷トレンチに於いては包含層が厚く見られた。しかしこの谷部の遺跡は今回の確認調査で発見されたものでありこのため削平する部分から除外し，範囲を確認し，有効な形で，校地に残すことになり範囲確認のためのトレンチを４本入れるのみで終了した。



第5図　第1次調査出土遺物

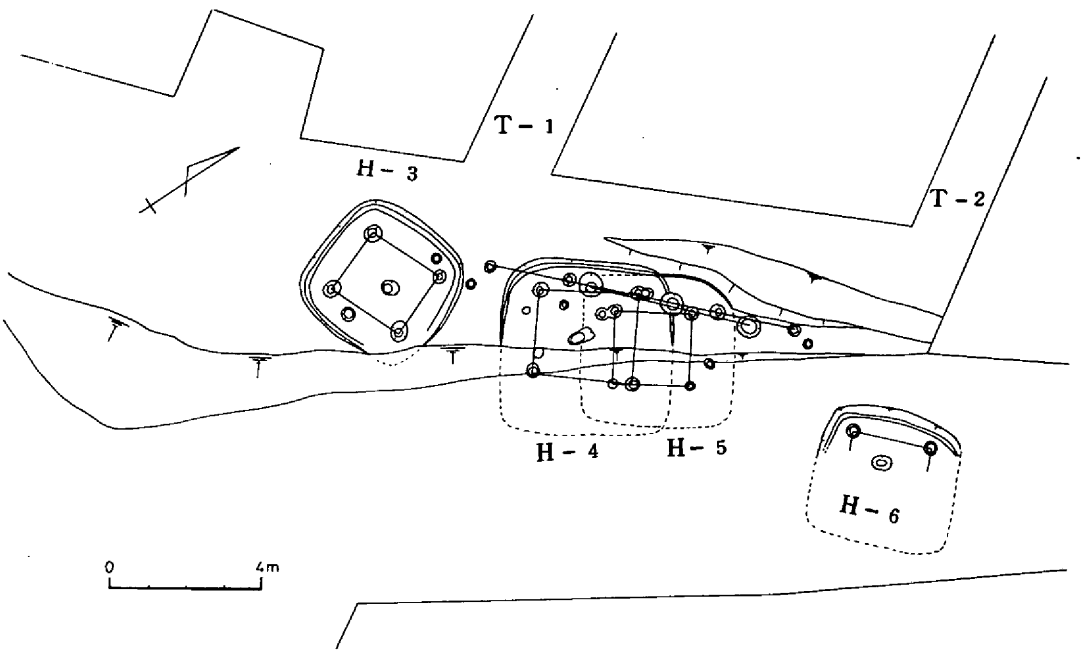
第3章　調　査　の　概　要

第1節　　第1地点

第2次調査は，第1次調査で多くの遺物が出土した第1地点に数本のトレンチを設定した。南側斜面には鉄池北側堤防に向ってトレンチを入れた。丘陵頂部は，第1次調査時と同様ぶどうを作る時の施肥の為に深耕され遺構．遺物もほとんど検出することができなかった。南側丘陵肩部において住居址4棟建物址と思われる柱穴列2棟分を検出した。3号住居址はほぼ完存していたが，4～6号は北側部分の$^{1}/_{2}$～$^{1}/_{3}$が残存していた。また肩部以下の斜面から土器は余り多くない。頂部の標高は約55 mであるが，これら住居址群は 51 m前後の等高線上に並んでおり，東斜面の遺物包含層もこれ位に集中していた。

北側斜面からは，多量の遺物が見られた。包含層は，浅い所では耕作土直下から深い所では1 m近く堆積しているが，これは頂部を掘り返した時などに2次的に堆積したものもある。基盤層は花崗岩であるが，包含層は，これが風化したばい乱土層である。この様な状況で北側斜面から多量の遺物は出土しているが南側に比べ斜面も急峻であり遺構は検出することはできなかった。

東側斜面においては，遺構は検出することができなかったが，遺物のみ薄く堆積した包含層から出



第6図　第1地点南斜面遺構全体図

土している。

以下，第1地点の遺構を概略する。

<第3号住居址> 一辺約280cmの隅丸方形の住居址である。主柱穴は4本で東西柱間220 cm，南北180 cmを計る。どれも床面から60 cm近く掘り込んでいる。中央に40×50 cmのピットを持つ。周囲に幅12～15 cm，深さは6～10 cmの溝が廻っている。

遺物は，甕$_3$（56，57），甕底部（61），高杯A_1（64）などが出土している。

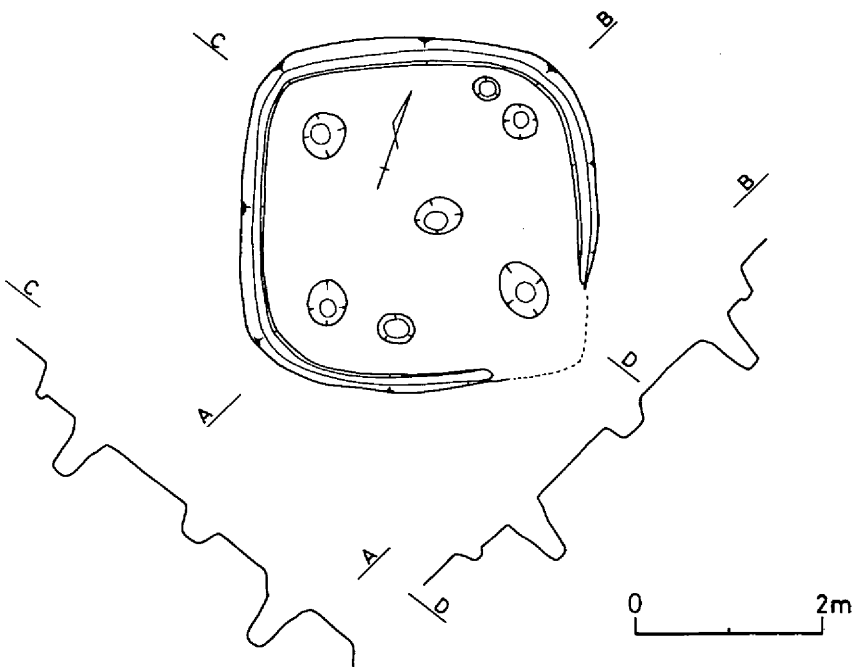
<第4号住居址> 一辺約4 m 50～60 cmの隅丸方形と思われるが，床面の北側半分と北側柱穴が残り，南側に開墾時あるいはそれ以前に削平され，南側柱穴底部のみが残存している。東西柱間260 cm・南北220～250 cmを計る。中央に東西26×南北70 cmの長細いピットを持つ。

遺物は，5号住居址と混っている可能性があるが，壺A_2（26），F_3（79，80），甕底部（40，41），高杯A_2（63），B_2（67，71），C_2（64）が出土しいる。

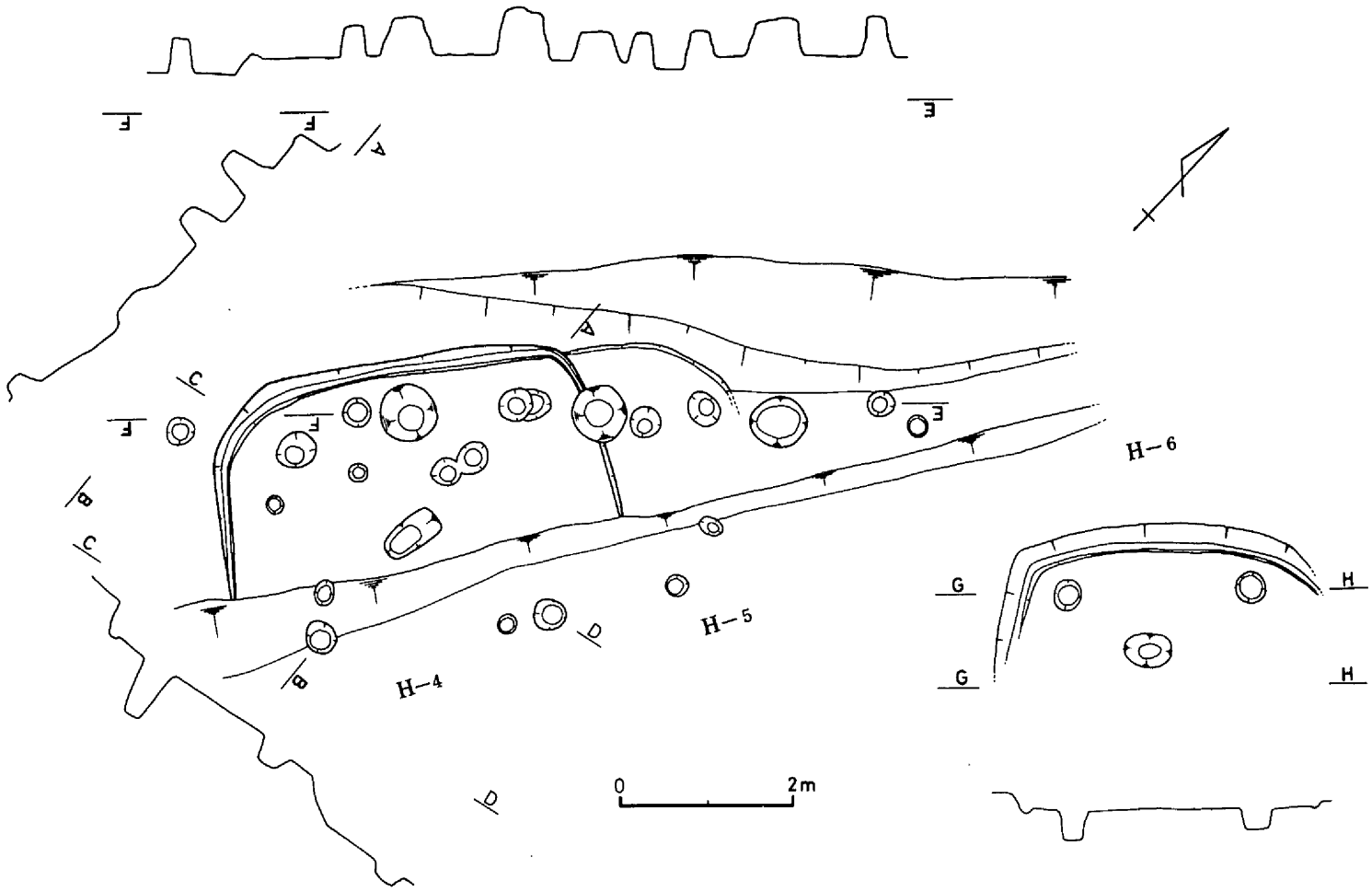
<第5号住居址> 半分は4号住居址と同じく削平されている。又，4号住居址に切られ，床面は北東隅約$^1/_4$が残存しているのみである。円形～隅丸方形と考えられる。柱穴は4本とも確認できる。東西200 cm，南北190～200 cmを計る。

遺物は4号住居址との混りを除いて，壺A_3（31），甕$_3$（53，59），高杯B_2（72）と甑の底部が出土している。

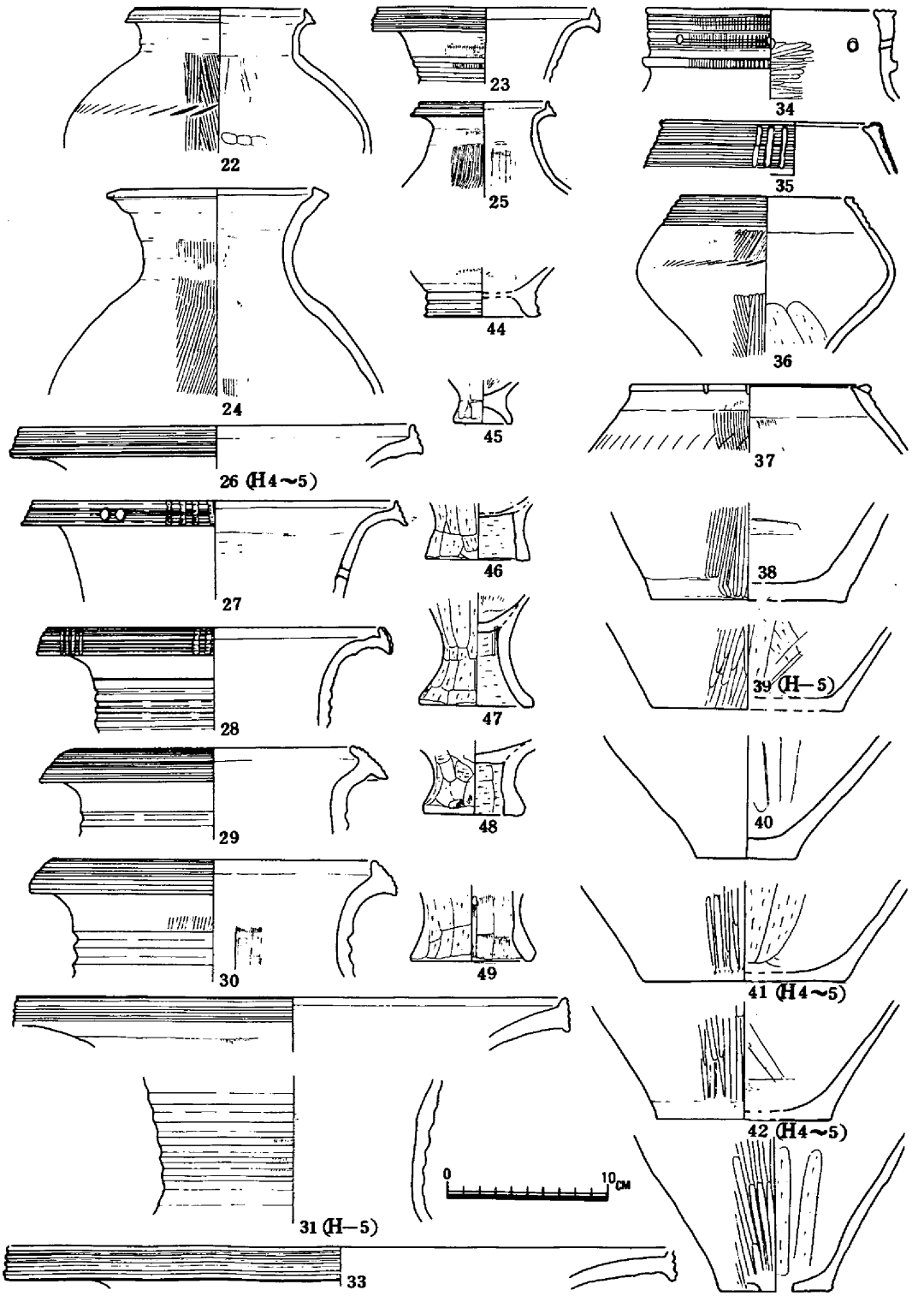
<第6号住居址> 一辺約60 cm程で隅丸方形を呈す。北側約$^1/_3$が残存するのみである。柱穴



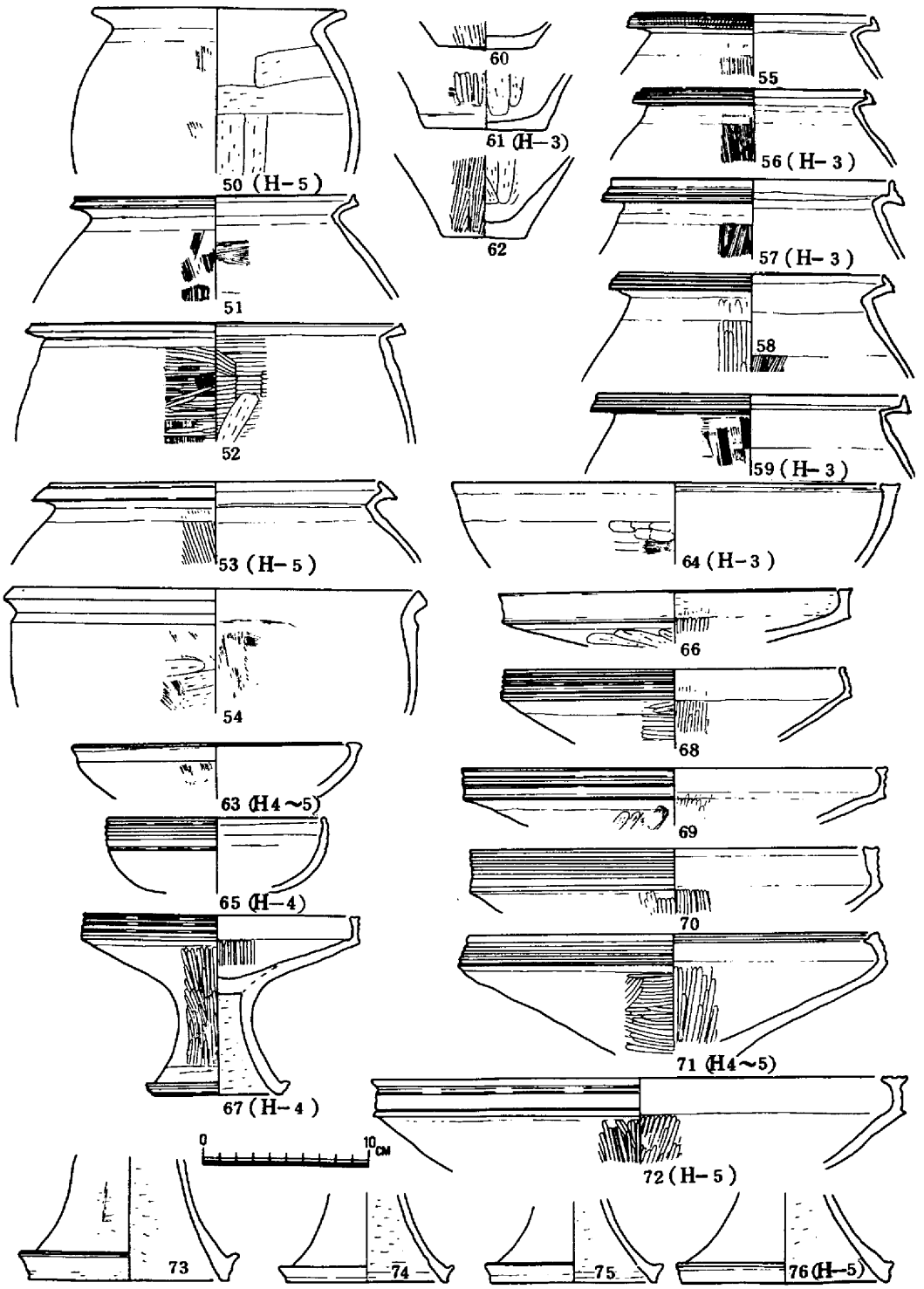
第7図　第3号住居址実測図　（1／80）



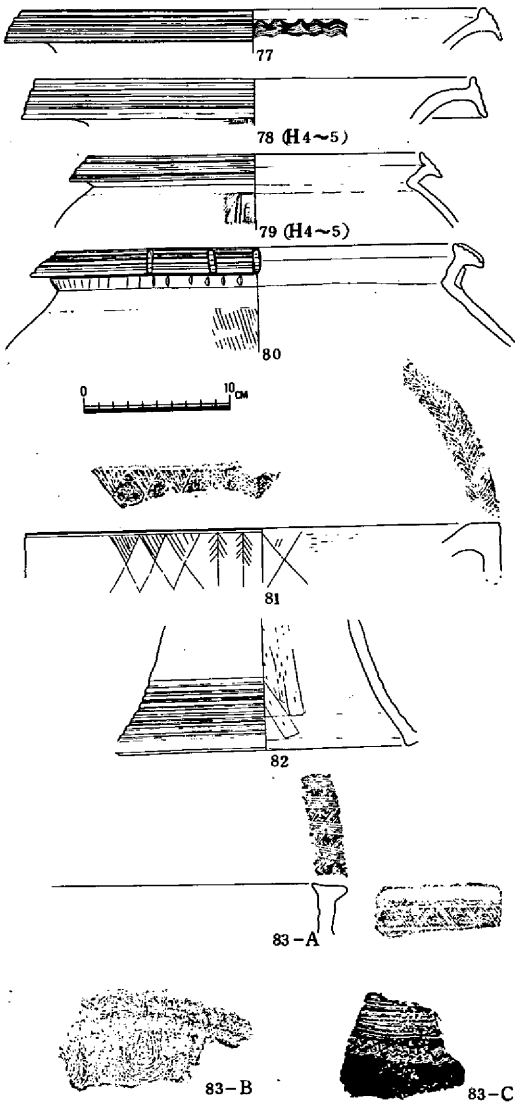
第8図　第4～6号住居址および建物址



第9図　第1地点南斜面出土遺物　(1)



第10図　第1地点南斜面出土遺物(2)



第１１図　　第１地点南斜面出土遺物

も北側２本と中央ピットが残るのみの住居址である。桂間は東西２１０cmを計る。この住居址に明確に伴うと思われる出土遺物はない。

＜建　物　址＞

これらの住居址の他に建物址あるいは棚列になるかのように桂穴列と思われるものが２列ある。一つは４号住居址を切った形で，直径約60 cm，深さ 40～60cm，柱間220cmを計り２間分つづく。もう一つは，少し小さい桂穴列で直径15～20cm，深さ40～50cm，桂間１60～２00cmを計り３間分つづく。北側は地山が高くなり，南側は削平されているが，住居址の桂穴が残っているので，もしこれが建物であるとすれば，桂穴は残る可能性があり，棚列であれば２～３間で終るものではなく，今の所どういうものであるのか断定することができない。

第１地点の遺構は以上のように南側肩部にのっている住居址群と柱穴列と考えるもので，住居址の時期も出土遺物から見てほとんど同一時期で中期最終末の中期の段階と考えてさしつかえない。

出土遺物は斜面ごとに掲載し主なものについては別表に記載したが，南斜面が案外同一時期のものが含まれているのに対し，北斜面からは，壺A_2，A_3，C_1，C_2，D_2，E_2，F_2，F_3，甕$_2$，甕$_3$，高杯A_2，B_2，B_2 L B_3，C_1，C_2，製塩土器V，U，ULなど案外幅のある中期５～６の時期を含んでいる。

また東斜面からは，壺A_1，A_2，A_3，D_1，E　，E_2，F_3，甕$_1$，甕$_2$．高杯A_1，C_1，鉢形土器，器台型土器，製塩土器U，V，UL，VLなど幅のある時期のものが出土しているが，総体的には新しい時期のものが多い。

土器の器形分類

弥生時代中期の土器の器形分類は，小林行雄．佐原真両氏による香川県紫雲出遺跡の報告において畿内から瀬戸内沿岸地域弥生時代中期の土器を諸々の面から詳細な比較検討がなされている。この城遺跡は，遺跡の性格は異にするが，時期的・地域的には瀬戸内海を挟んで紫雲出遺跡と相似た傾向を示している。このため土器の器形分類もおおむね，これに従い比較検討が行い易い様分類を試みた。

壺形土器

壺形土器A―口縁部は外反し筒状の頸部を持ち球形に近い豊かに胴のはった器体を持つ壺である。口縁端部あるいは頸部の凹線文手法の有無によりA_1～A_3に分類する。A_1は凹線文手法をほとんど取り入れてないもの。A_2は口縁端部にのみ凹線丈を施すもの。A_3は口縁端部および頸部にも凹線丈を施すものである。

壺形土器B－ラッパ状に開く頸部に数条の凸帯を巡らし凸帯の上には刻目文を巡らす。菰池遺跡のB_1の例では重心が下部に有り落ちついた器形である。吉備ではB_1のみでB_2．B_3は存在しない。

壺形土器C－いわゆる直口壺である。口縁部の長いものと短いものに別れる。また短いものの中には口径の小さいものと例は少ないが大きい広口のものが存在する。凹線文手法の有無によりC_1～C_3に分類する。

壺形土器D－いわゆる無頸壺である。口縁下の凹線文によりD_1～D_2に分類する。体部中程で「く」の字に曲るものと，丸くおさまるものがある。また短い脚台が付くものと付かないものが存在する。

壺形土器E－「く」の字状に外反する口縁部を持ち，体部は余り肩が張らず胸長のタイプのものである。E_1～E_3に分類する。

壺形土器F－「く」の字状の短い口縁部を持ち肩が強く張り胸部はEのように余り長くならないものである。F_1～F_3に分類する。F_1は口縁部が「く」の字状になるもの，F_2は口縁端部が上下に拡張されずに2～3条の凹線文を施すものであり，F_3は口縁端部を上下に拡張する。小型と大型(FL)とに分かれ小型(FS)のものには脚台がつくものが多い。口縁部，体部のみでは壺形土器E_1および甕形土器との区別が困難である。

壺形土器G－口縁部が外に向って曲折する，玉縁になるものもこれに含める。

甕形土器

甕形土器は，中期初頭の口縁部がほぼ水平になる「字状のものから除々にではあるが単に折り曲げるだけの「く」の字状を呈してくる。甕$_1$は広くこういったものまでを含み，肩が張るものと筒状になって底部近くで急激にしぼむものの2者が混在する。甕$_2$は「く」の字状になった口縁端部を肥厚させわずかに引きあげ，この端面に凹線文を2～3条施す。甕$_3$はさらに口縁端部を上下に拡張が著しくなり数条の凹線文を施すものである。甕$_2$，甕$_3$の方が総体的には甕$_1$より，時期的に後出するものであるが，単に「く」の字状に折りまげるものも併行して存続している。

高杯形土器

高杯形土器A－鉢形の杯部を持ち直径20cm前後の高杯である。口縁下の凹線文手法によりA_1・A_2に分類する。

高杯形土器B－口縁部が直立あるいはわずかに内傾し皿状の杯部を持つ高杯である。B_1の出土はないが紫雲出遺跡にいう口縁が内湾するB_1．B_2のものは，吉備地方では類例が少なく，別タイプのものと考えたい。口縁部にA種の凹線文が数条施されているものをB_2，凹線文が退化し，なでによる凹凸のみを有するものを後出と考えB_3とした。

高杯形土器C－椀形の杯部を持つ杯である。口縁下の凹線文手法によりC_1～C_2に分類する。

高杯形土器E－口縁部がほぼ水平に伸びる。内面に1条の隆起帯を巡らす。

なお，城遺跡では高杯形土器D，Fは認められない。

高杯形土器脚部－A，B型に含まれるものとC型高杯に含まれるものの区分，脚端部に凹線文の見られるものと見られないものなどに分類できるがここでは一括してあった。

大型高杯形土器－B型土器の大型品がこれに当る。口径35～42cmに達する。

大型鉢形土器－高杯土器のAを巨大化したようなもので，類例が少なく分類は行っていない。

器台形土器－いわゆる鼓形をした器台でこれも類例が少なく分類を行っていない。

蓋形土器－壺形土器A，Dに付く蓋であるが，これも4例しか出土していない。

製塩土器

この遺跡を特徴づけるのがこの製塩土器で中期に遡る製塩土器は，児島では仁伍遺跡，味野池尻保育園遺跡，倉敷市上東遺跡，香川県大空遺跡などで知られている程度である。

かって台付鉢形土器と呼ばれていたものであり，後期の前半の上東遺跡の各地点から脚部等を含め数千個体出土し，東鬼川市Ⅱの段階では脚台底部の大きさ器高などほとんど斎一化している。

外面は脚部から上に向ってヘラ削りを行い内面は刷毛あるいはヘラ状工具によって磨かれている。口縁部直径は20cmから大型のもので40cmに達する。ここでは鉢部が口縁からV字形になって脚部に向うものを製塩土器Vタイプ，U字形になるものを製塩土器Uタイプに分けた。それぞれはまた，口縁部直径の大きさにより，30cm以上のものをVL，ULに分けた。

第1次調査　壺形土器（第5図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
D_2	1	口径 11.3 cm	口縁部に4条＋1条の凹線文を施し，口縁下に蓋受けの孔を穿つ。		淡茶褐色	
F_2L	2	口径 17.4 cm	「く」の字状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し数条の凹線文を施す。3, 4はその上に棒状浮文を，3はさらに円形浮文を加える。	体部外面は刷毛目調整を行う。4の下半部は横方向の篦磨きを行っている。内面下半部は刷毛目調整を行い上半部は指頭圧痕を残す。	暗茶褐色	
	3	口径 20 cm			茶褐色	
	4	口径 19.8 cm			灰黄色	
	10	口径 16 cm			淡褐色	10も小型のF_2の可能性がある。
F_2	12	口径 11 cm	「く」の字状に外反した口縁部を持ち，球形に近い体部を持つ。	体部外面は刷毛，内面下半部は下からの篦削りを行う。		
甕形土器						
甕$_2$	6	口径 15 cm	「く」の字状に外反する口縁部をわずかに肥厚しそこに凹線文2条を施す。	体部内外面とも刷毛目調整を行う。	暗褐色	
甕$_3$	7	口径 12.5 cm	「く」の字状に外反し，口縁端部を上下に拡張し，凹線文数条を施す。11は体部肩に板状工具による列点文を巡らす。	体部外面上半は刷毛，下半は篦磨きを行う。内面は体部中位まで下方向から篦削りを行っている。	赤褐色	
	8	〃 16.4 cm			明褐色	
	9	〃 12.4 cm			暗褐色	
	11	口径 16.0 器高 33.5 底径 7.0			淡褐色	
高杯形土器						
A_1	14	口径 19.4 cm	鉢形の杯部を持つ高杯で，14は口縁部をわずかに外側に，15は内側につまみ出す。	15は内外面とも丁寧な篦磨きを行う。	明褐色	
	15	〃 25.5 cm			明褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
B_1	16	口径 184 cm	直立する口縁上端をわずかに肥厚させる。	口縁部はなでによる凹凸がみられる。杯部外面は横方向の，内面は縦方向の篦磨きを行う。	褐色	
B_2	17 18	口径 23.8 cm 〃 24.4 cm	18は杯部から口縁部にかけて丸みをもってたち上る。	18の杯部外面は縦方向の篦削り，内面は縦方向の篦磨きを行う。	暗茶褐色 淡黄褐色	
脚部$_2$	20 21	脚部径 13.8 cm 〃 13.6 cm	20は三角透しを持ち両者共脚端部に数条の凹線文を持つ。	外面は刷毛，内面は篦削りを行う。	淡黄褐色 暗茶褐色	

第1地点南斜面　壺形土器（第9図）

A_2	22	口径 10.5 cm	短い筒状の頸部からわずかに外反し，口縁部を上下に拡張する。体部中程で肩がはりすんなりと底部に向う。	口縁端面および頸部に横なでによる凹凸を持つ。 体部外面は刷毛目調整を行い，肩部に刷毛状工具による刻目文をめぐらす。	黄褐色	
A_2	24	口径 12 cm	ラッパ状に開く口頸部から余り肩がはらず球形に近い体部になると思われる。	体部は刷毛目調整を行うが，口頸部はほとんど全体をなでによって仕上げている。	内－黒褐色 外－黄褐色	
A_2 A_3	23 26 27 28 29 30 31 78 77	口径 133 cm 〃 24.5 cm 〃 22.7 cm 〃 20.6 cm 〃 17.3 cm 〃 20 cm 〃 34.2 cm 口径 297 cm 〃 312 cm	筒状の頸部から外反し口縁端部を上下に拡張する。	口縁部端面のみに凹線文施す例（27）があり，これは貼附け棒状・円形浮文を交互に，28は4ケ1組の棒状浮文を施している。他のものは頸部にも数条の凹線文を施している。また，口縁部内面に櫛描波状文を施す例（79－2）もある。	明褐色 淡茶色 黄白色 暗赤褐色 暗赤褐色 (明)淡褐色 内：赤褐色 外：淡赤褐色 黄白色	27は頸部中程に穿孔している。

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
C_2	34	口径 12.6 cm	いわゆる直口壺の口頸部の破片である。 口頸部に孔をうがっている。 口頸部と体部境に凸帯をめぐらす。	口頸部には5条の凹線文を施し，その上から篦状工具により凸帯上まで沈線を上下に施している。 内面は丁寧な篦磨きを行っている。	淡黄色	黄褐色を呈するこの手の工器は少く装飾を多く用いこの遺跡では特異な部類に入る。
D_1	37	口径 12.5 cm	いわゆる無頸壺である。口縁部に蓋受けの穴を2孔穿っている。	体部外面は刷毛目調整を行う。肩に板状工具による列点文をめぐらす。	茶褐色	43はこれらD型土器の脚台になるかも知れない。
D_2	35 36	口径 11.3 cm 〃 9.6 cm	口縁下に数条の凹線文を施す。34はさらに3ケの棒状浮文を貼附ける。	凹線文下は篦磨きを行う。 内面下半部は篦削りを行う。	黄(褐色) (褐色) (乳白色)	
F_2	79 80	口径 26.6 cm 〃 27 cm	「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張し，そこに凹線文をめぐらす。80はさらに棒状浮文を貼付けている。	内外面とも刷毛目調整を行う。80頸部には凸帯をめぐらし刻目文をつける。		

甕形土器（第10図）

甕$_2$	51 52	口径 16.4 cm 〃 21.9 cm	「く」の字状に外反する口縁部の端部をわずかに上につまみあげる。51の体部は少し肩がはり，52はすんなり長く底部につづく。	51は内外面とも刷毛調整で仕上げ，52の外面は刷毛調整の後篦磨きを，内面は上半部は篦磨き，下半部は篦削り調整を行っている。	淡茶褐色 茶褐色	
甕$_3$	53 55 56 59	口径 19.5 cm 〃 14.2 cm 〃 13.3 cm 〃 16.8 cm	「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張しそこに数条の凹線文をめぐらす。55はさらにその上に篦による刻目文を施す。	体部外面は，刷毛，篦磨き調整を行っている。	茶褐色 〃 (内淡褐色 外茶褐色) 内暗灰色 外 淡茶褐色	

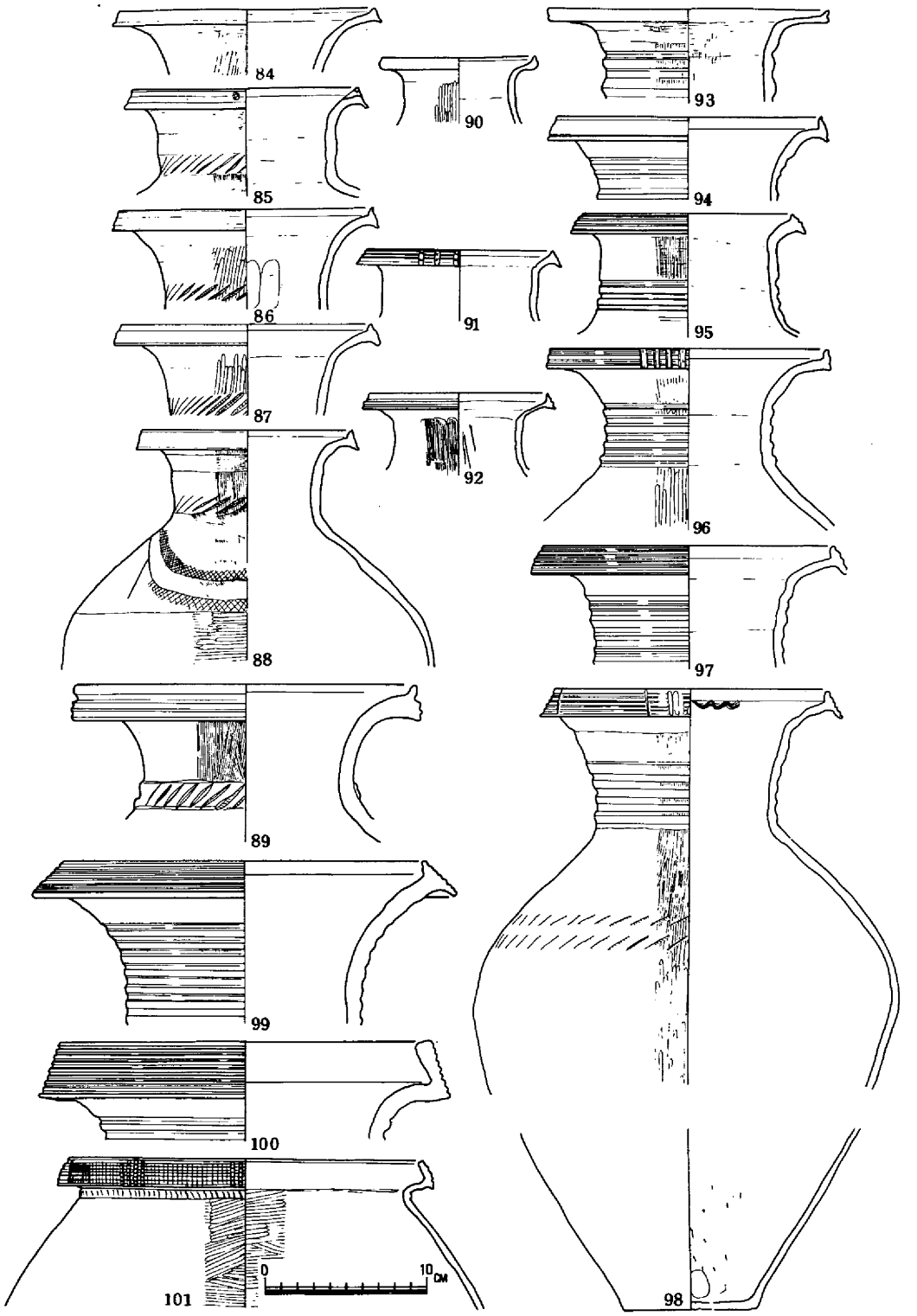
類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
底部	38 39 40 41 42 43 60 61 62	底径 12 cm 〃 11.6 cm 〃 6. cm 〃 12.2 cm 〃 10.8 cm 〃 6.8 cm 〃 5.8 cm 〃 7.3 cm 〃 4.8 cm		底部内面は篦削りを行っている。	内茶褐色 外淡褐色 ～黒色 内灰褐色 外 〃 暗明褐色 内黒 外淡黄褐色 内淡黄褐色 外赤褐色 内黒 色 外暗灰紫色	38～40は壺形土器の底部？。 42は甑になる。

高杯形土器（第10図）

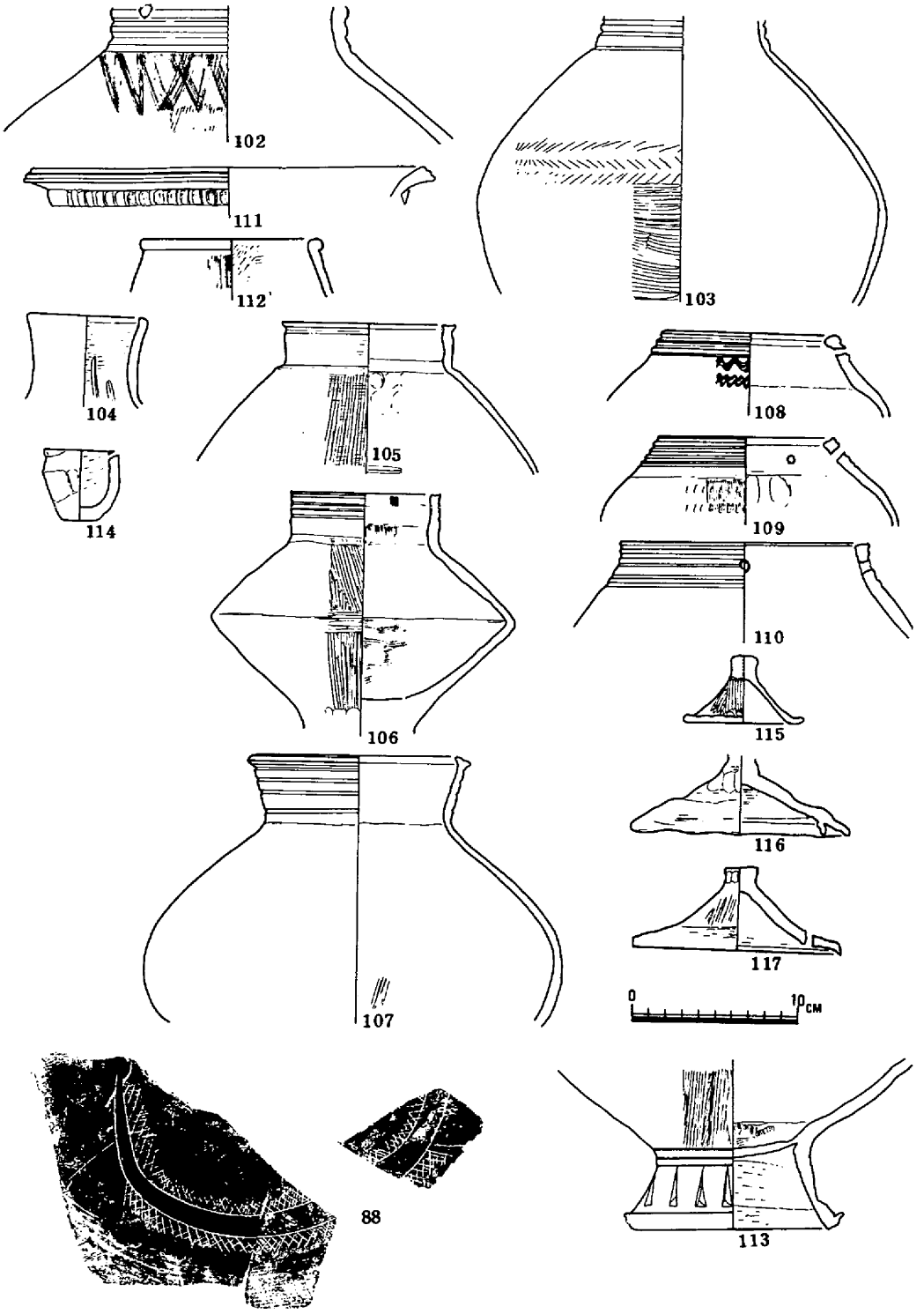
A_1 A_1	63 64	口径 15.4 cm 〃 24.7 cm	浅く鉢形の杯部を持つ。 63より大型になる。	口縁部をなでによって仕上げている。 杯部上端はなで，部分的に四角い形で篦で削り取っている。	内茶褐色 外 黒 内茶褐色 外黒褐色	
B_1	66	口径 19.6 cm	口縁部は垂直に立ち上り，なでによって仕上げる。	杯部外面は横方向の篦削り，内面は篦磨きを行う。		
B_2 B_2L 脚部	67 68 69 70 71 72	口径 15.8 cm 器高 11 cm 脚径 7 cm 口径 19.8 cm 〃 24.4 cm 〃 22.8 cm 〃 22.9 cm 〃 29.2 cm	口縁部はわずかに内傾して立ち上り数条の凹線文を施し，口縁端部にも凹線文が見られるものも存在する。 脚部はすべて無孔で端部をわずかにつまみあげている。	杯部内外面とも丁寧な篦磨きを行っているが69は外面のみ篦削りを行っている。 72はB_2Lで口縁端面に凹線文3条を施す。 脚外面は篦磨き端部のみをなでる。内面はすべて篦削りを行っている。	淡 黄 色 内（赤）茶褐色 外赤褐色 一黒色 内黄茶褐色 外暗茶褐色	脚部内面の篦削りは下から見た場合時計の廻る方向と同じである。これは，製塩土器脚部の篦削り方向とも一致する。
C_2	65	口径 12.7 cm	口縁部に4条の凹線文を施し椀形の杯部を持つ。		黄 褐 色	

器台形土器（第１１図）

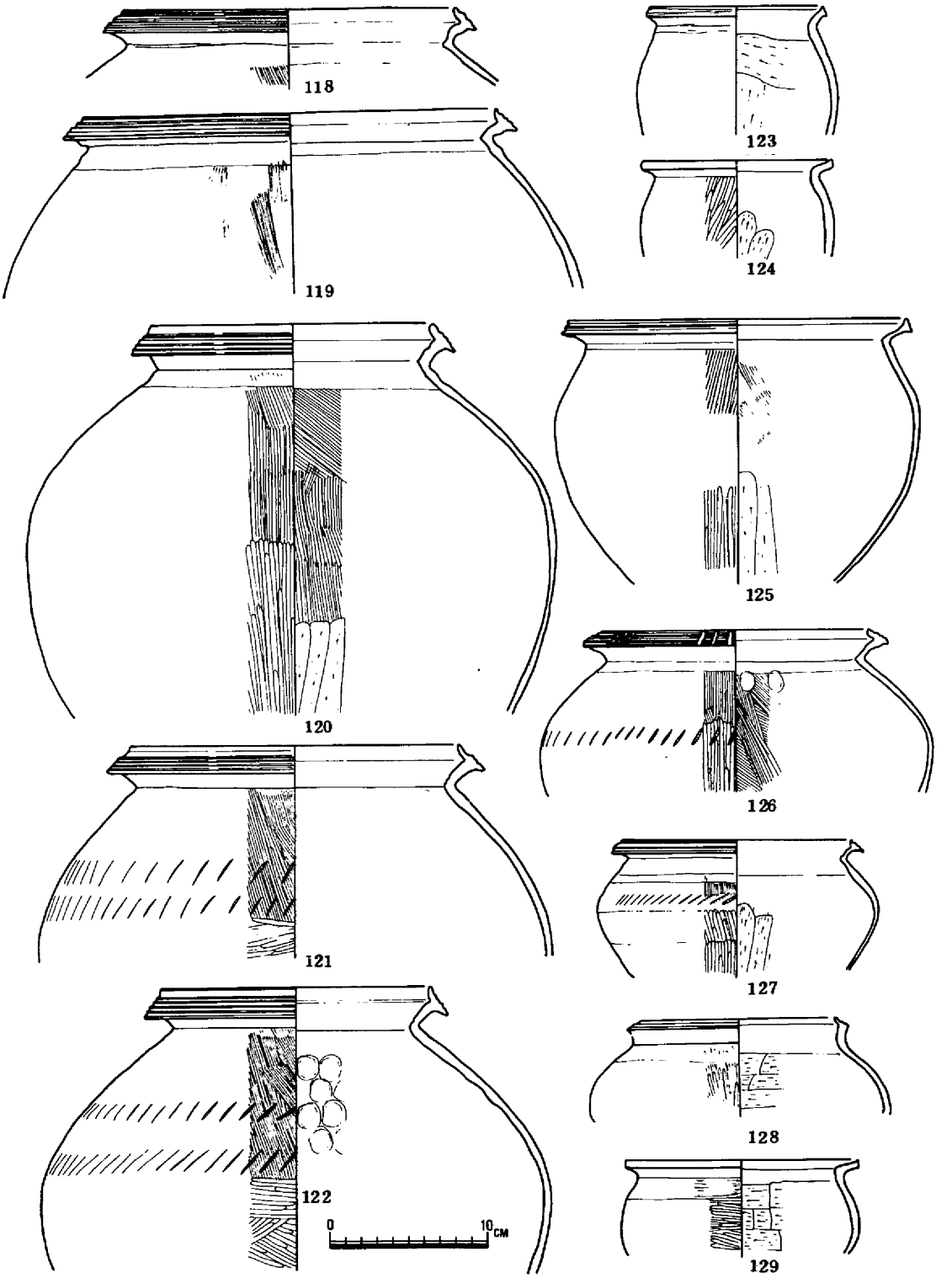
類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
	81	口径 28 cm	口縁部はまっすぐ下にさがり，その面に鋸歯文，綾杉文を交互にあしらう。口縁上端部は 2 cm水平になり，綾杉状の線描を施す。			口縁部のみの破片である。
	82	脚径 19.4 cm	下半部に８条の凹線文を施す。	内面は篦削りを行う。	淡灰色	



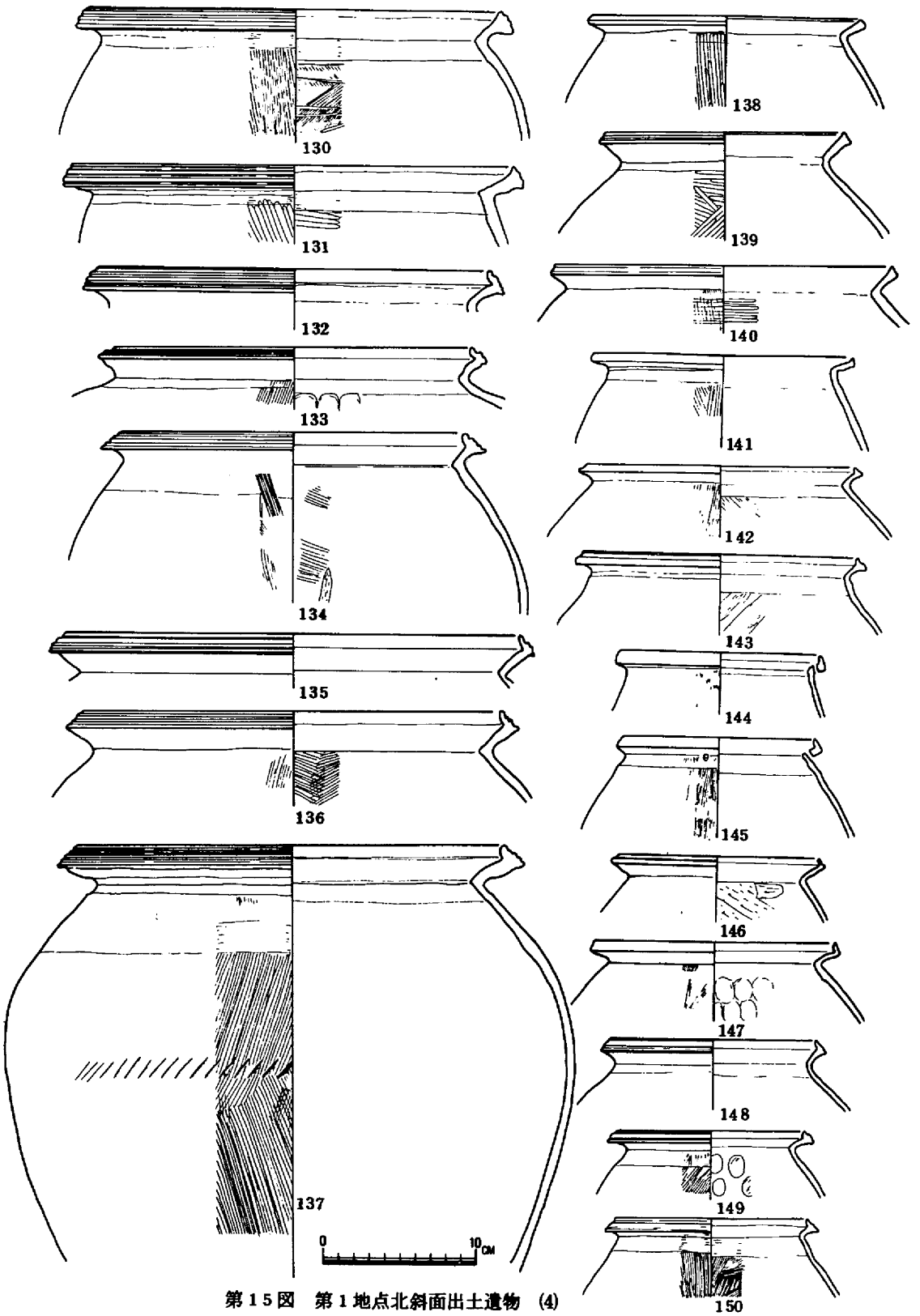
第１２図　第１地点北斜面出土遺物　(1)



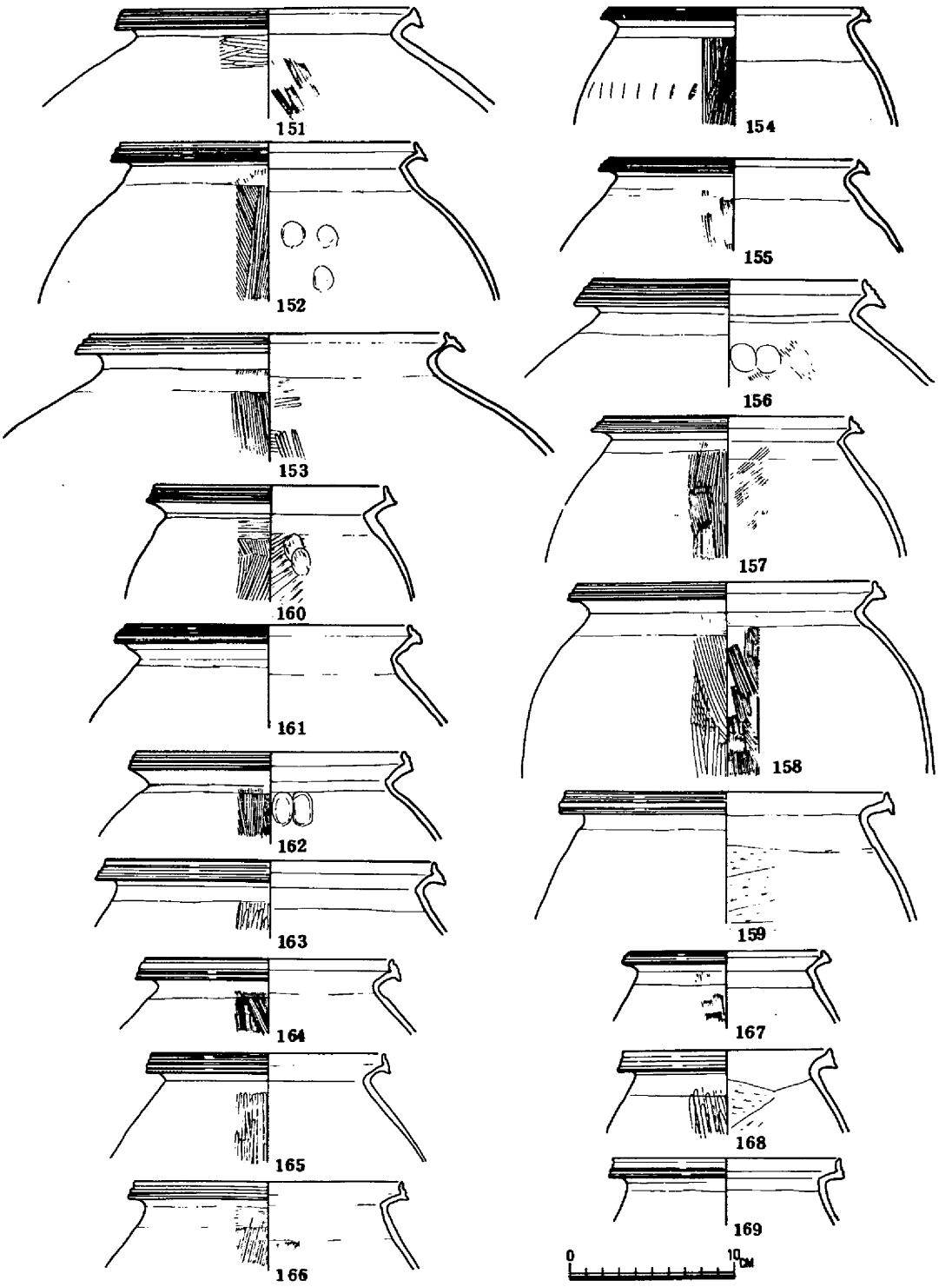
第１３図　第１地点北斜面出土遺物　(2)



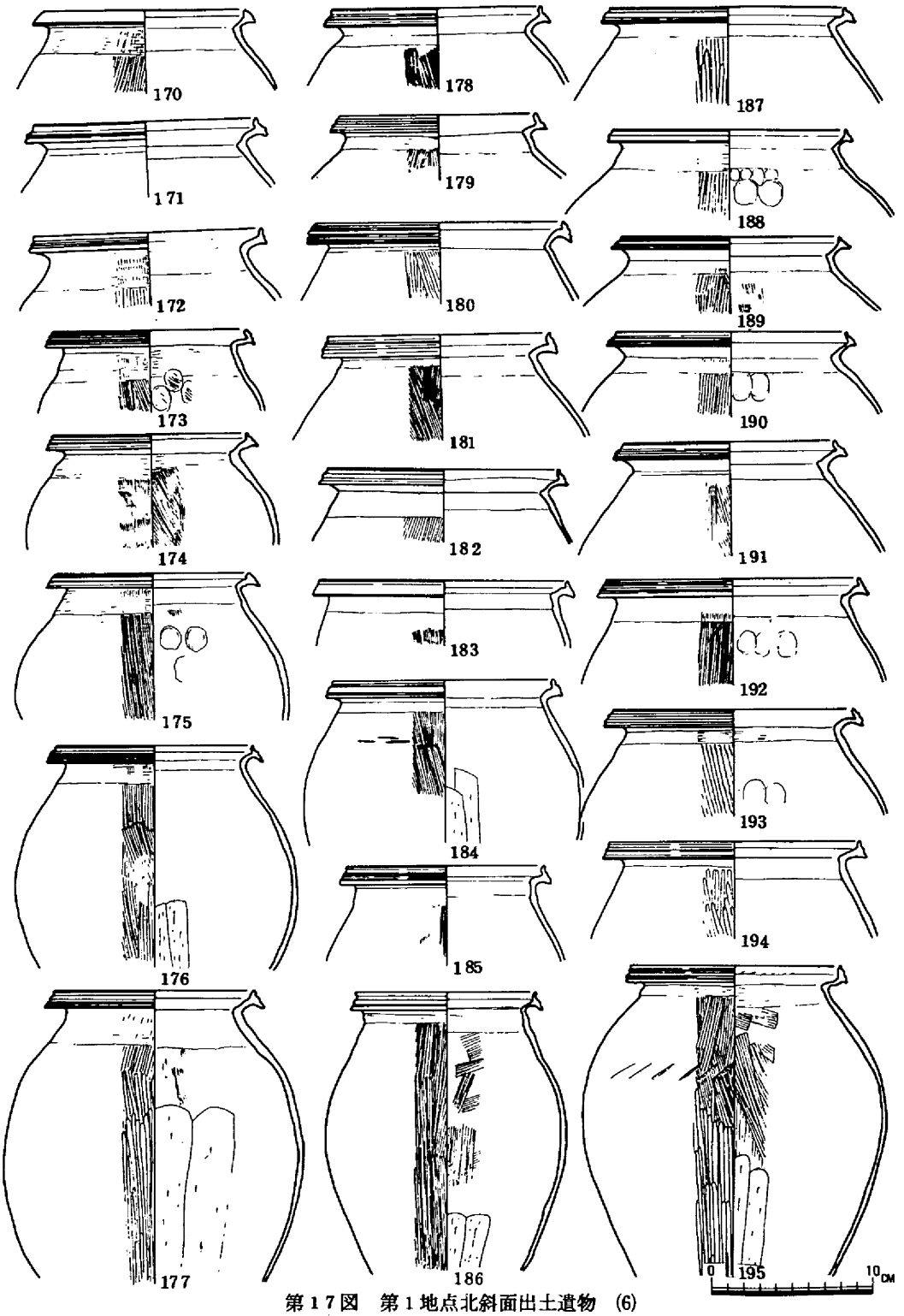
第14図　第1地点北斜面出土遺物　(3)



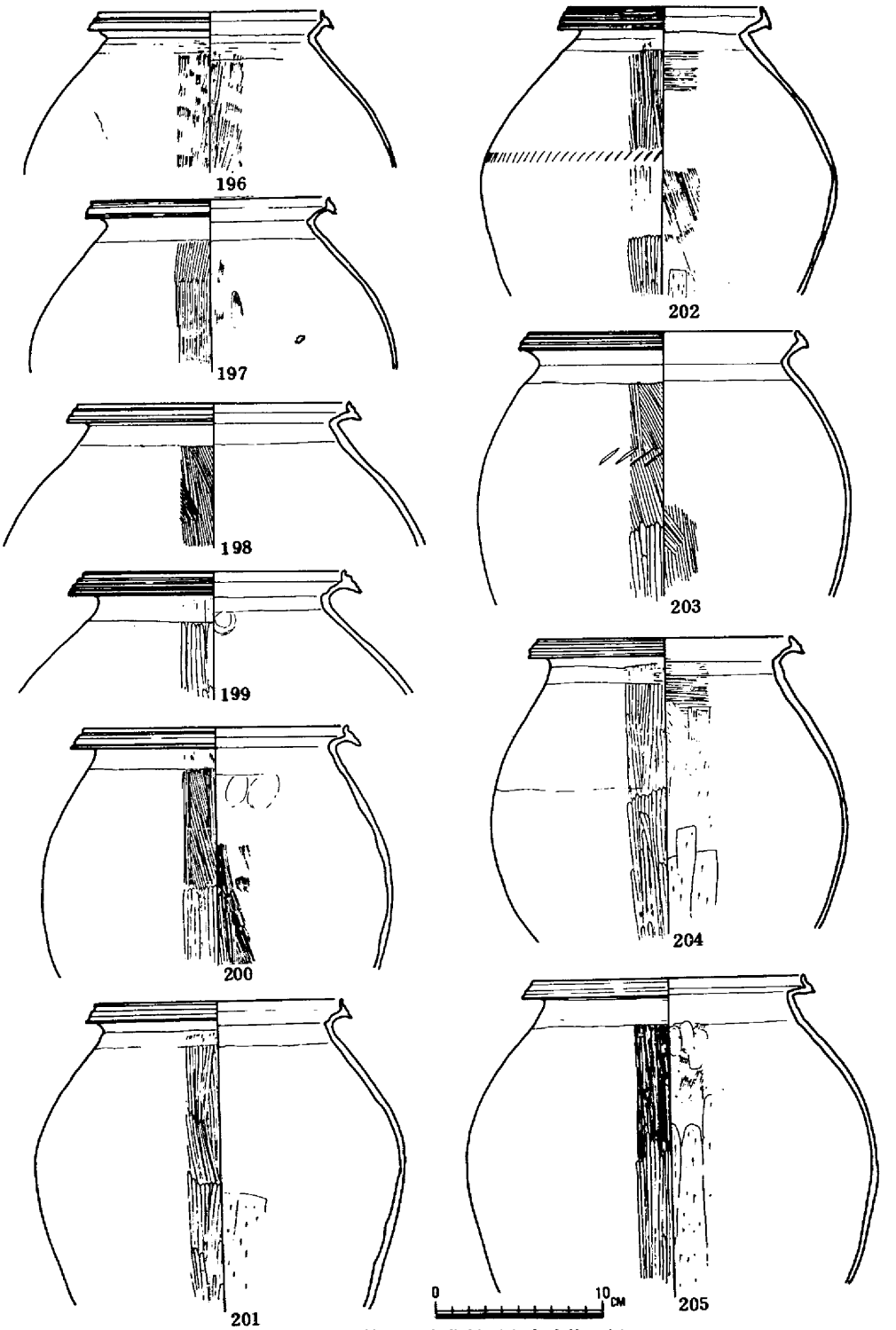
第15図　第1地点北斜面出土遺物　(4)



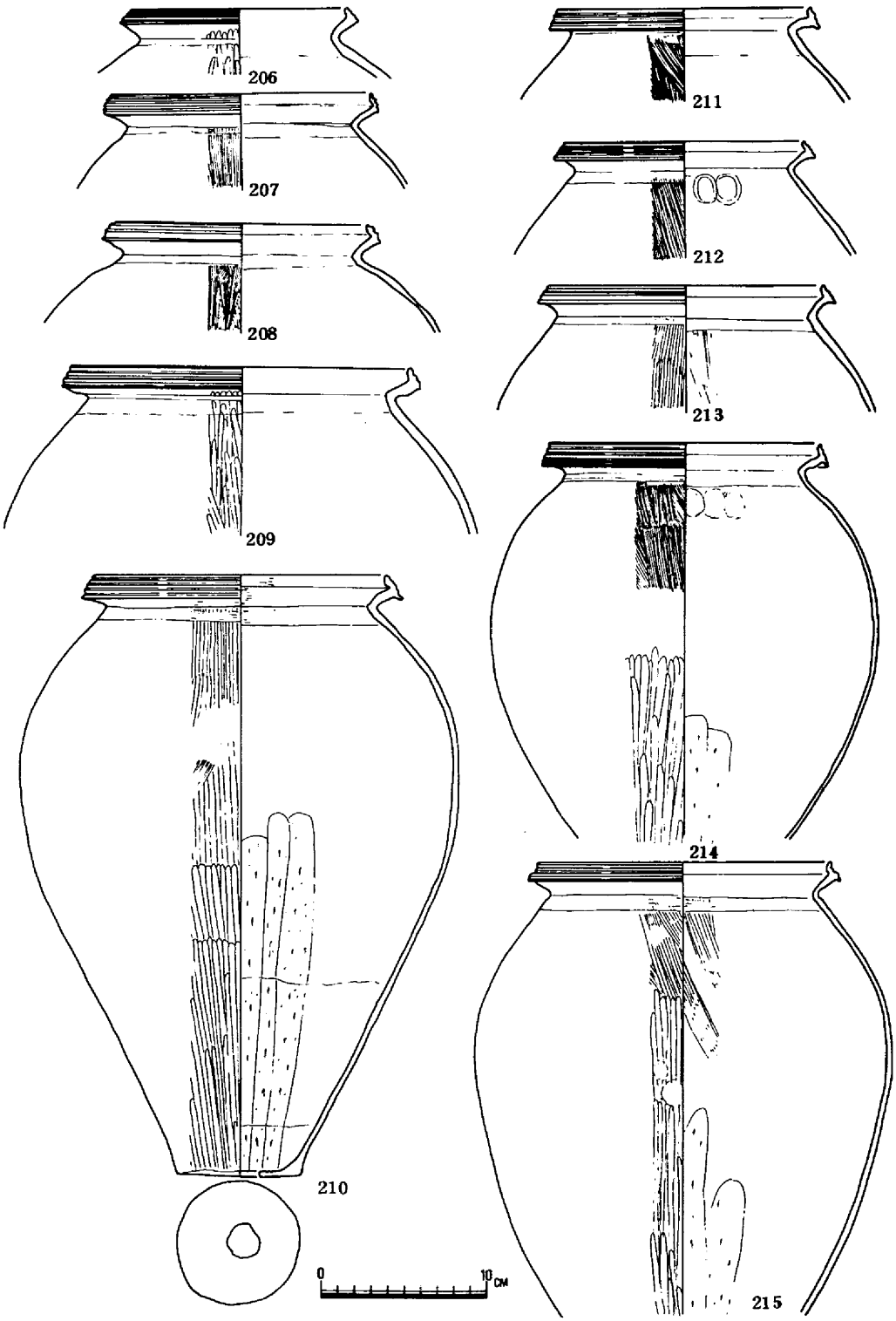
第16図　第1地点北斜面出土遺物　(5)



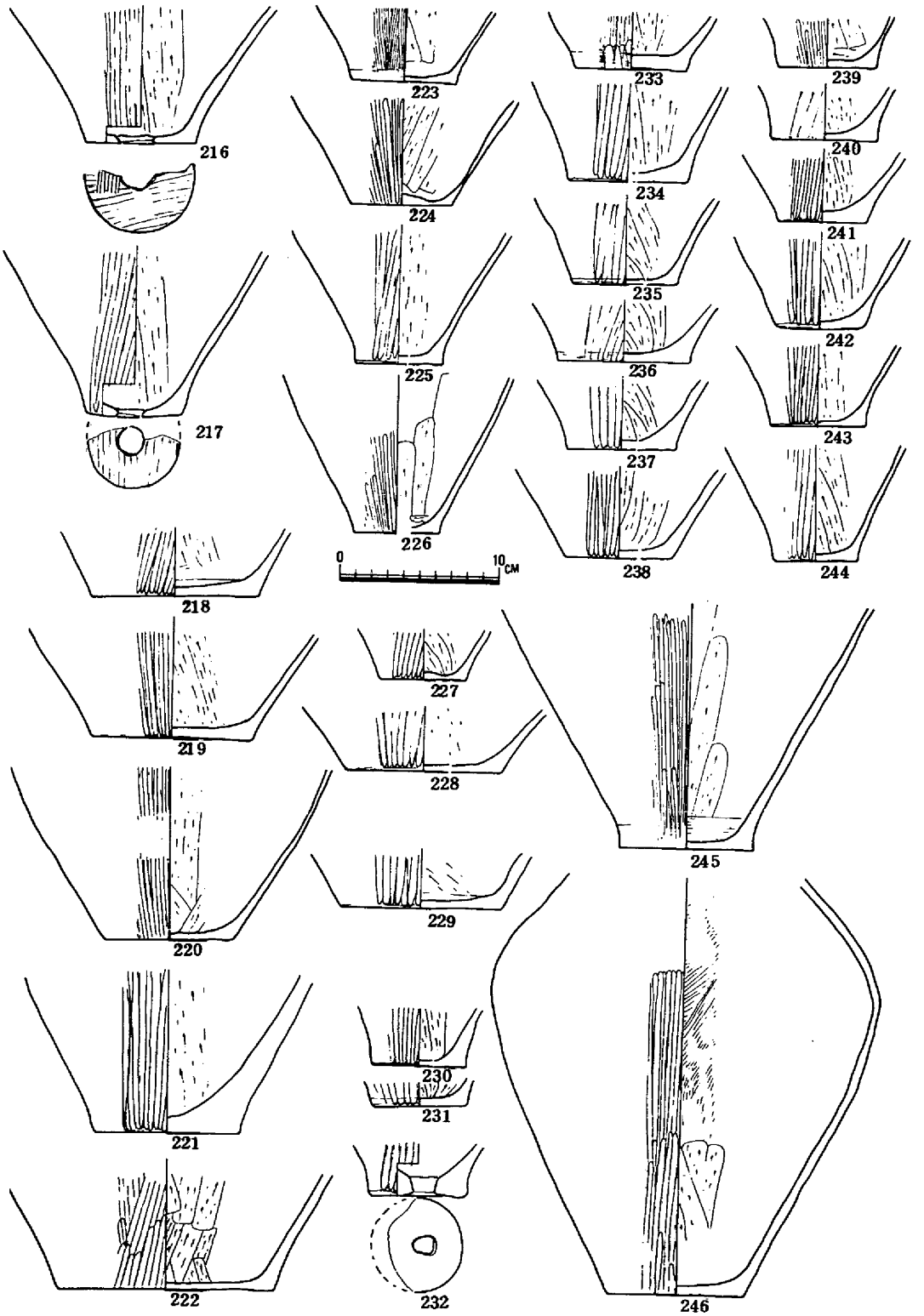
第17図　第1地点北斜面出土遺物　(6)



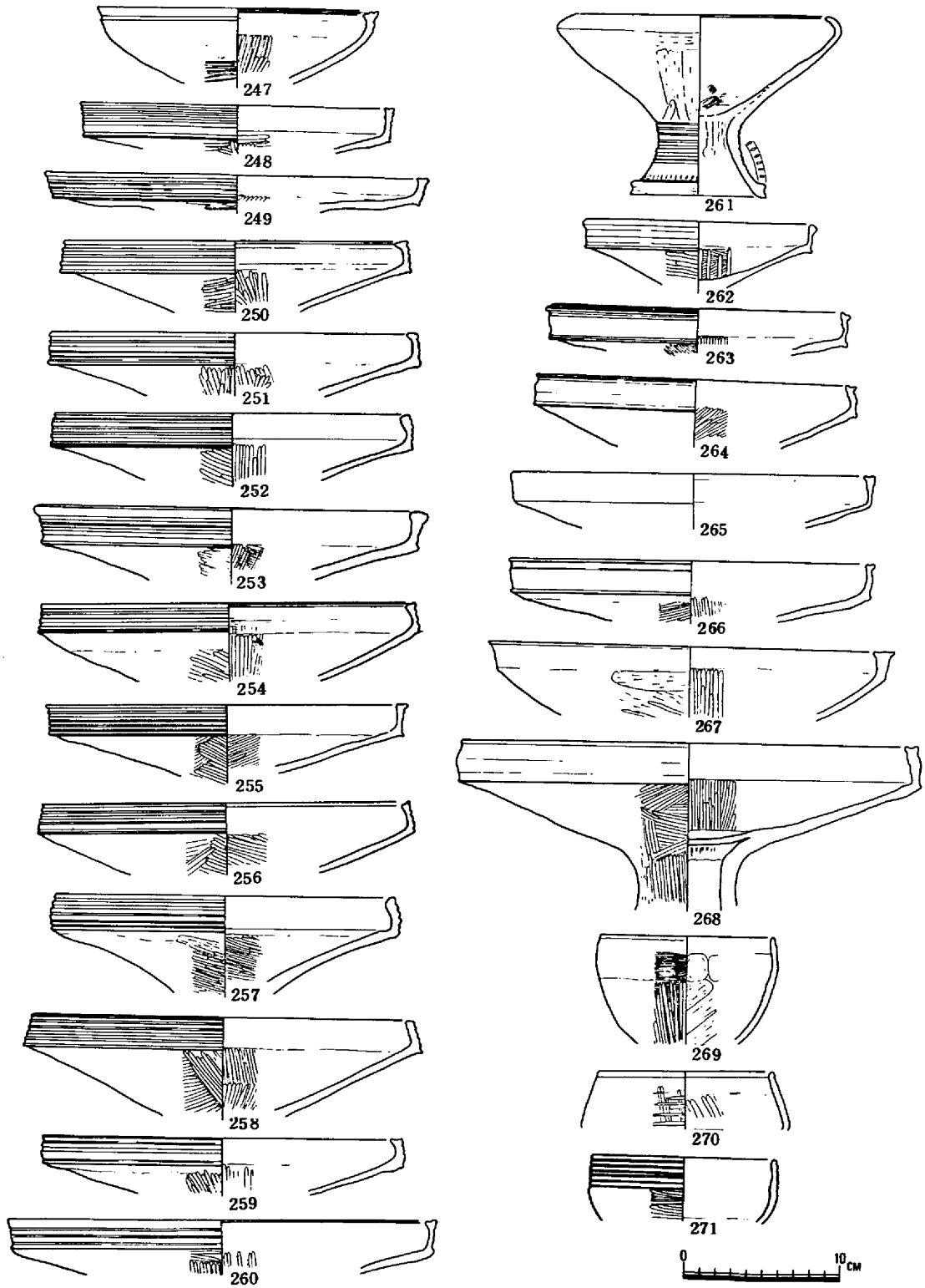
第18図　第1地点北斜面出土遺物　(7)



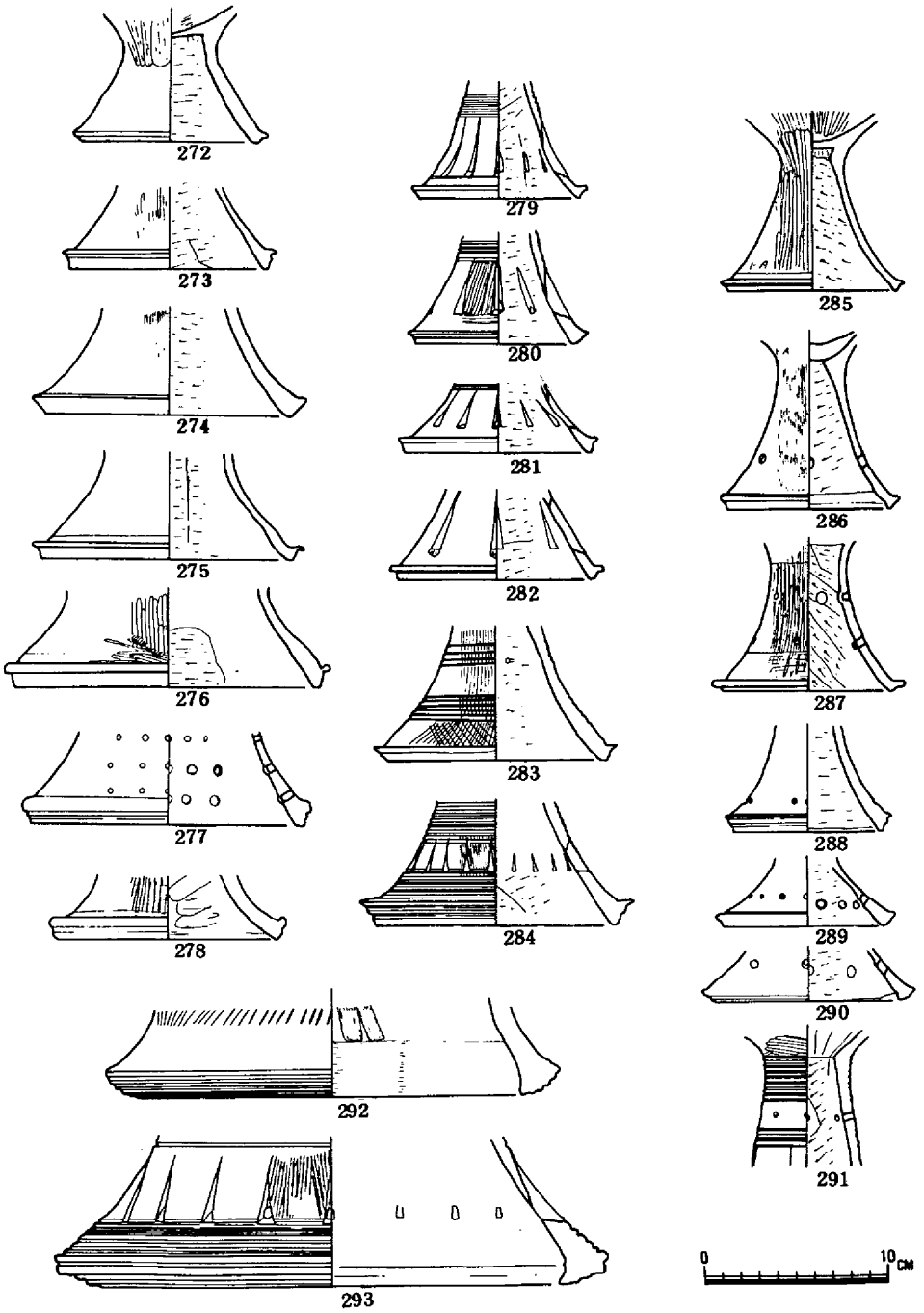
第19図　第1地点北斜面出土遺物　(8)



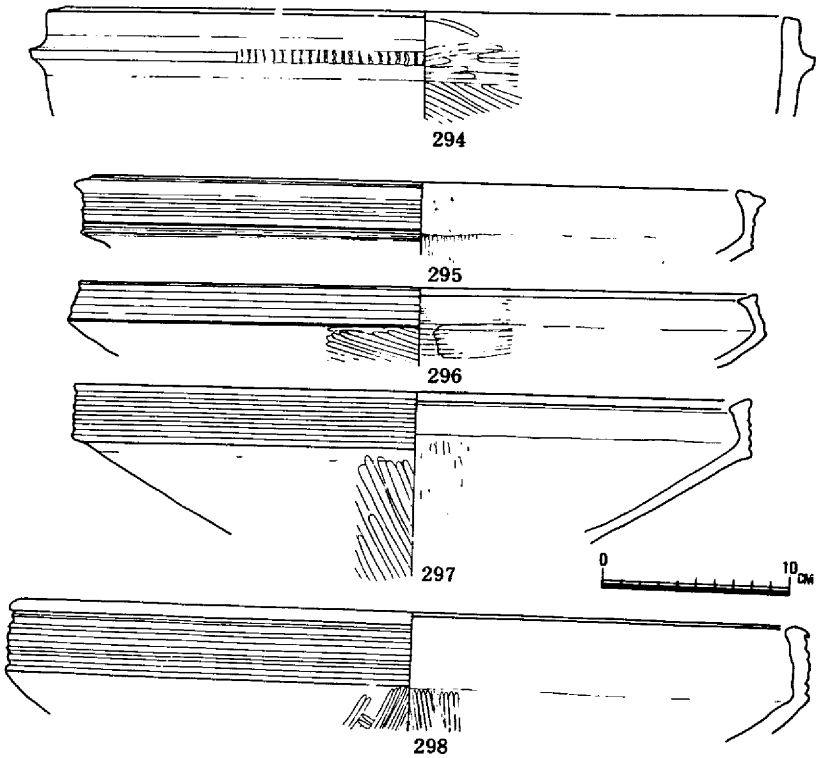
第２０図　第１地点北斜面出土遺物　(9)



第21図　第1地点北斜面出土遺物 (10)



第22図　第1地点北斜面出土遺物 (11)



第23図　第1地点北針面出土遺物 (12)

第1地点北斜面　<壺形土器>（第12図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_2	84	口径 15.7 cm	筒状の頸部から外反する口縁部を持つ。 口縁端部は上下に拡張し，凹線文を持つものも存在する（88）。 頸部に板目状工具による刻目文をめぐらす。	口縁部から頸部の外面は刷毛あるいは篦磨きによって調整後なでによって仕上げを行っている。	暗褐色	87は船状の線描文様を描いている。
	85	〃 13.8 cm			淡茶色	
	86	〃 15.7 cm			茶褐色	
	87	〃 15.2 cm			淡赤褐色	
	88	〃 12.9 cm			茶褐色	
	89	〃 20.9 cm			茶褐色	
	90	〃 9.5 cm			淡茶褐色	
	91	〃 11.5 cm			内赤褐色 外淡茶色	
	92	〃 11 cm			赤褐色	
A_3	93	口径 17.1 cm	筒状の頸部と拡張した口縁端部に凹線文を持つのが上記のものと異る点である。	口縁端部の凹線文上に棒状浮文を施す例（95・97），内面に櫛描文を施す例（97），体部肩に板目状工具に	(淡)茶色	
	94	〃 15.8 cm				
	95	〃 12.6 cm			茶褐色 内茶灰色	
	96	〃 16.8 cm			外暗茶褐色 暗赤褐色	
	97	〃 17.6 cm			赤褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_3	98 99	口径 16.7 cm 器高 40.6 cm 底径 8 cm 口径 21.8 cm		よる刻目文を2列めぐらす。 体部外面は，刷毛目・肩部以下は，箆磨きを行い，内面下半部は1／3程を箆削り調整を行っている。	黄褐色	
	100 101	口径 21 cm 口径 21.2 cm	口縁部がわずかに内傾して立ち上る。頸部には凹線文を施す。	口縁部凹線文上に4ケ1組の棒状浮文を配置し，さらに箆状工具によって沈線を施す。 頸部の凸帯上には箆圧痕をめぐらしている。 内外面とも丁寧な箆磨きを行っている。	赤褐色 黄色	
C_2	104	口径 62 cm	細口直口壺である。直立する口縁部に一条〜数条の凹線文をめぐらす。		茶褐色	
C_3	105 106 107	口径 8.7 cm 〃 7.8 cm 〃 11.6 cm	口頸部がほゞ直立し，体部中程で急角度を持って曲るものと，すんなり弧を描くものがある。 脚台を持つものと持たないものがある。	外面は丁寧な刷毛および箆磨きを行っている。内面は刷毛，箆磨きにより調整を行っている。104は体部上端に指頭圧痕を残している。	黄褐色 淡灰色(紫) 黄白色	この遺跡では見られないが把っ手を持つものもある。
D_2	108 109 110	口径 9 cm 〃 9.4 cm 〃 13.3 cm	いわゆる無頸壺型土器で，口縁下に数条の凹線文をめぐらし，更に108は櫛描波状文を2条，109は板	外面は刷毛目調整を行う。内面は指頭圧痕を残している。	赤褐色 暗赤褐色	脚台を持つものと持たないものが存在する。

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
D_2			目状工具による刺突文を2列めぐらす。 口縁下に蓋受けの孔をうがっている。			

<蓋形土器>（第13図）

	115 116 117	口径 6.7 cm 器高 4.0 cm 口径 13.3 cm 〃 12.7 cm 器高 5.0 cm	笠形をし上部につまみを持つ。115は小型のもので，116は手捏のようで均整もとれていない。117は紐孔をもつ。	115，116外面は篦磨き，内面はなでによって仕上げる。	茶褐色 茶褐色	

<壺形土器>（第14・15図）

F_1	123 124 125	口径 10.6 cm 〃 11.6 cm 〃 20.8 cm	「く」の字状に外反する口縁部に胴長の体部を持つもの（123）と球状になるもの(125)がある。	体部外面は刷毛調整，篦磨きを行い，内面は横あるいは縦方向の篦削りを行っている。		
F_2	125 128	口径 20.8 cm 〃 11.8 cm	口縁部を少し肥厚させ凹線文を施す。	128は体部外面上半は刷毛調整，下半部は篦磨きを行い，内面上半は刷毛調整，下半部は篦削りを行う。 125の体部外面は篦磨き，内面は横方向の篦削りを行う。		125は別の型に入るのかも知れない。
F_3	126 127	口径 16.5 cm 〃 14 cm	口縁端部を上下に拡張し凹線文を施す。 127は3ケ1組の棒状浮文を貼附ける。体部中程に板状工具による列点文を巡らす。	体部外面上半に刷毛調整，下半は篦磨きを行う。内面は刷毛調整123の下半は篦削りを行っている。		213もF_3に入るかも知れない。

＜壺形土器＞（第１４図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
F_3L	118 119 120 121 122 151 152 153 156	口径 20.6 cm 〃 26 cm 〃 17.6 cm 〃 20.5 cm 〃 16.8 cm 〃 17.6 cm 〃 17.8 cm 〃 21.5 cm 〃 16.2 cm	「く」の字状に外反する口縁の端部を上下に拡張し数条の凹線文を施す。体部中程で口縁部直径の倍以上に良く張り球形を呈する。 121，122は体部上半に板状工具による列点文を２列巡らす。	体部外面上半は刷毛下半は120は縦方向の121，122は横方向の篦磨きを行い。内面上半は刷毛調整後指頭圧痕を残すもの（122）も見られる。120下半部は篦削りが行われている。		

＜甕形土器＞（第１５～２０図）

甕$_2$	138 139 140 141 142 143 151 144 145 146 147 148 149 150 214 204 152 176 195 178 179 180 181 200 203	口径 17.6 cm 〃 15.7 cm 〃 22.1 cm 〃 17 cm 〃 17.6 cm 〃 17.9 cm 〃 17.6cm 〃 12.8 cm 〃 12.3 cm 〃 13 cm 〃 15.5 cm 〃 13.3 cm 〃 12 cm 〃 12.5 cm 〃 16.3 cm 〃 14.8 cm 〃 17.8 cm 〃 11.8 cm 〃 12.9 cm 〃 12.7 cm 〃 11.8 cm 〃 15 cm 〃 13.5 cm 〃 15.6 cm 〃 15.6 cm	「く」の字状に外反する口縁の端部をそのまゝおさえるものとわずかに端部を上につまみ出し凹線文を施しているものがある。 体部は，肩がよく張るものと，ほとんど張らずに底部に向うものが混在する。	体部外面は刷毛調整，篦磨きを行い，内面は刷毛調整，篦磨き(200)篦削り（203，142）を行い，指頭圧痕を残すものもある（151，143，148）。	内淡茶灰色 外淡灰褐色 内淡茶灰色 外淡黄褐色 淡赤褐色 淡褐色 内黄褐色 外暗灰紫色 淡赤褐色	143は体部内面上部まで篦削りを行っている。 144，145は頸部に穿孔を行っている。

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
甕$_2$（甑も含まれる）	～215		「く」の字状に外反する口縁の端部を上下に拡張し凹線文を施す。 体部はわずかに張り底部に向う。甕の中にも板状工具による列点文を巡らすものも数例見られる。	体部外面上半は刷毛調整，下半は縦方向の箆磨きを行うものがほとんどであるが，頸部まで箆磨きを行っているものもある。なでは頸数下わずかに行われるものと数cmに達するものもある。 内面は上半が刷毛調整を行い後に指頭圧痕を残すものが見られる。下半部が残っているもののほとんどは下方向からの箆削りが行われている。		甕$_2$以外215までがほとんど甕$_2$に含まれる。口縁直径も大小さまざまで色調・質も種々のものがあり，又二次的に火を受けているものも多い。また甕$_2$に入る可能性のものも何点かが含まれるし，特に130～137の中には明らかに壺形土器F_2～F_3に入るべきものがある。
甕(甑)底部	216～246					

＜高杯形土器＞（第21・22図）

A_2	247	口径15.6cm	鉢状の杯部を持ち口縁下に十条の，わずかに内傾する端部に二条の凹線文を施す。	杯部外面は横方向の内面は縦方向の箆磨きを行う。		A型土器は図化出来る以外のものも含め量的には非常に少ない。
B_3	265 266 267 268 262 263 264	口径22cm 〃 22.1cm 〃 23.4cm 〃 27.6cm 〃 14.2cm 〃 18.4cm 〃 19cm	皿状の杯部に垂直あるいはわずかに内傾して立ち上る口縁部を持ち，なでによる凹凸が見られる。	杯部内外面共丁寧な箆磨きが行われている。	赤褐色	
B_2	248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260	口径18cm 〃 22.2cm 〃 20cm 〃 21.4cm 〃 20.8cm 〃 22.4cm 〃 22cm 〃 21.2cm 〃 22cm 〃 21cm 〃 22.8cm 〃 21cm 〃 25.6cm	立ち上る口縁部に数条の凹線文を施す。	杯部内外面共丁寧な箆磨きが行われている。		

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
B_2	261	口径 159 cm	鉢状の杯部から口縁部が内彎する。 脚部に七条の凹線文端に，刺突列点文を巡らす。	杯部外面は篦削り，内面は刷毛調整を行う。 脚部内面はしぼり跡が見られるが篦削りは行っていない。		この手はこの1点のみである。
C_1	269 270	口径 10.8 cm 〃 10.8 cm	椀状になる杯部を持ち，270はわずかに口縁部が内傾する。	269杯部上半は細い丁寧な，下半は普通の篦磨きを行う。内面は篦磨きを行い上部に指頭圧痕を残す。 263は内外面共篦磨きを行う。		
C_2	271	口径 11.3 cm	口縁部に六条の凹線文を施す。	杯部凹線文下は横方向の篦磨きを行う。		
脚部	272 〜 291	脚径 9 cm	「ハ」の字形をした高杯の脚部である。外面は無文のもの，円孔を穿つものに、三角透しを持つものに凹線文を施すものがある。円孔は内部にまで達しないものが多い。	外面は篦磨き，刷毛調整を行い，内面はほとんどが下から見た場合時計廻りの方向に篦削りを行っている。		281，282は高杯の脚部ではなく壺形土器のものであろう。

＜大型高杯形土器＞（第２３図）

BL	295 296 297 298	口径 33.7 cm 〃 34.1 cm 〃 33.8 cm 〃 40 cm	高杯形土器B_2の大型品と考えてもよい。 口縁直径 35〜36 cmのものともう一廻り大きい 42 cm程に達するものがある。	立ち上る口縁部に数条の凹線文を施す。 内外面とも丁寧な篦磨きを行っている。	赤褐色 赤褐色 赤褐色	

<鉢形土器>（第２３図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
	294	口径 38.2 cm	小片で口縁直径は不明であるが大型鉢形土器になるものと思われる。	口縁下の凸帯上には竹管で施したような刻目文をめぐらす。 内面は丁寧な篦磨きを行う。		

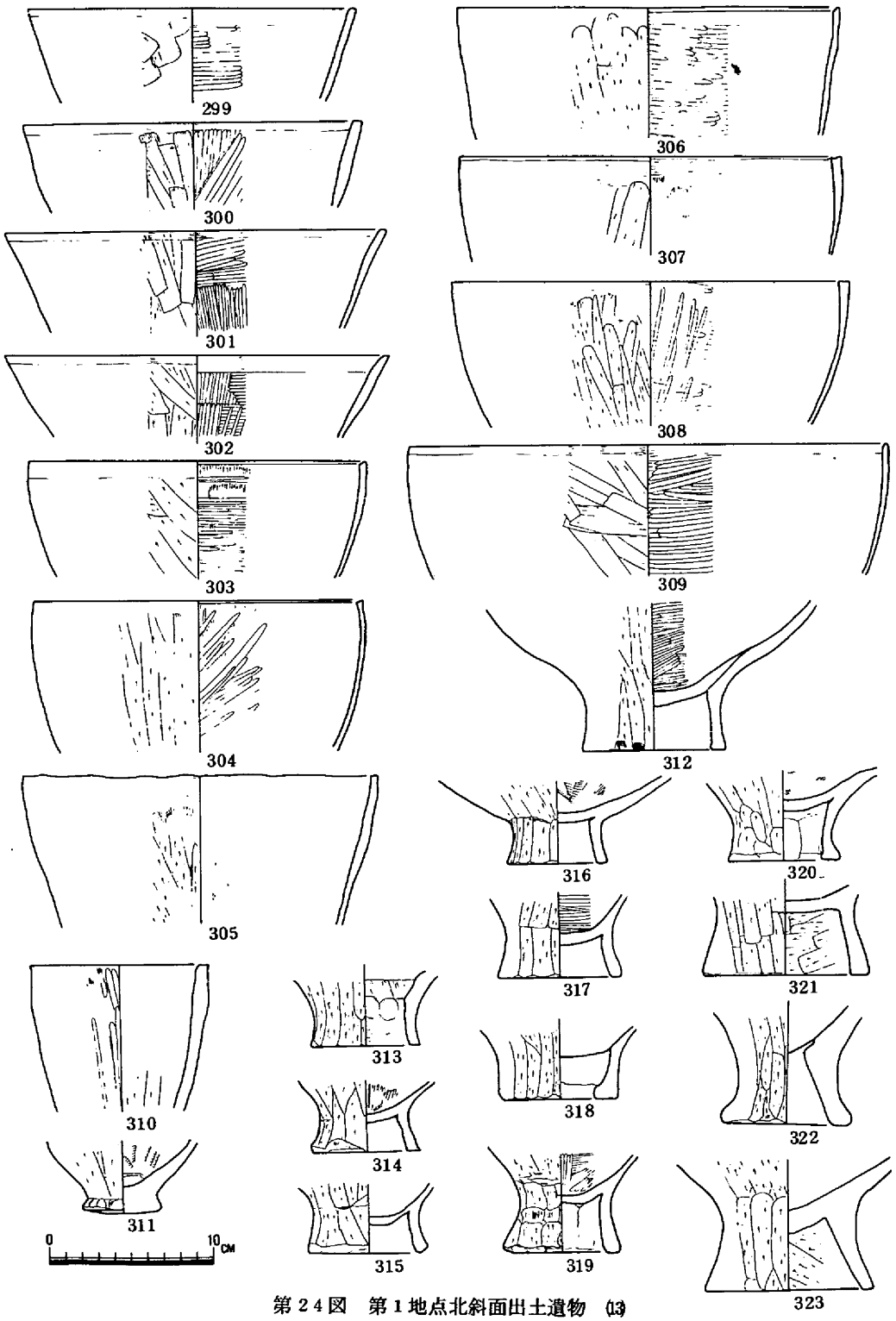
<鉢形土器脚部・器台形土器>（第２２図）

	292 293	脚径 20.8 cm 〃 25 cm	鉢形土器の脚部あるいは器台形土器である。 292 は脚端面に五条の凹線文，少し上に刺突列点文を巡らす。 293 は，脚端面から三角透しを穿つ下部まで凹線文を施す。	内外面とも刷毛調整を行っている。		

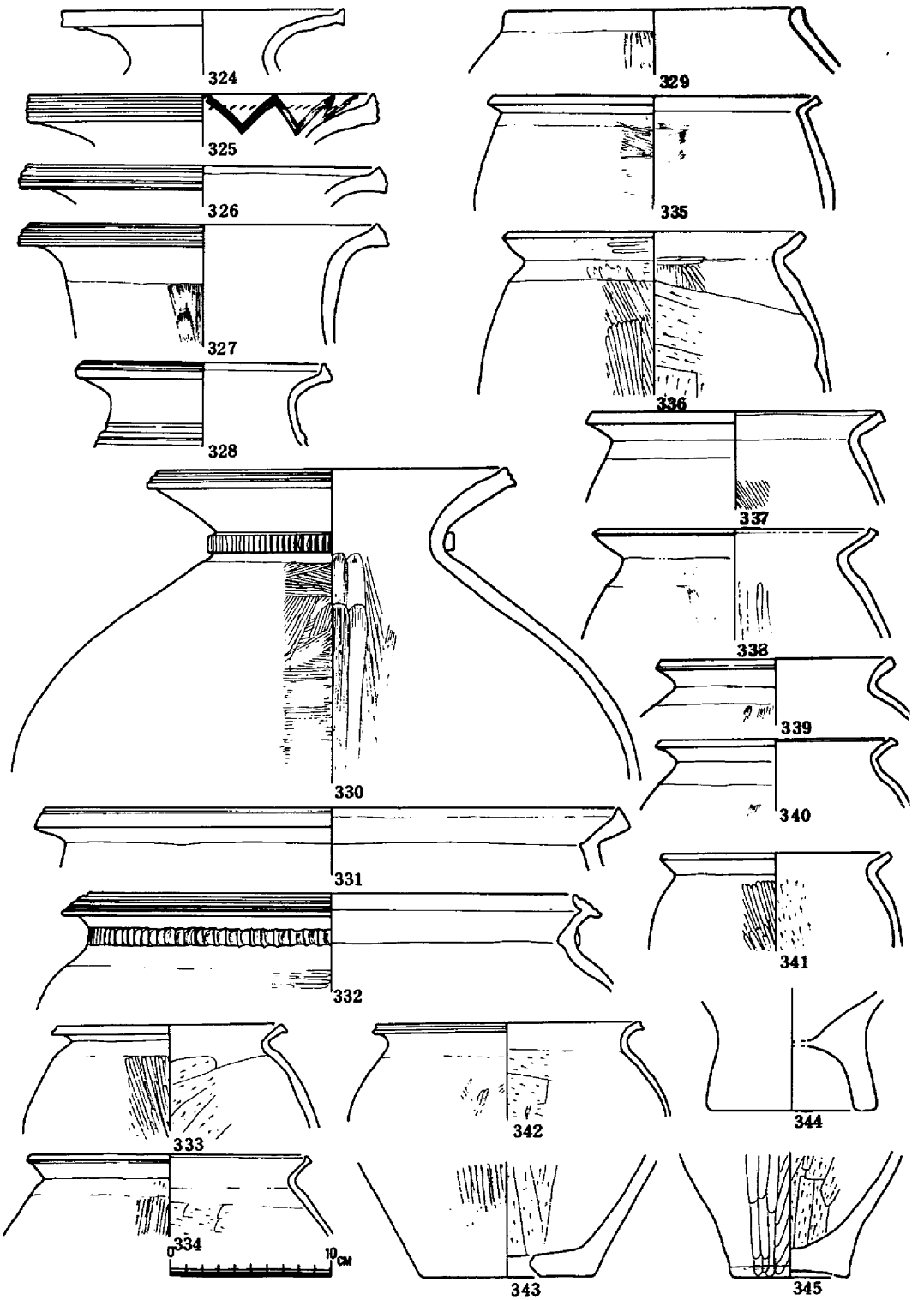
<製塩土器>（第２４図）

V	299 300 301 302	口径 19.3 cm 〃 19.5 cm 〃 22.5 cm 〃 22.5 cm	口縁部直径がおおむね 20 ～ 24 cm 位までにおさまり，V字形を呈し円形の脚台部を持つ。 口縁端部はほとんどが篦状工具により水平に切り落されている。	外面は脚台部から上に向って幅 1 ～ 2 の篦削りが丁寧に行われている。 内面も底部まで縦あるいは横方向の篦磨きが丁寧に行われている。	淡褐色 淡黄褐色 暗赤褐色 淡黄褐色	二次的に火を受けているのでほとんど非常にもろくなっている。
U	303 304 305 306 307 308	口径 19.8 cm 〃 19.4 cm 〃 21 cm 〃 22.9 cm 〃 22.5 cm 〃 23.4 cm	Vタイプと同じく口縁直径 20～25 cmになるが脚台部に向ってU字形になるものである。	口縁部下数cmをなで仕上げしているものが多い。	暗赤褐色 赤褐色 淡茶褐色 淡赤褐色	

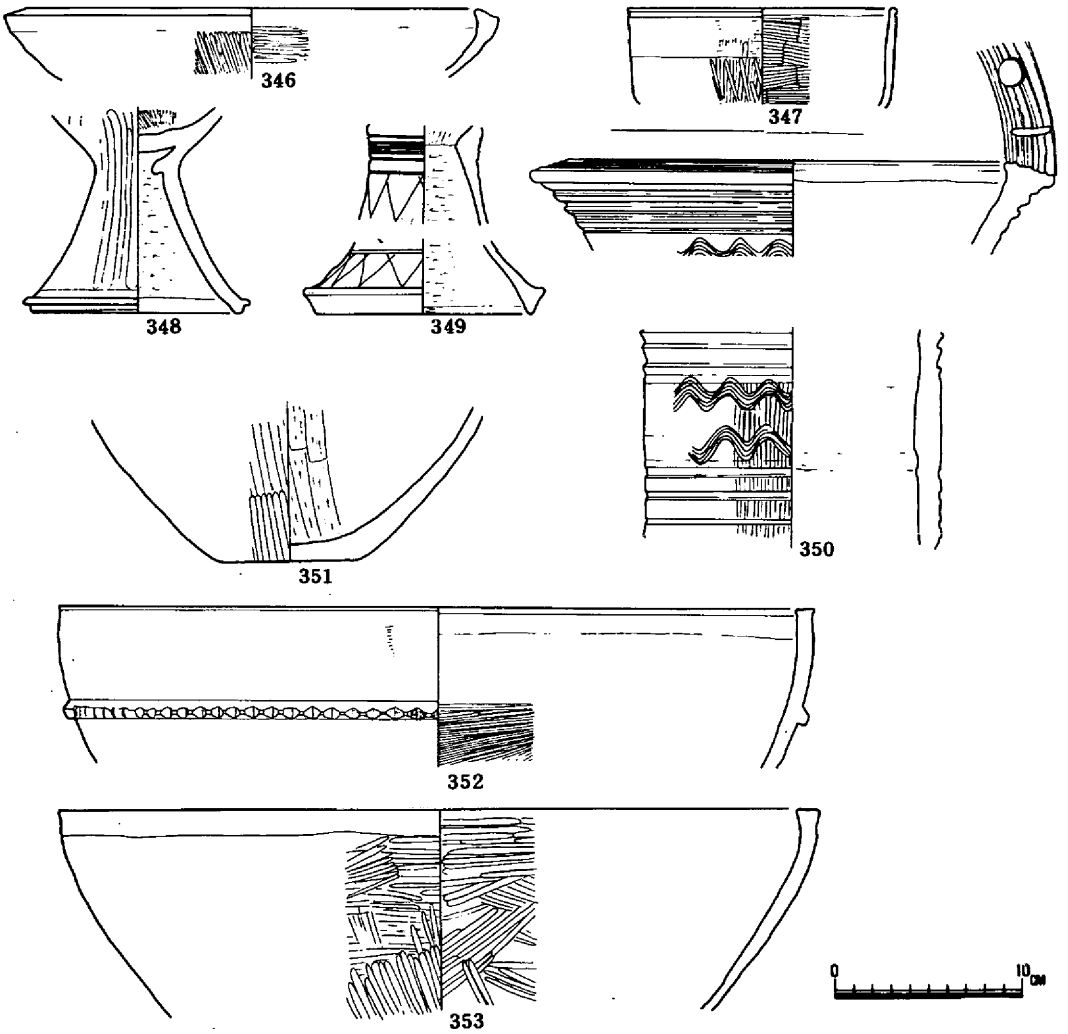
類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
UL	309	口径 29.6 cm	Uの大型品で口縁直径 30 cm 前後になるものである。		内 褐 色 外黄褐色 —黒褐色	脚部では 303, 312, 314 がULのものと思われる。
脚部	312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323	脚径 7 cm 〃 5.4 cm 〃 4.8 cm 〃 6.4 cm 〃 5 cm 〃 6.6 cm 〃 4.3 cm 〃 5.4 cm 〃 4.8 cm 〃 8 cm 〃 5.6 cm 〃 9 cm		鉢部の底は円版充塡法によってつくられている。台脚部内面はなであるいは，高杯の脚部と同じく下から見た場合右廻り方向の篦削りを行っている。	内暗褐色 外赤褐色 —黒褐色 暗茶褐色 茶褐色— 褐 色 褐 色 赤 褐 色 淡黄褐色 (内黒褐色) (外赤褐色) 褐 色 淡赤褐色 淡灰褐色 体部 暗灰色 内脚部 暗茶褐色 外暗茶褐色	302 は製塩土器の脚部ではない。



第２４図　第１地点北斜面出土遺物 (13)



第25図　第1地点東斜面出土遺物　(1)



第26図　第1地点東斜面出土遺物　(2)

第1地点東斜面　<壺形土器>（第25図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_1	324	口径 17.2 cm	頸部から強く外反する口縁部を持つ。			
A_2	325 326 327	口径 21 cm 〃 21.6 cm 〃 21.3 cm	筒状の頸部から外反する口縁の端部に凹線文を施す。	328 頸部外面は刷毛調整を行う。 325 口縁内面には、		

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_2				板状工具による波状文と刺突列点文を巡らしている。		
A_3	328	口径 14.6 cm	筒状の頸部にも凹線文を施す。			
D_1	329	口径 17.2 cm		外面は刷毛調整後口縁部をなでによって仕上げている。		
E_1	331	口径 35.3 cm	「く」の字状に外反する口縁部を持つ。			
E_2	330	〃 21.2 cm	「く」の字状に外反する口縁の端部に二条の凹線文を施す。頸部には凸帯を貼附け刻目文を巡らす。体部中程で強く張る張る大型のものである。	体部外面は篦磨きを内面は刷毛調整を行っている。	暗褐色	
E_3	332	〃 30 cm	口縁端部を上下に拡張し凹線文を施す。頸部には凸帯を貼附け，指頭圧刻目文を巡らす。	体部外面は篦磨きを行う。		

<甕形土器>

甕1	333	口径 13.6 cm	「く」の字状に外反する口縁部を持つ。	体部外面は刷毛調整篦磨きを行い，内面は刷毛調整あるいは篦磨き後に篦削りを行っているものもある。		
2	342	〃 16 cm	体部は余り肩の張らないものが多い。			

<高杯形土器>（第26図）

A_2	346	口径 23.6 cm	鉢状の杯部を持つ。	杯部内外面共丁寧な篦磨きを行う。		

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
C_1				杯部外面は篦磨き後なで調整を行い，内面は横方向の強い刷毛調整が行われている。		
脚部	348 349	脚径 10 cm 〃 11 cm		348 外面は少し幅の広い篦によって磨かれている。349 は線鋸歯文 6 条の沈線を施す。両者共内面は篦削りが行われている。		

<器台形土器>

	350		筒状の胴部からわずかに外開きする口縁部を持つ。口縁端部には六条の口縁部下に四条の凹線文を施す。胴部には六条の櫛描波状文 2 列と凹線文を組合せて文様を構成さす。	胴部外面は刷毛調整後，凹線文，波状文を施す。	赤桃色	二次的に火を受けている。?

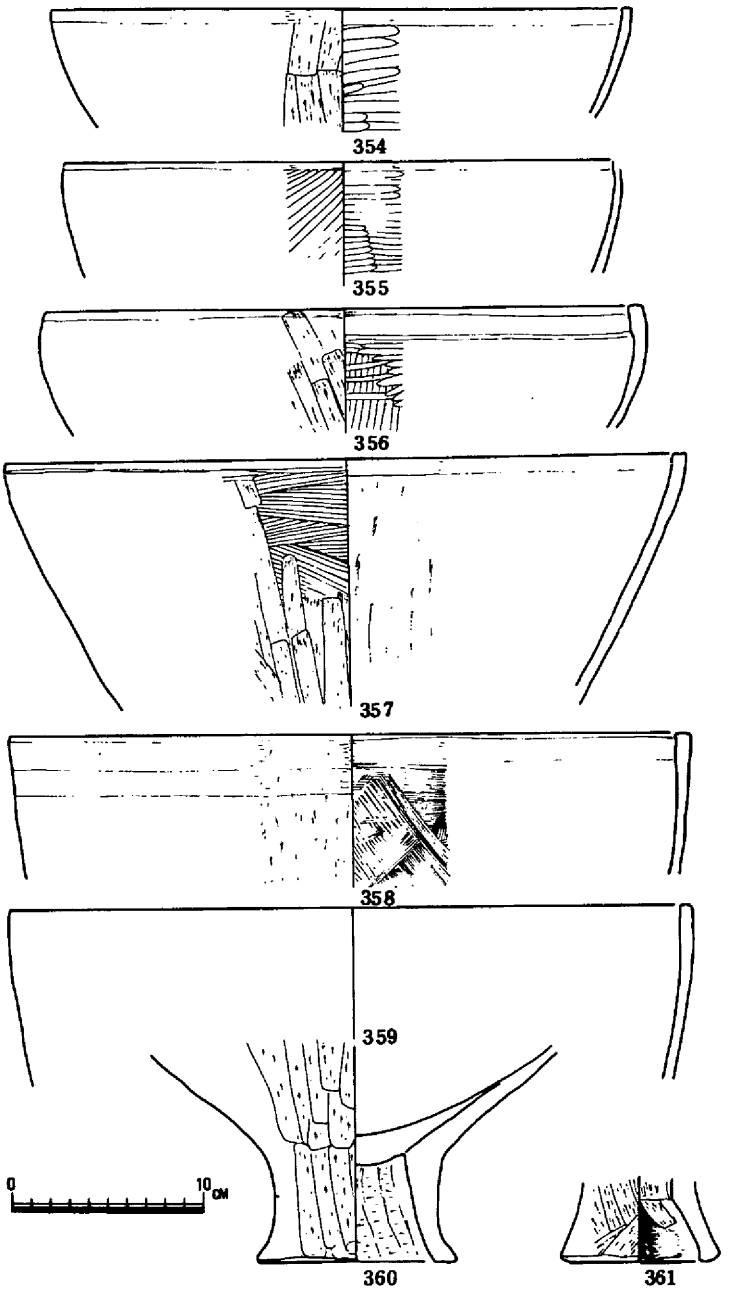
<鉢形土器>

	352 353	口径 37.6 cm 〃 38 cm	大型の鉢形土器で杯部中程に凸帯を貼附け刻目文を巡らす。	内外面共刷毛で丁寧に調整を行い，外面はと内面口縁部下 5 cm程までさらにその上からなで仕上げを行っている。 内外面共篦磨きで調整後口縁部のみをなで仕上げを行っている。		

<製塩土器>（第２７図）

V_L	354 355 356	口径 29.5 cm 〃 28.6 cm 〃 30 cm	口縁直径が 30 ～40 cmをはかる	外面は篦削り，357 の上半部と 355 は篦磨きを行っている。 内面は丁寧な刷毛あるいは篦磨きを行って	内赤黄褐色 外黄褐色 内淡黄褐色 外暗褐色 内黄褐色 外褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
VL	357	口径 34.6 cm		いる。	内黄褐色 外黒褐色	
	353	〃 38 cm			外黄褐色 一黒	
UL	358	口径 34.4 cm	口縁直径 35cm		暗黄褐色	
	359	〃 34.8 cm	前後のものである。		淡黄褐色	
脚部	350	口径 8.5 cm			内暗茶褐色 外（淡） 暗茶褐色	
	351	底径 6.3 cm			内黒褐色 外暗黄褐色	



第27図　第1地点東斜面出土遺物　(3)

第2節

第3地点西半部

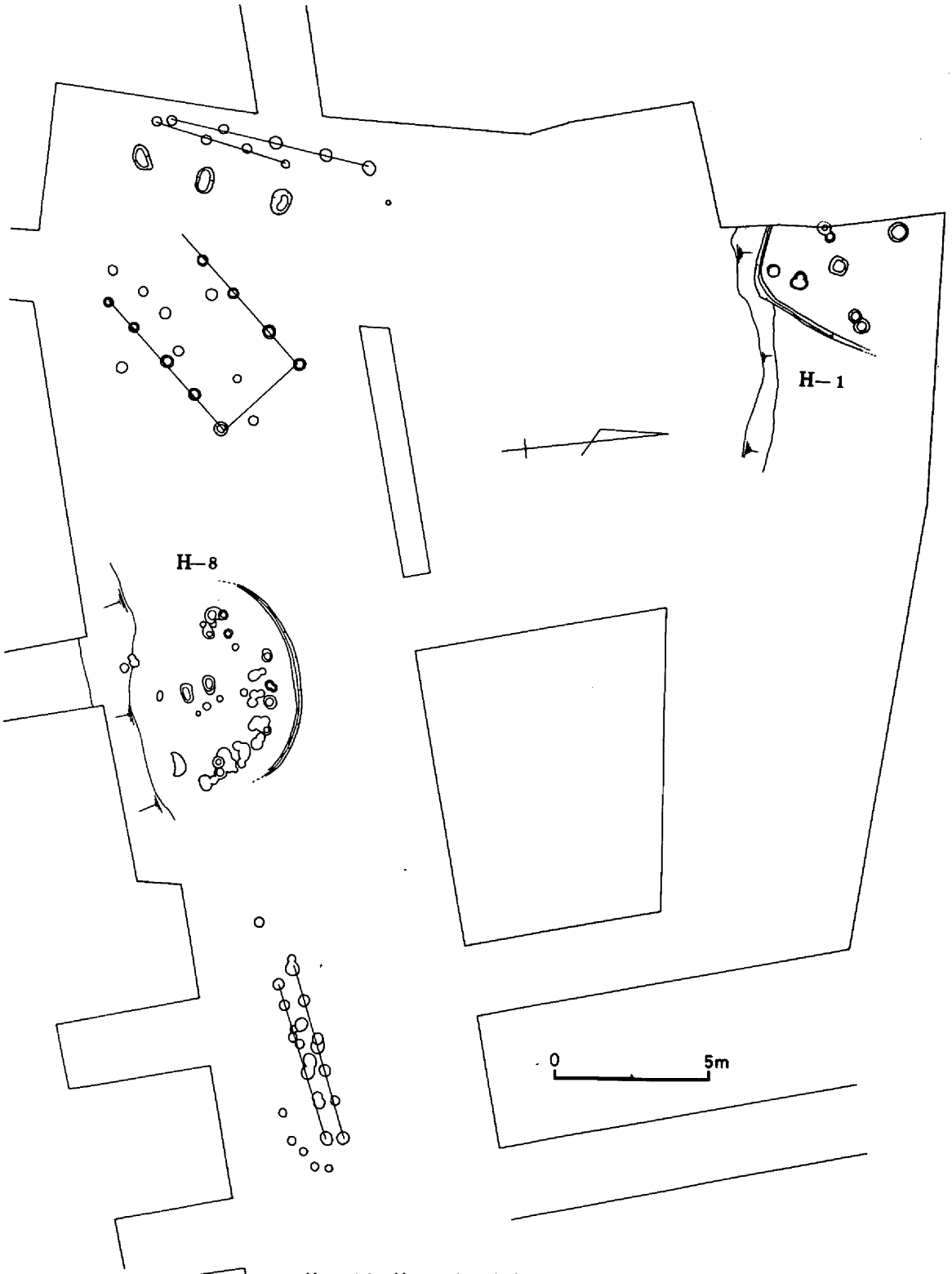
この調査区は，便宜上，第3地点としたが，第1地点と丘陵を同じくする。第1地点頂部が標高55m程あるのに対し，第3地点西半丘陵部は，約50mと5m程低くなっている。

遺構は，頂部はほとんど削平を受けているが北側肩部と南側肩部において住居址が2棟，また西側肩部から建物址と考えられる柱穴列が5～7棟分検出した。以下，第3地点西半部の主な遺構の概略を記す。

＜第1号住居址＞

第3地点の西北端にあり一辺約4～5m前後の隅丸方形の住居址と思われる。北側の一部は，最少の宅地造成によって削平され，西側の一端は，現在の墓地があり，調査時点ではまだ改葬が済んでいなかったため調査を行っていない。柱間東西南北約3m30cmをはかる。中央に直径60cm，深さ40cmのピットが存在する。南側1／4に周溝が見られる。

出土遺物は，壺A_3，C_2



第28図　第3地点西半遺構全体図

甕，，製塩土器脚部，石斧，石鎌等が出土している。

<第８号住居址>

南側肩部に住居址の北側周溝とこの住居址の柱穴と思われるものを検出した。直径７ｍ前後の円形住居址と考えられる。柱間は建て替えが行われているようではっきりしないが，東西，南北共３ｍ50ｃｍ前後でまとまりがつくと思われる。中央ピットと思われるものも２ケ所存在する。

<建　物　址>

この丘陵南側肩部と西南隅肩部から６棟分以上の柱穴列が確認できた。第８号柱居址の東側のものは柱間など無秩序であるが，直径40ｃｍ前後の柱穴がほぼ一列に並び２棟以上が存在したものと考えられる。南西肩部には，整然とはしないが，直径40ｃｍ前後の柱穴列をもつものが１～２棟，直径60ｃｍ前後の少し大きい柱穴列が一棟分，さらに西側に，直径20～40ｃｍの柱穴列が２棟分程並んでいる。これらは西側が谷になって落ちこみ，東側は削平されている。柱穴列も余り整然とはしないし出土遺物も見られないが，弥生時代中期の何らかの建物あるいは施設だろうと考えられる。

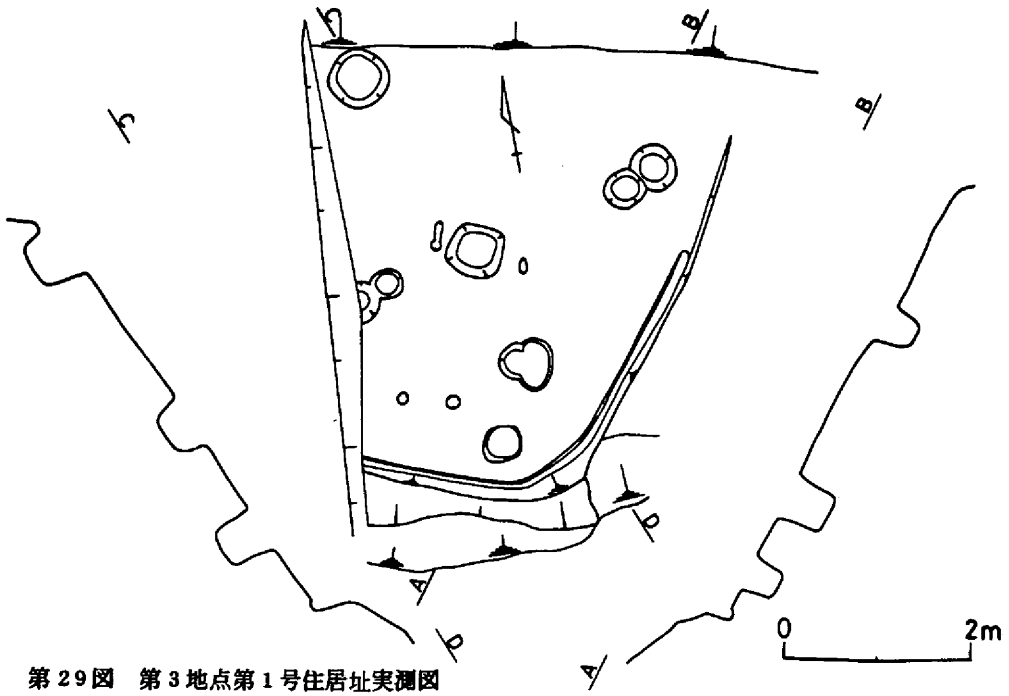
この他に頂部耕作土から縄文早期～後期の土器片が出土している。別表とは別に概略しておきたい。

１。２とも楕円押型文土器であるが，楕円文はやや粗大化している。器壁は１ｃｍ以上の厚手で胎土には砂粒を多く含み黄褐色を呈する。時期は早期の黄島式（註－１）に比較して楕円文が粗大化していることから，黄島式よりはやや新しいものと考えられる。

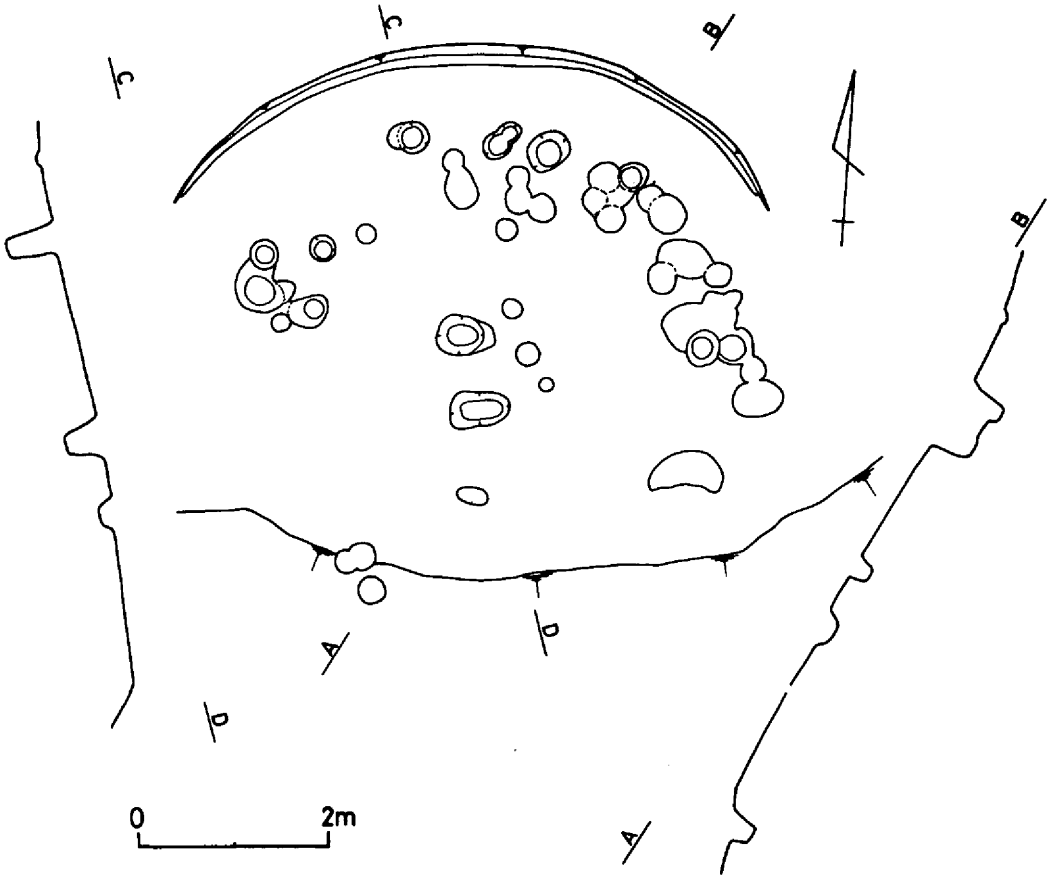
３は磨消縄文土器で，後期の中津式と考えられる

４は外面に条痕が認められるもので，後期の粗製土器群であるが，磨消縄文に伴ったものと考えられる。

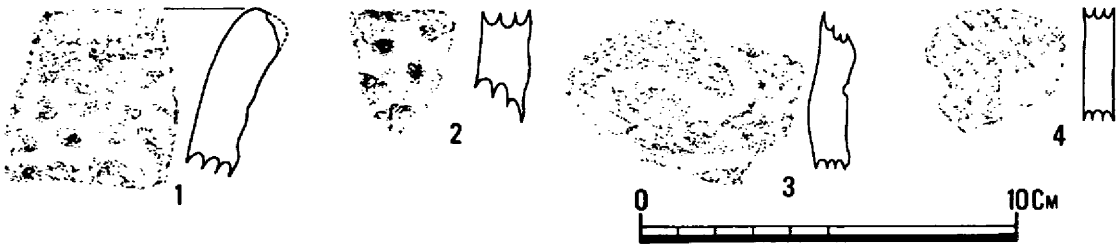
（註－１）鎌木義昌「備前黄島貝塚の研究」吉備考77 .S 24年



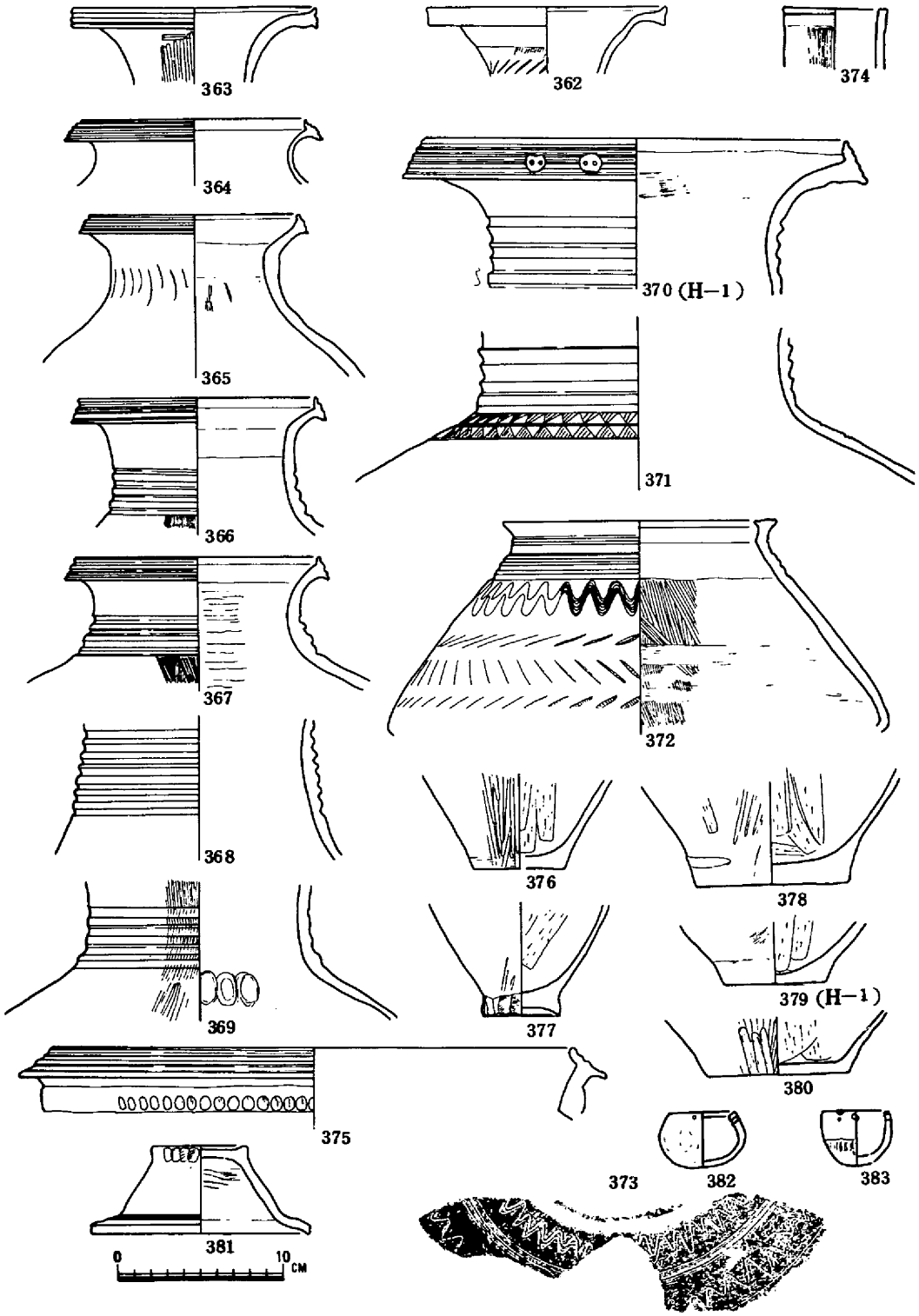
第29図　第３地点第１号住居址実測図



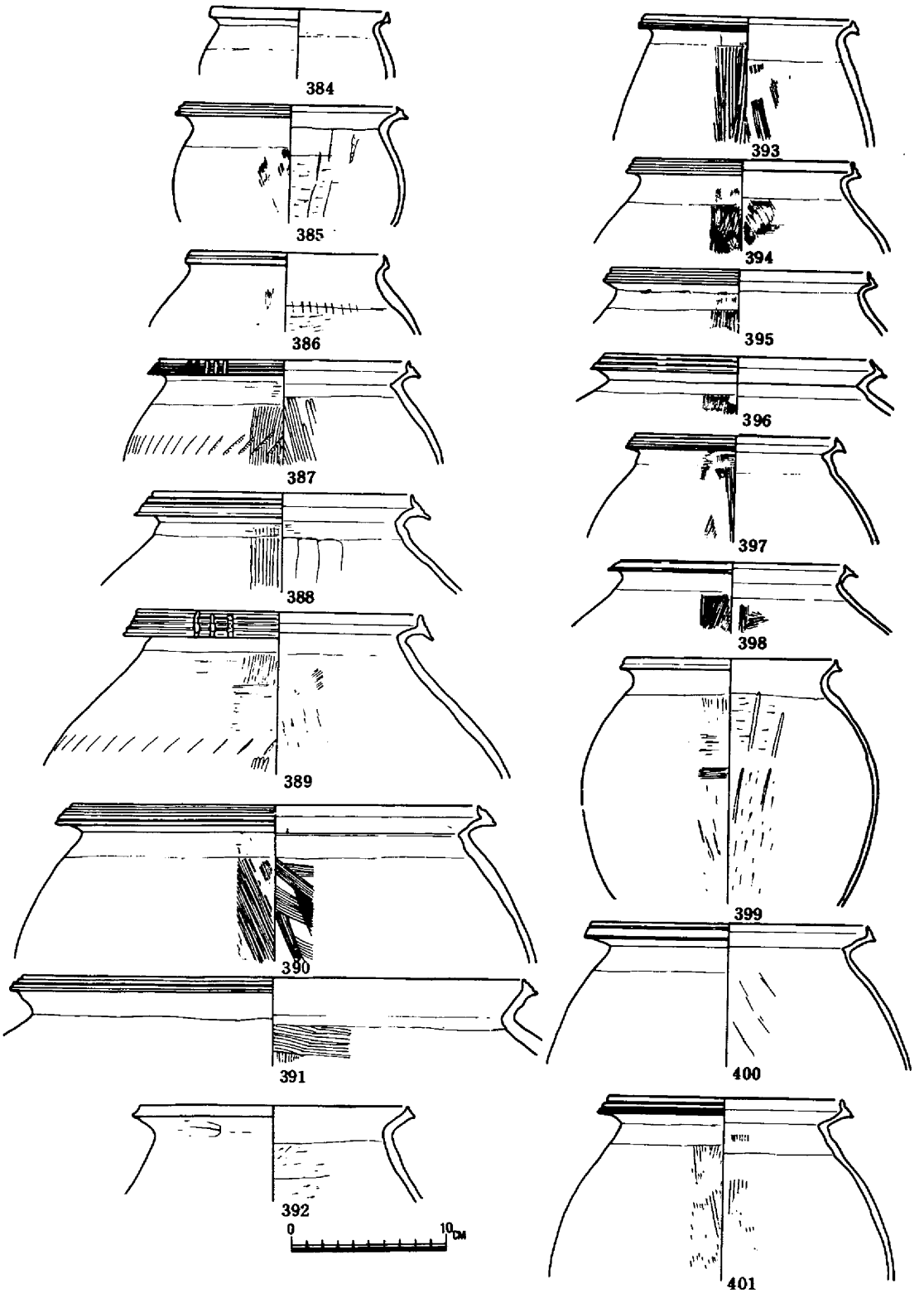
第30図　第3地点第8号住居地実測図



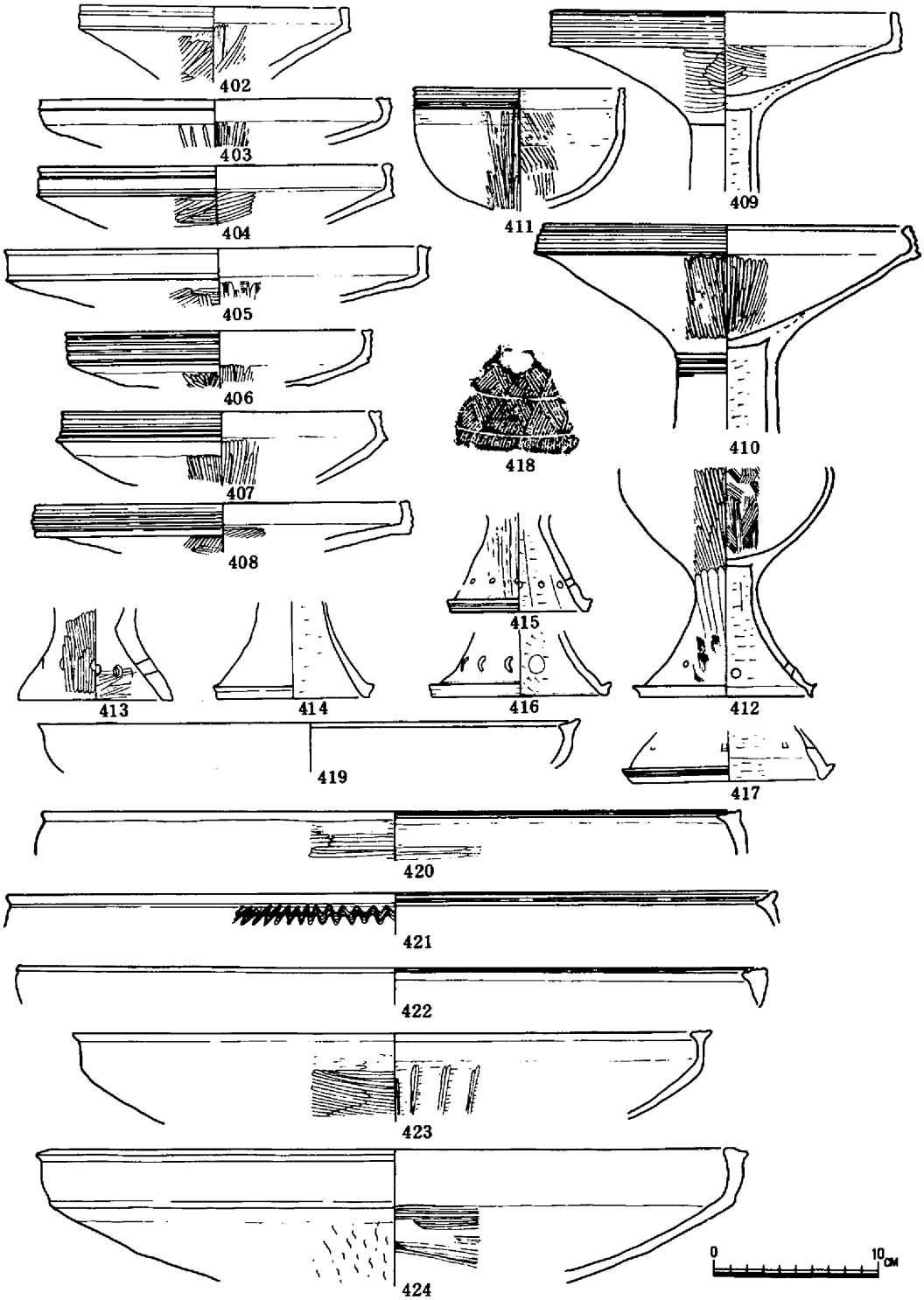
付図　第3地点西半部出土縄文式土器



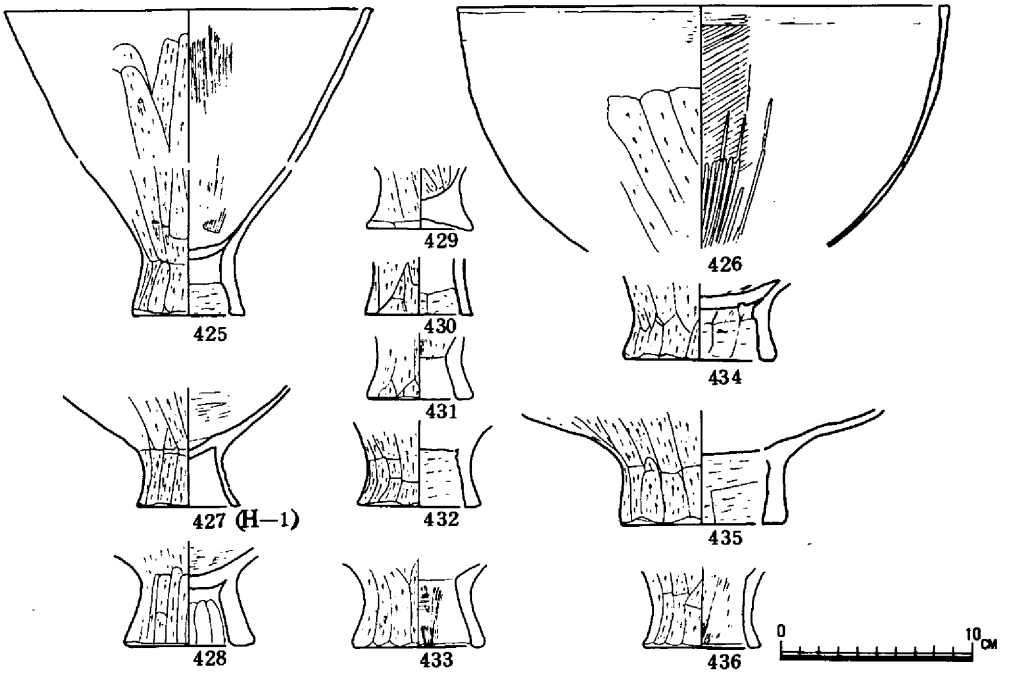
第31図　第3地点西半部出土遺物　(1)



第32図　第3地点西半部出土遺物　(2)



第33図　第3地点西半部出土遺物　(3)



第34図　第3地点西半部出土遺物

第3地点　西半部　<壺形土器>（第31・32図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_1	362	口径 14.6cm	頸部から口縁部へ逆八の字状になって外反する。頸部下に板状工具による列点文を施す。	頸部中程までなでを行う。	内黒褐色 外暗茶褐色	
A_2	363	口径 14.7cm	253は252の口縁端部に凹線文を持つものである。	頸部は篦削りを行う。	淡黄褐色	
A_2	364 365	口径 13.5cm 〃 12.7cm	頸部が短く，口縁端部を拡張し凹線文を施す。頸部に板状工具による列点文を施す。	355内面は刷毛，口縁部近くはなでを行う	内茶紫色 外赤紫色 淡褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_3	366	口径 14.4 cm	筒状の頸部に凹線文を施すものである。 360, 361, は口縁直径が 25 cm 以上になる。361 口縁端部には円孔を穿った円形浮文を貼附ける。 361は肩部に一対の鋸歯文を巡す。		内(黄褐色 茶褐色) 外 暗茶褐色	
					内 灰黒褐色 外 赤紫色	
	368				黄褐色	
	369				内 褐色 外 淡灰褐色	
	370	口径 25.7cm			外 淡褐色	
	371	口径 なし			内 淡褐色 外 赤(茶)褐色 ぎみ	
C_2	374	口径 5.2cm	細口で短い口頸部を持つ。	外面は縦方向の篦磨きを行う。	淡褐色	
C_2	372	口径 14.1cm	極く短い口頸部を持ち無頸壺形土器のに似て体部中程で急角度で曲る。 頸部から体部にかけて 6 本の凹線文，櫛描波状文，板状工具による列点文を 3 列巡らす装飾の多い土器である。	体部内外面とも刷毛目調整を行う。	茶褐色	
F_2	387	口径 16cm	「く」の字状にに外反する口縁部の端部を上下に拡張し体部が良く張る器形である。 377は，口縁端部に 3 ケ 1 組の棒状浮文を，体部中程に板目状工具による列点文を巡らす。	体部内外とも刷毛による調整を行うが，377の体部上半は横方向の下半は縦方向の篦磨きを行う。	淡褐色	372は小型のF_2に又，380，382もこの型に含まれるかも知れない。
	388	口径 16.6cm			内 淡褐色 外 淡黄褐色	
	389	〃 18.2cm			内 淡褐色 外 淡茶褐色	
	390	〃 26 cm			内 赤茶褐色 外褐色-黒色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
E_2	391	口径 32.4cm	「く」の字状に外反した口縁端部に4条の凹線文を施す。		茶褐色	

<甕形土器>（第32図）

甕$_{2}$〜$_{3}$	392	口径 17.4cm	373のように「く」の字状の口縁部を持つものと端部を上に，あるいは上下に拡張して凹線文を施すものが見られる。 筒状に近い体部をなすもの（383）や肩が良く張りF_2型と見まちがうものがある。	体部内外面とも刷毛調整を行っているが，内面は箆削りと取り入れているもの（373，381，389）も見られる。	（淡黄褐色）	
	400	〃 17.7cm			茶褐色	
	401	〃 15 cm			茶褐色	
	386	〃 12.4cm			暗黄褐色	
	393	〃 13.2cm				
	394	〃 14 cm			内淡褐色	
	395	〃 16.3cm			外灰褐色	
	396	〃 17 cm			内黄褐色 外暗黄褐色 暗(茶)褐色	壺F_3？
	397	〃 13 cm			茶褐色	
	398	〃 14.3cm			茶褐色	
	399	〃 135cm			茶褐色	

<蓋形土器>（第31図）

	381	口径 13.3cm 器高 5.3cm	紐部が広くなり鉢形土器を逆点したような形になる口縁部を少し外にそらし，曲り目に四条の沈線文を巡らす。	紐部に指圧痕を残している。 内外面とも調整ははっきりしない。	赤褐色	

<特殊小玉土器>（第31図）

	383	口径 3.2 cm	小型のカップ状の土器で口縁部下に2対2孔を穿っている。	手捏的状であるが非常に薄手である。		
	382	〃 3 cm				
B_1	402	口径 15.2cm	口縁部は杯部から垂直あるいはわずかに内傾して立ち上る。	口縁部は明瞭な凹線文ではなくなでによる凹凸が見られる。 内外面とも丁寧な箆磨きが行われている。	内茶褐色 外黄褐色	
	403	〃 19 cm			外黄褐色	
	404	〃 19.6cm			内淡褐色 外茶褐色	
	405	〃 23.6cm			内茶褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形．調整手法の特徴	色調	備考
B_2	406 407 408 409 410	口径 16.8cm 〃 17.4cm 〃 21 cm 〃 20cm 〃 21cm	B の型で口縁部に数条の凹線文が施される。	410，411の脚部上端に篦描沈線を1～5条施す。 脚部内面は篦削りを行う。	内淡(黄)褐色 外黄褐色 淡茶褐色(黄茶色) 外淡黄褐色 淡褐色	
C_2	411 412	口径 11.8cm 脚径 10.4cm	椀状の杯部口縁に4条の凹線文を施す。	杯部外面は縦方向の篦磨き内面は刷毛調整を行う。 412の脚部外面は少し幅の広い篦で下部は刷毛により調整している。 円孔を穿つ。	内明褐色 外黄褐色 外淡褐色(明)	

＜高杯形土器＞（第33図）

A_1	419	口径 30 cm	鉢形の杯部を持つ。口縁端面がわずかに内傾する。			
A_2L	420 421 422	口径 39 cm 〃 43.6 cm 〃 42 cm	口縁端面に数条の凹線文を持ち420は口縁部に櫛描波状文を巡らす。	杯部内外面は丁寧な篦磨きを行っている。		
B_1L	424	口径 40 cm	鉢～皿状の杯部から垂直に立ち上る口縁部を持つ。	杯部外面に粘土を圧縮時に出来るような皺が残る。内面は刷毛，調整を行う。		

＜製塩土器＞（第34図）

V	425	口径 18.6cm 器高 16cm 脚径 4.2cm	V字形の鉢部と円筒状の脚部から成っている。高杯と同じく脚部から口縁部まで一気に造られた後円板を充鎮し鉢部の底部をつくっている。	口縁端部は篦状工具によって切り落されたようになる。 鉢部外面は親指の一関節分程をなでている他は脚部方向から篦削りを行っている。 内面は刷毛目調整を行っている。 脚部内面は，中程まで篦削りを行っている。	内茶褐色 外茶紫～暗灰紫色ぎみ褐	二次的に火を受け壊れ安い

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
U	426	口径 24.9cm	底部近くで少ししもぶくれしU字形を成す鉢部と円筒状の脚部からなる。	外面は脚部から箆削り，内面は箆磨きを行っている。	茶褐色	
脚部	427 428 430 431 432 433 434 435 436	脚径 4.5cm 〃 4.7cm 〃 4.4cm 〃 4.0cm 〃 5.0cm 〃 5.6cm 〃 6.2cm 〃 6.3cm 〃 5.2cm		脚部内面は箆削りが主流であるが，392，393，397，400のように刷毛調整のみのままのものも残る。	暗褐色 黒褐色暗茶褐色 暗赤褐色 暗灰褐色～茶褐色 淡赤褐色 赤褐色 暗赤褐色 内淡黄褐色外暗黄褐色	脚部内面の箆削りの方向は，高杯と同じく下から見た場合，ほとんど時計廻りの方向に削られている。

第3節　第3地点東半部

第3地点東端の現状は部分的にイチヂクが植えられたり，サツマイモが作られているが，この北側から東端にブルドーザーが入れられ宅地化されようとしていた寸前である。部分的には1m近く削平されているが，標高約44mの高さである。このブルドーザーが削った道沿いに多くの遺物が散乱していたのでトレンチを設定して掘り下げ，住居址を確認し，これを第2住居址とした。

また，この北側斜面は，かって畑に開墾されていたが，現在では耕されることなくイバラ，カズラなどが繁茂していた。この斜面にも，6本のトレンチを設定した。第2号住居址北側のT－11からは特に多くの遺物が見られた。

＜第2号住居址＞

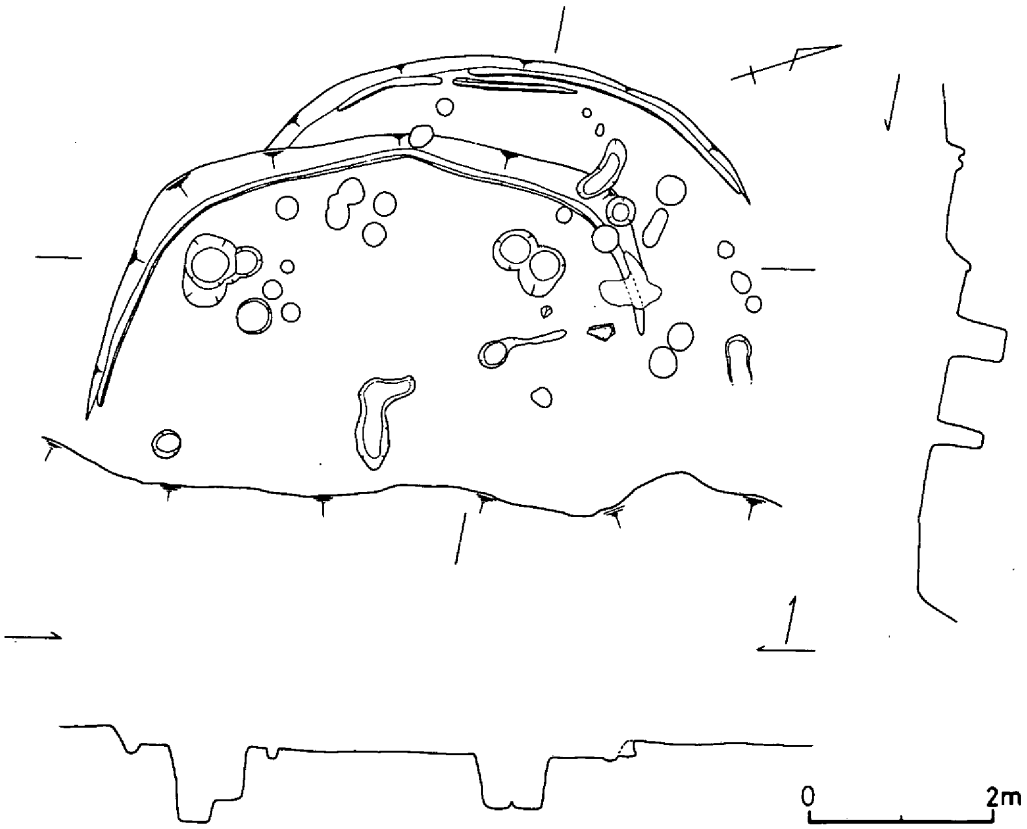
建て替えが行われており，古い方をa，新しいものをbとした

第2号住居址－a－直径5m前後の円形の住居址であをが，東側はbによって削平され残存しない。

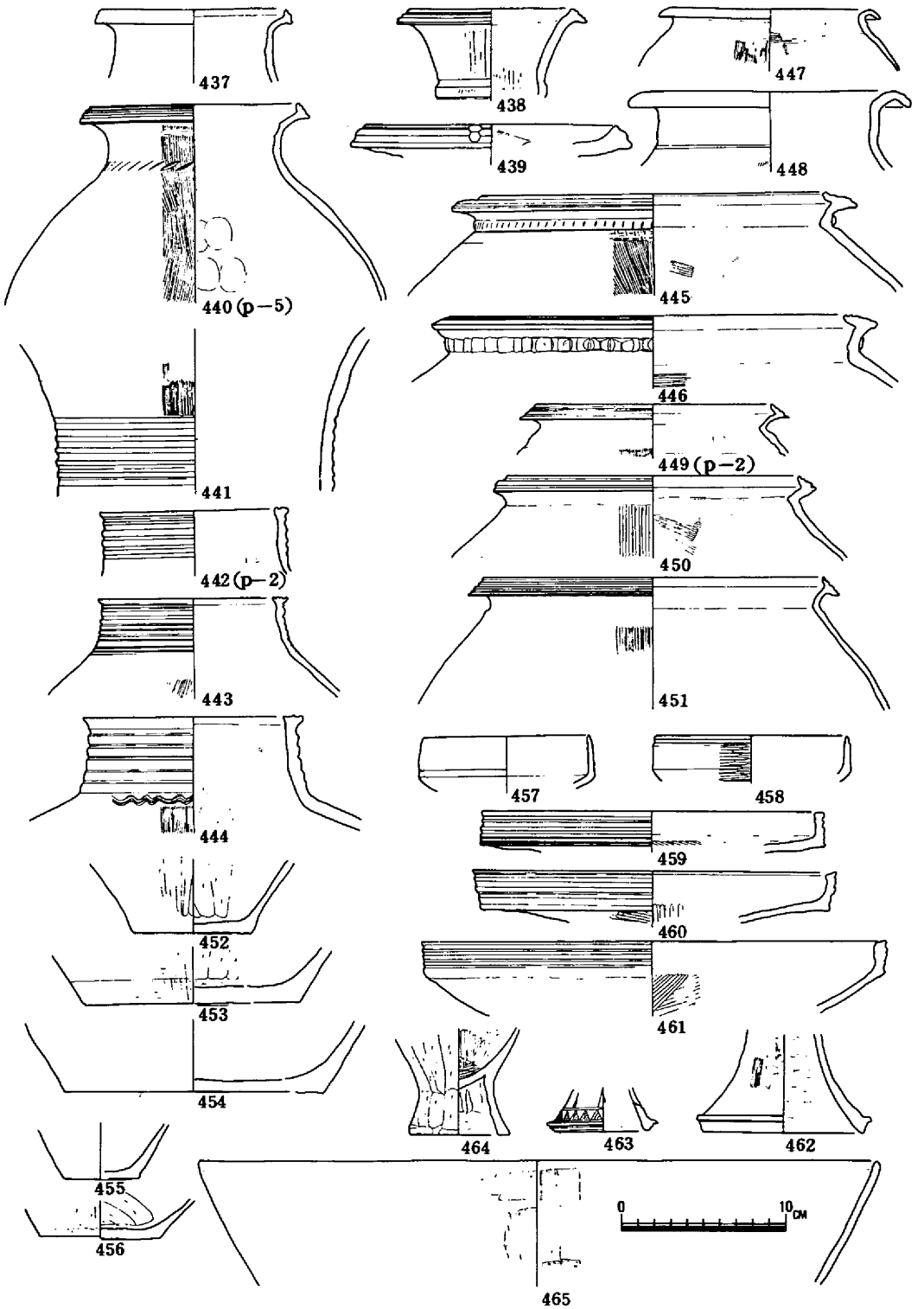
柱穴もはっきりしない。

第2号住居址－b－床面プランでは，多角形を想定できるが，b自身がまた建て替えが行われているようで余りはっきりしない。円形であるとすれば直径6 m前後になると想定できる。これも東側半分がすでに削り取られ消失している。柱穴も西側2本は建て替えも含めはっきりしているが，4本柱かそれ以上になるのかは不明である。西側の柱間は32 mをはかる。

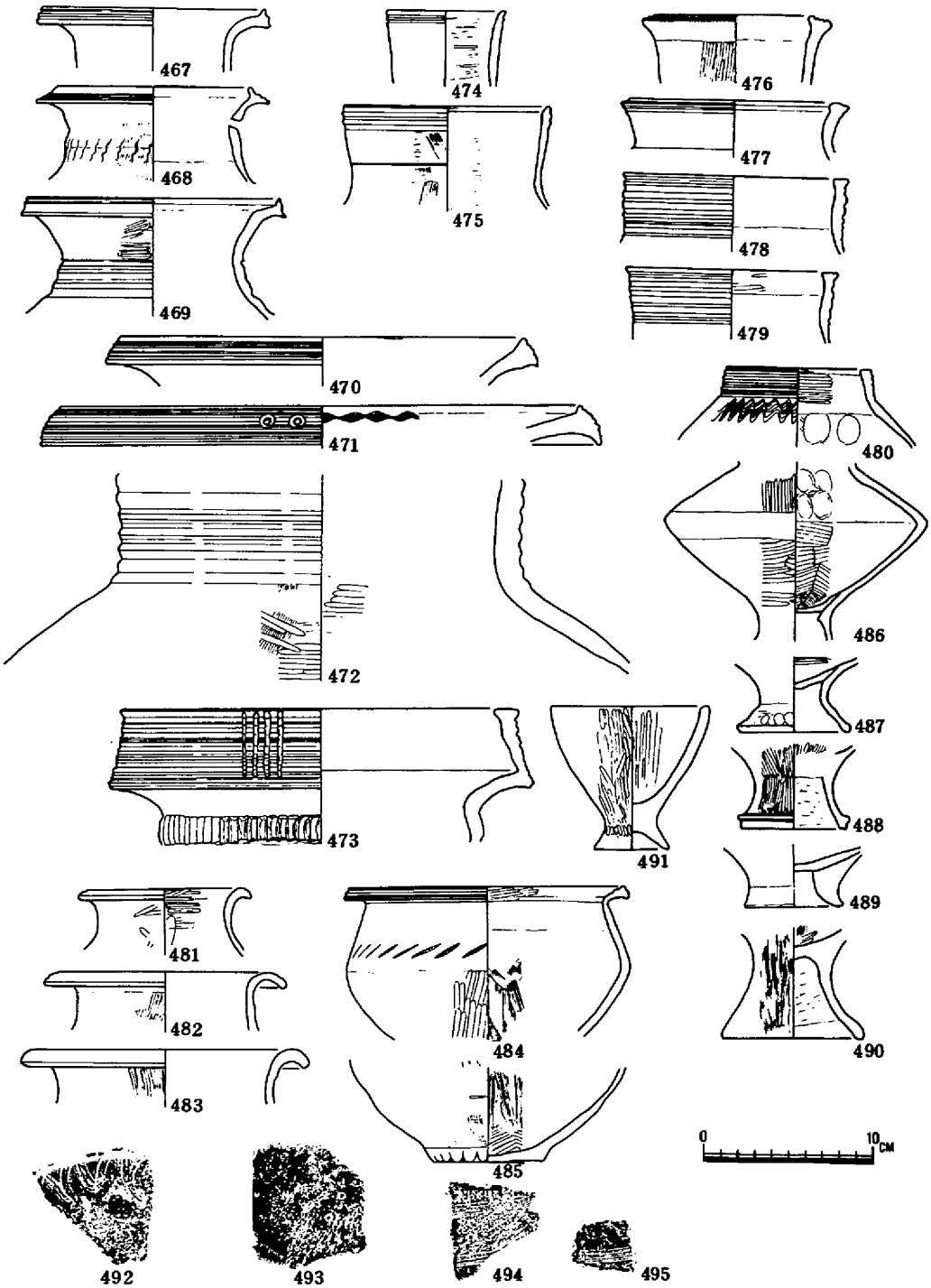
この両方の住居址からは，壺A_2，A_3，D_2，E_2，G，甕$_2$，甕$_3$，高杯B_2，B_2 L，C_2，脚部，製塩土器VLおよび脚部などが出土している。また石器は石包丁1点，石鏃12点出土している。



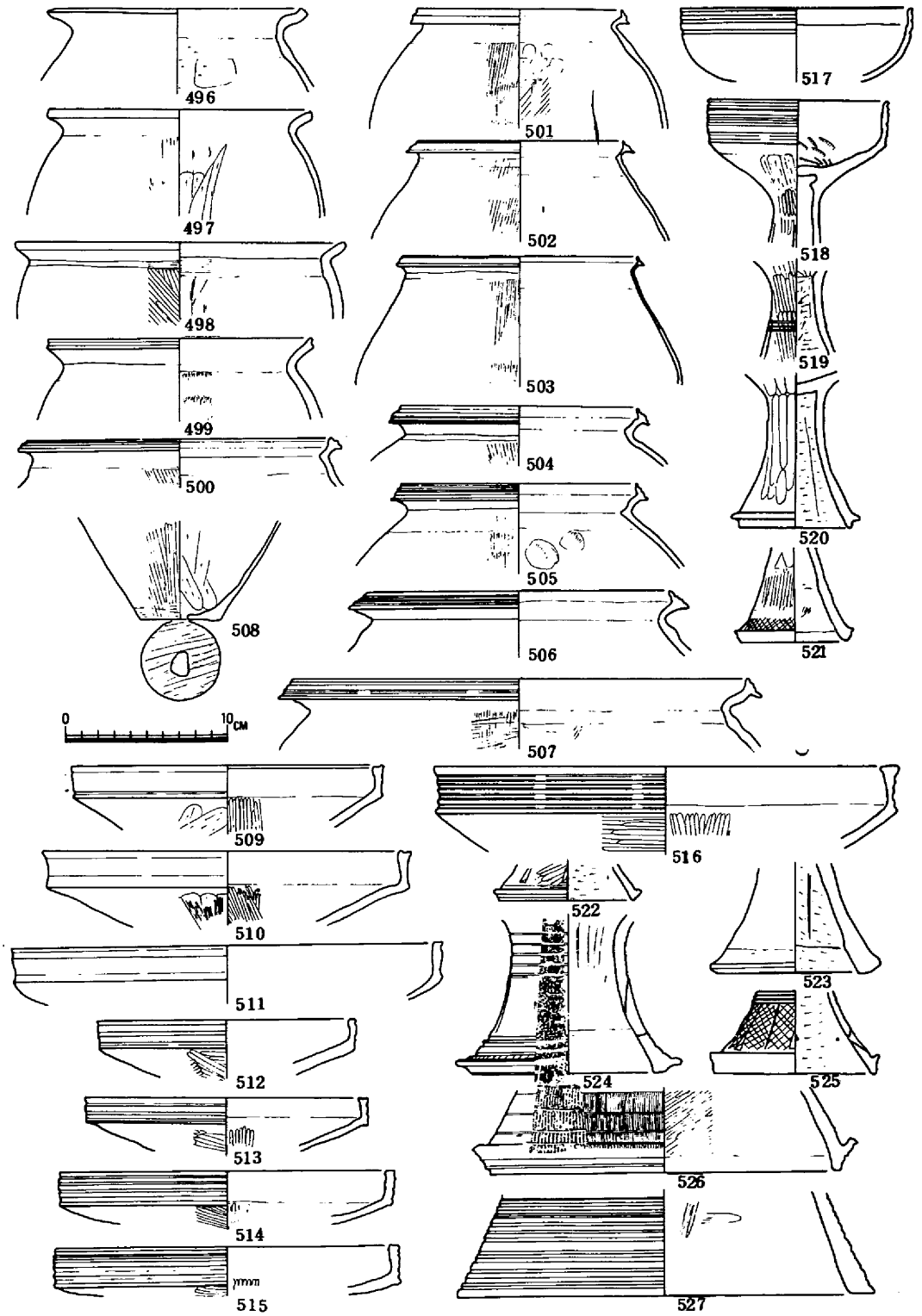
第35図　第3地点第2号住居址実測図



第36図　第3地点第2号住居址出土遺物



第３７図　第３地点東半部各トレンチ出土遺物　(1)



第38図　第3地点東半部各トレンチ出土遺物　(2)

第3地点第2号住居址　<壺形土器>（第36図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_2	437 440 439	口径 11 cm 〃 12.8 cm 〃 15 cm	やゝ短い筒状の頸部から外反し，口縁端部をわずかに上下に拡張し，四条の凹線文を施す。	頸部から体部外面は刷毛目調整を行う。内面は指頭圧痕を残す。 頸部と体部境に板目状工具による刻目文をめぐらす。	外褐色	
A_3	438	口径 9.6 cm	頸部にも凹線文を施す。	内外面とも刷毛調整を行っている。		
C_2	442 443 444	口径 9.8 cm 〃 9.8 cm 〃 11.1 cm	口頸部に6～9条の凹線文を施す直口壺である。	口縁端面にも1条～数条の凹線文を施す。 444は肩部に櫛描波状文をめぐらす。	(明)淡褐色 明褐色 内赤褐色	
E_2	445 446	口径 20.5 cm 〃 23 cm	「く」の字状に外反する口縁の端部を上下に拡張し凹線文を施す。	頸部の凸帯上には，篦状工具による刺突文，指頭圧痕を施す。 体部内外面とも刷毛目調整を行っている。	内茶褐色 黄褐色－だいだい	
G	447 448	口径 12 cm 〃 14.8 cm	口縁部を折り曲げる胴部は甕形土器に近い形になる。	内外面とも刷毛調整を行っている。	内淡茶褐色 外黒色 外茶褐色	甕？

<甕形土器>

甕3 甕2 甕3	449 450 451	口径 14.1 cm 〃 17.4 cm 〃 20.6 cm	「く」の字状に外反する口縁の端部を上下に拡張し凹線文を施している。	内外面とも上半部は刷毛調整を行っている。		

<高杯形土器>

B_2 B_2L	459 460 461	口径 19.6 cm 〃 20.8 cm 〃 27 cm	鉢～皿形の杯部から垂直に立ち上る口縁部に凹線文数条を施している。	杯部内外面とも丁寧な篦磨きを行っている。		
C_2	457 458	口径 10 cm 〃 11.4 cm	椀に近い形の杯部を持つ，457は口縁部下部に，458	458杯部外面は横方向の篦磨きを行っている。		

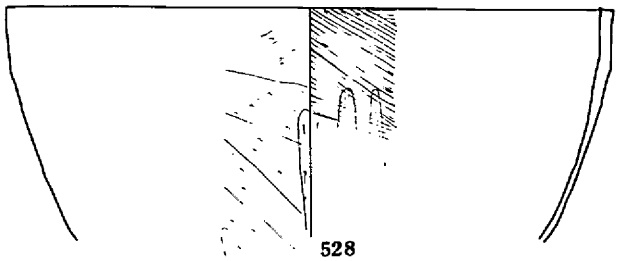
類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
C_2			は口縁直下に凹線文を一条施している。			
脚部	462 463	脚径 9.6 cm 〃 5 cm	463 外面には鋸歯文を巡らし，三角透しを設け，脚端部に二条の凹線文を施している。	462 外面は篦磨き，内面は篦削りを行っている。		

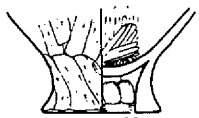
<製塩土器>

V_L	465	口径 41.3 cm	V字状になる大型の製塩土器である。	鉢部内外面は板状工具による調整を行っている。 内外面は篦削り，鉢部内面は篦磨きを行っている。		磨滅小砂粒多い。
脚部	464	脚径 4.8 cm				

第3地点東半部 <壺形土器>（第37図）

A_2	467 468	口径 12.5 cm 〃 10.8 cm	筒状の頸部からわずかに外反し，口縁端部を上下に拡張し，凹線文を施す。 468 は頸部に穿孔し，板状工具による列点文を巡らす。	頸部外面は刷毛調整後列点文を巡らす。		
A_3	469 470 471 472	口径 14.3 cm 〃 23.2 cm 〃 30 cm	469 以外は少し大型である。	471 の口縁端部凹線上には2ケ1組の円形浮文を貼附け，内面には櫛描波状文を施す。 469 は頸部，外面は篦磨き 472 の体部外面は刷毛の後篦磨きを行っている。		
	473	口径 20 cm	短い頸部から外反しわずかに内傾するが直立する口縁部を持つ。口縁部には11本の凹線	内外面とも篦削り後なでを行っている。 口縁部に4ケ1組の棒状浮文を貼附ける。	淡黄灰色	





第39図　第3地点東半部各トレンチ出土遺物　(3)

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
			文を施し，端面は水平になる。 頸部凸帯上には指頭（爪先）圧痕による刻目文を巡らす。			
C_2	474 476 477	口径 6.6cm 〃 8.8cm 〃 11 cm	474，475は口縁直下に2～3条の，476，477は口縁端部とその直下に数条の凹線文を施す。 475は広口のものになる。	475は刷毛，476は箆磨き後なでによって口縁部を調整している。		
C_3	478 479 480 486	口径 11.6cm 〃 10.4cm 〃 13.2cm	口頸部のほゞ全面に凹線文を施す。	体部外面は箆磨き，口頸部内面は箆磨きの後なで，体部刷毛調整を行い上半部には指頭圧痕を残す。		
F_2	484	口径 15.6cm	「く」の字状になった口縁部端面に3条の凹線文を施す。甕に比べ体	肩部に板状工具による列点文を巡らす。 口縁部内面（横），体部下半部（縦）は箆		

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
F_2			部が短く，中程で肩がわずかに張る。脚台のつくものが多い。	磨きを行う。 内面は刷毛調整後なでを行う。		
G	481 482 483	口径 8.8 cm 〃 11 cm 〃 14 cm	短い頸部から曲折する口縁部を持つ。端部は下を向く。	内外面とも丁寧な刷毛あるいは篦磨きを行う。		

＜小型鉢形土器＞

	491	口径 8.6 cm 器高 8.4 cm 脚径 4 cm	短い脚を持つ小型の鉢形土器である。	鉢部内形面とも篦磨きを行っている。		

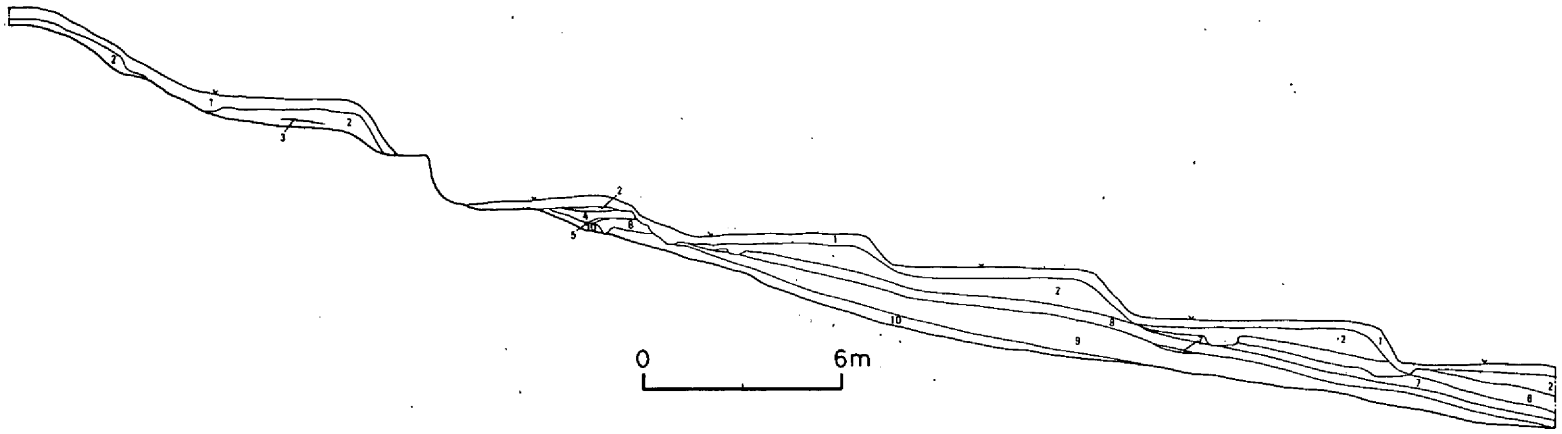
＜甕形土器＞（第３８図）

甕$_1$	496 497 498	口径 15 cm 〃 16 cm 〃 19.6 cm	「く」の字状になる口縁部を持ち端部に凹線文を持たない。	498 は外面篦磨き，内面は刷毛調整を行っている。		496，497 は頸部まで篦削りが見られ，新しい時期の可能性もある。
甕$_2$	499 500	口径 16 〃 18.4 cm	口縁端部に１～２条の凹線文を持つものである。			
甕$_3$	501 〜 507	口径 12.4 cm 〃 12.4 cm 〃 14.1 cm 〃 14.1 cm 〃 14 cm 〃 18.3 cm 〃 28 cm	上下に拡張した口縁端部に数条の凹線文を持つものである。	体部内外面共刷毛調整を行う。上半部に指頭圧痕を残すものもある。		

＜高杯形土器＞

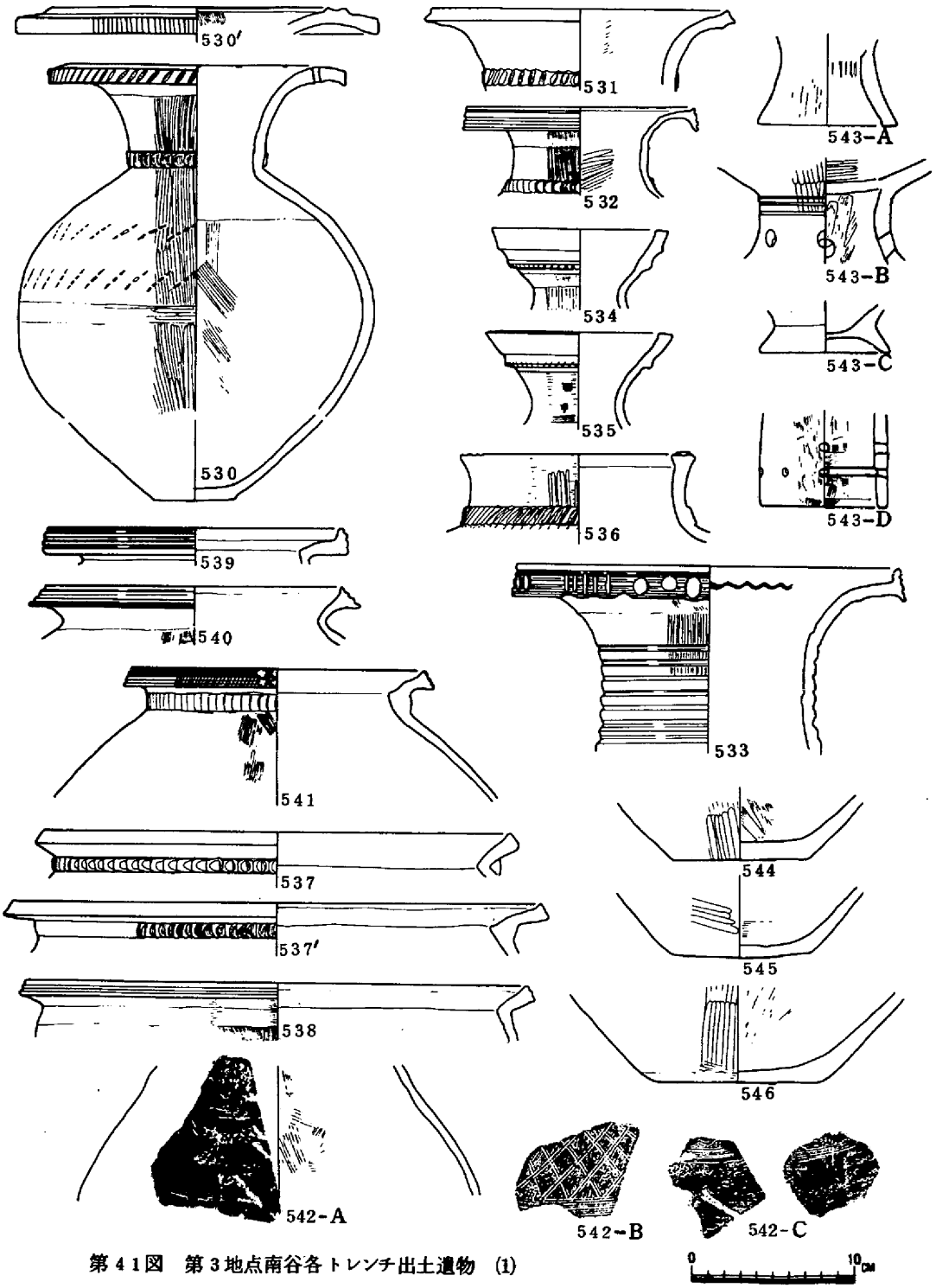
B_8	509 510 511	口径 17.9 cm 〃 21.1 cm 〃 25.5 cm	直立する口縁部に鉢型の杯部を持つ。	口縁部はなでによる凹凸が見られる。杯部外面は 510 は刷毛，509 は篦削りを行い，内面は篦磨きを行っている。	黄褐色 灰黒色	
B_2	512 513	口径 15 cm 〃 16.2 cm	直立する口縁部に数条の凹線文を持つ。	杯部内外面とも丁寧な篦削りを行う。	黄褐色 内黄褐色 外灰褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
B_2L	514 515 516	口径 19.4 cm 〃 20.1 cm 〃 26.4 cm	口縁直径が28cm近くになるB_2の大型品である。	杯部外面は横方向の内面は縦方向の篦磨きを行う。	黄白色 暗褐色 淡赤褐色	
C_2 3	517 518	口径 13.7 cm 〃 10.5 cm	椀状の杯部に少し長い脚を持つ。口縁部に数条の凹線文を持つ。	518の杯部外面は篦削りを行い脚部は篦磨きを行う。 杯部内面は刷毛調整脚部は篦削りを行う。	褐色－赤色	
脚部	519 520 521 523 524 522 525 526 527	脚径 6.6 cm 〃 6.2 cm 〃 7.5 cm 〃 9.4 cm 〃 8 cm 〃 10.5 cm 〃 20.7 cm 〃 22.9 cm	525，526は中型～大型の鉢形土器の脚部に，527は器台形の脚部になる可能性がある。	525は脚部に三条の凹線文と五条の沈線文間に三角透しを持つ。 526は脚端面に二条の外面には三条の凹線文を施しその上から篦による沈線を上下に脚端上面には刻目文を施している。	内淡黄褐色 外淡赤褐色 黄色 淡褐色 茶褐色 淡赤褐色 外淡褐色 黄白色 淡黄色	522は高杯形土器以外の脚台である。

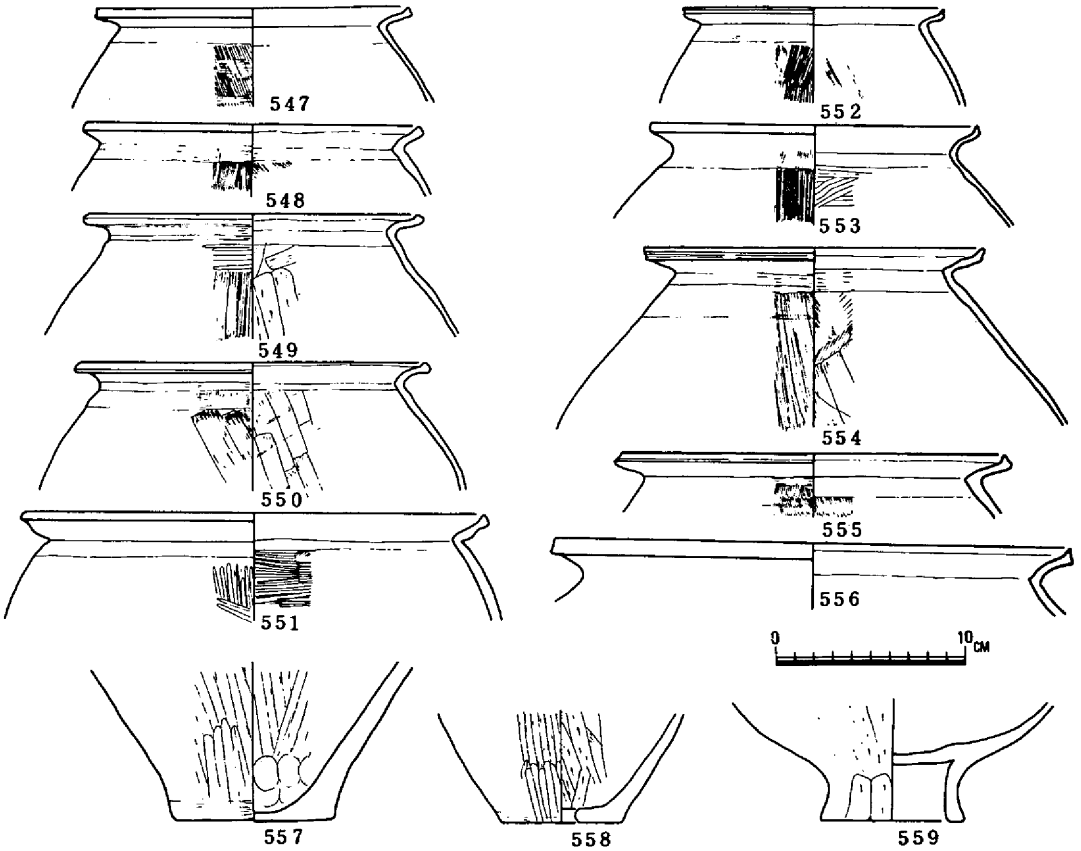


1. 表　土　層
2. 茶褐色花崗岩バイラン土層
3. 黄色やや粘質土層
4. 黄褐色花崗岩バイラン土層
5. 灰 褐 色 土 層
6. 暗茶褐色花崗岩バイラン土層
7. やや薄い黒色有機質土，花崗岩バイラン土層（包含層）
8. 黒～黒褐色有機質土，花崗岩バイラン土層（包含層）
9. 褐色花崗岩バイラン土層

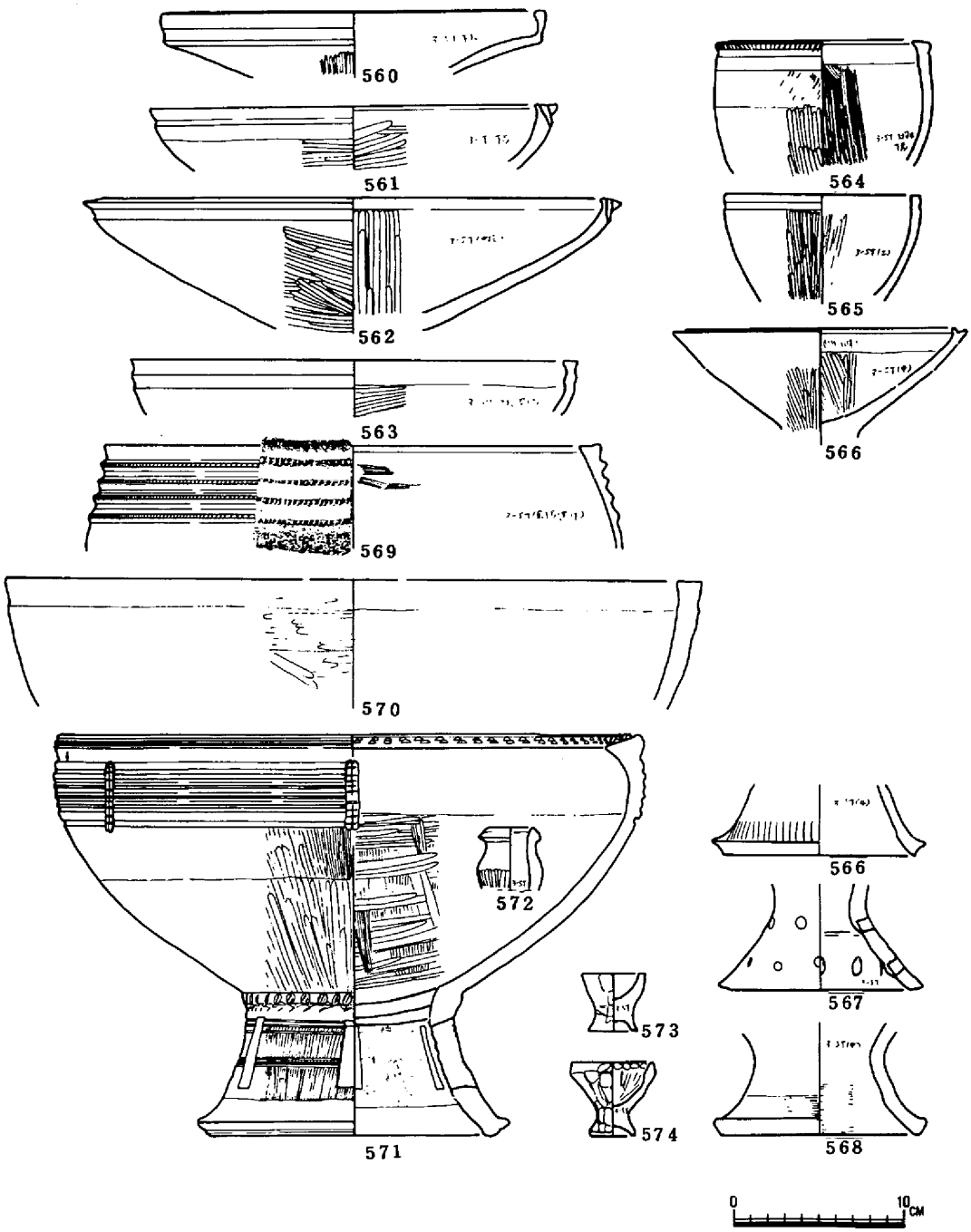
第４０図　第３地点南谷トレンチ土層断面図



第41図　第3地点南谷各トレンチ出土遺物　(1)



第42図　第3地点南谷各トレンチ出土遺物　(2)



第43図　第3地点南谷各トレンチ出土遺物　(3)

第3地点　南谷各トレンチ　<壺形土器>（第41図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
A_1	530′ 530 531	口径 21.6cm 〃 17.8cm 器高 27 cm（推） 口径 18 cm	球形に近い体部から筒状の頸部がわずかに外開きして口縁部に至る。 口縁端部には板目状工具による刻目文を施す。530′の口縁内面には凸帯が，2本，530は孔を内面から穿っている。 531は，530′，530程口縁部がそり返らず，端部も無文である。	頸部外面から体部中程までは刷毛目調整を行い中位以下は箆削りを行っている。その後体部中央部に板目状工具による列点文を2列施している。頸部と体部境の貼附け凸帯上には，指頭圧痕を施している。 内面は刷毛目調整を行っている。	暗茶褐色 外褐色茶褐色 淡褐色	南谷東トレンチ
A_2	532	口径 13.9cm	口縁端部に4条の凹線文を施す。	頸部に箆磨きを行う。	内暗褐色（黒褐色）	
A_3	533	口径 23cm	筒状の頸部からゆるやかに外反した口縁の端部を上下に拡張し，4条の凹線文を施す。 頸部にも刷毛調整後7条の凹線文を施す。	口縁端面には，棒状浮文，円形浮文を交互に配置し，内面には櫛描波状文を描く。		南谷西トレンチ出土であるがこれのみが新しい。
B_1	534 535	口径 9.2cm 〃 9.6 cm	ラッパ状に開く口頸部外面に1～2条の凸帯を有し刻目文を施す。	口頸部凸帯の下まではなでによって仕上げその下は刷毛目調整が残る。	内明茶褐色 外茶褐色 内淡灰褐色 外淡茶褐色	
C_1	536	口径 11.4cm	直立する口頸部の端面に凹線文を施し，さらに円形浮文を附ける。 口頸部と体部境の凸帯には箆による刻目文をめぐらす。	口頸部は縦方向の箆磨きを行っている。	内茶褐色 外黒褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
E_1	537	口径 28.2 cm	「く」の字状に折れた短に口縁部を持つ。	体部内外面とも刷毛調整する。		
	537′	〃 32 cm				
	538	〃 33 cm				
E_2	539	口径 17.5 cm	頸部に刻目凸帯を持つものと持たないものがある。			
	540	〃 17.8 cm				
	541	〃 17.6 cm				
	542		E_2 は口縁部を肥厚させ凹線文を数条施す。541 はさらに縦方向の箆描線，円形浮文を加える。			

<甕形土器>（第４２図）

甕$_1$	547	口径 16.0cm	「く」の字状に外反する口縁部から，体部は少し肩が張りぎみに底部に致る。	体部内外面とも上部は刷毛目調整，下部は箆磨きを行っているが箆削りを部分的（549）全体（551）に行っているものもある。内面に箆削りを行っている例もある（549・550）。	内淡灰褐色 外黒色	
	548	口径 17.2cm			淡赤褐色	
	549	〃 17 cm			暗赤褐色	
	550	〃 19.8cm			暗赤褐色	
	551	〃 24 cm				
	552	〃 13.4 cm	口縁端部をわずかに上方に引き上げる。552・554 555 は，凹線状を呈する。		外淡灰色	
	553	〃 16.6cm			明茶褐色	
	554	〃 17.7cm			淡赤褐色	
	555	〃 19.7cm			暗褐色－赤褐色	
	556	〃 26.6 cm			暗褐色	

<高杯形土器>（第４３図）

A_1	566	口径 15.6cm	浅い鉢形の杯部を持ち，口縁部にちよっとした受口を持つ。	内外面とも丁寧な箆磨きを行っている。		
A_2	561	〃 21 cm	口縁下を押さえることにより端部をわずかにひき出			
A_2L	562	〃 29cm				

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調法手法の特徴	色調	備考
			し口縁部下が凹線状を呈している。両者共口縁端部から杯部にむけて穿孔を行っている。			
B_2	560	口径 21.2 cm	皿状の杯部を持ち，直立する口縁部を持つ。	外面に細い篦磨きを行っている。		
C_2	564	〃 10.5 cm	椀状を呈する杯部を持つ高杯であるが，564 はそのまゝカップ状になるかも知れない。	内外面共丁寧な篦磨きを行っている。		
	565	〃 10 cm				
C_2L	563	〃 25.2 cm				
脚部	566	脚径 11.2 cm	円孔を持つが内部にまで貫通しない。566 は台付壺の脚部であろう。			
	567	〃 10.5 cm				
	568	〃 10.8 cm				

＜特殊小形土器＞

	572	口径 2.6 cm	壺状を呈す小形品である。	体部表面下半に篦磨きを行う。		
	573	口径 1.8 cm 高さ 2.5 cm				
	574	口径 4.8 cm 高さ 4 cm	盃状を呈する。丁寧な造りである。			

＜大型鉢形土器＞

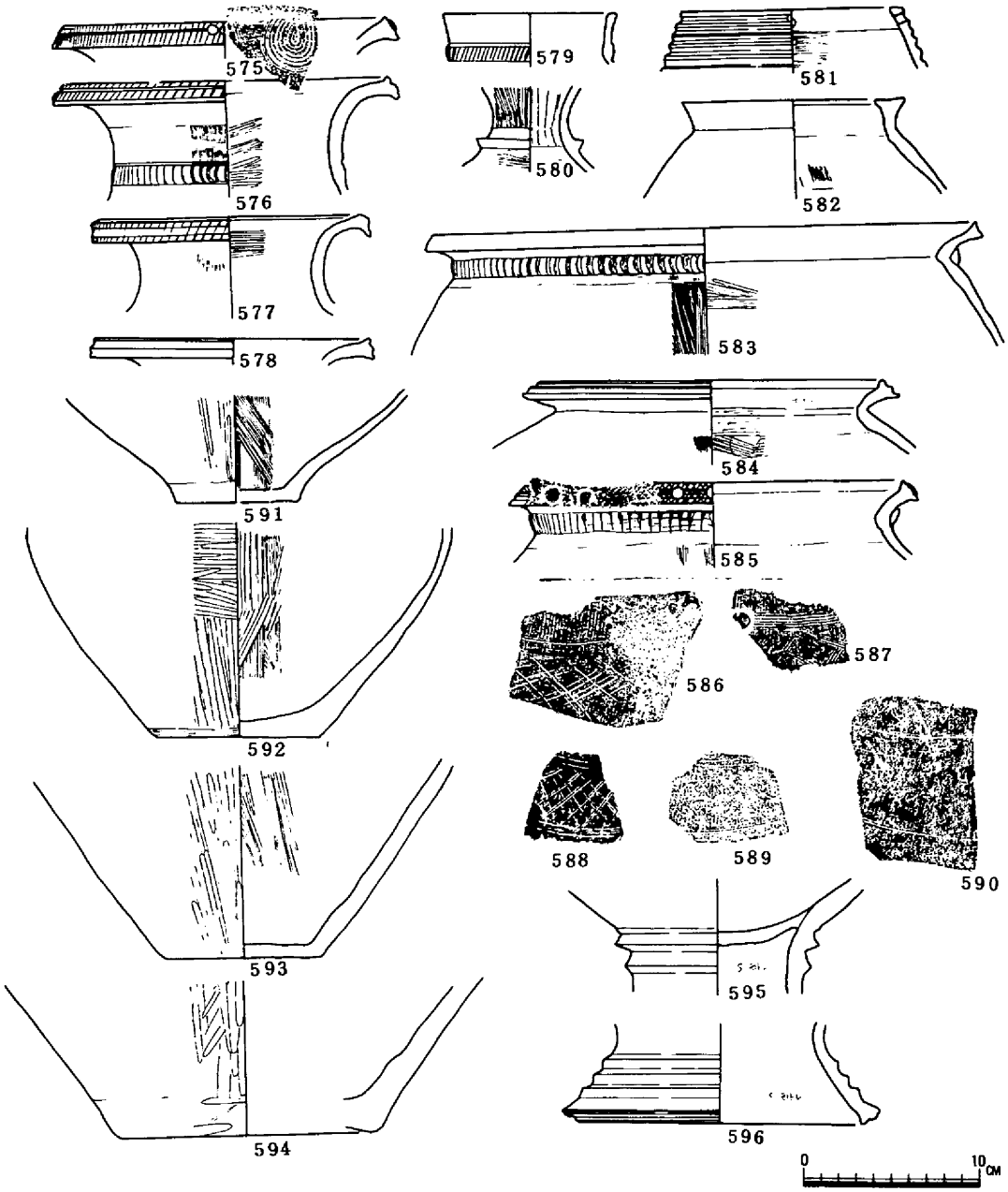
	569	口径 15.3cm	わずかに内傾する口縁部を持ち端面は水平になる。4 本の凸帯上に刻目文を施す。	杯部内面は刷毛調整を行う。	淡茶褐色	
	570	口径 37.4cm	やや外開きする口縁部を持ち端面は水平である。	杯部外面は篦磨き調整後口縁部をわずかになでて仕上げを行っている。	淡褐色	
	571	口径 29cm 器高 23.7cm	やや内側に曲る口縁部を持ち，口	口縁部端面には円形浮文を二列にびっしり	内 褐色 外 褐色 茶褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
	571	脚径 14.9cm	縁端面も内側を向く。球を半截したような杯部にどっしりとした脚部をそなえる。	配置する。口縁直下には，3条＋6条の凹線文，さらに，棒状浮文を貼附ける。 体部外面は篦磨き，内面は刷毛調整後その上から部分的に再度篦磨きを行っている。 体部と脚部境には少し凸帯状に隆起させ篦圧痕文を施す。 脚部外面は，刷毛調整後3本＋3本の篦描沈線文を施し，四角形の透しをあける。 内面は，刷毛調整後脚端部をなでによって仕上げている。		

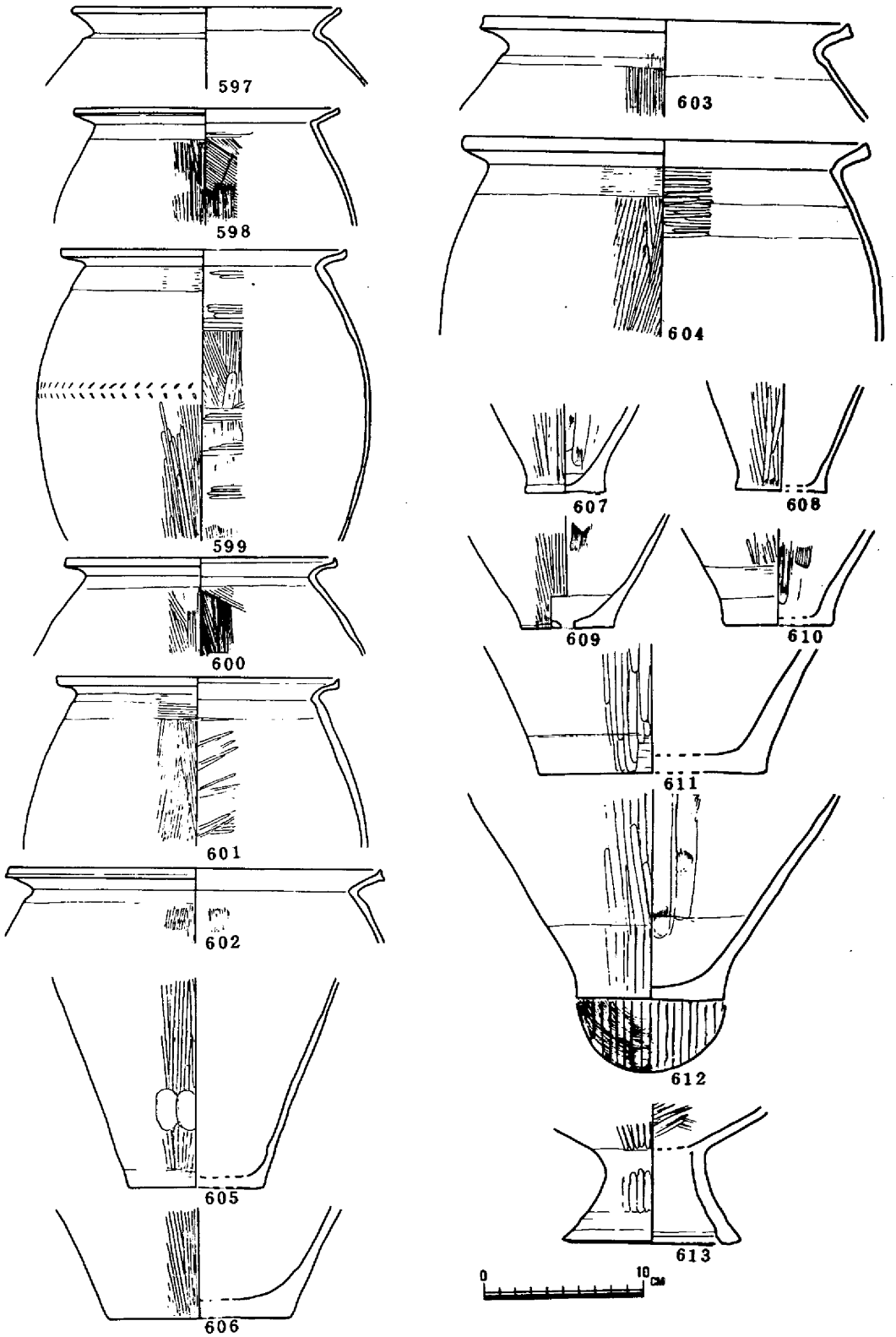
南谷西再トレンチ　<壺形土器>（第44図）

A_2	575 576 577 578	口径 18 cm 〃 18 cm 〃 14.6cm 〃 15 cm	筒状の頸部から外反する口縁部を持つ。口縁端部はわずかに上，あるいは下に拡張する。端面には1～2条の凹線文を施し，その上から篦による刻目文を，さらに574は円形浮文を施す。 575の頸部と体部境には指頭圧痕文を施す。	頸部外面に刷毛，内面には篦磨きを行っている。	内黒色 外灰黒色 内黒色 外赤褐色 灰黄色 茶褐色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
C_1	579	口径 9cm	短い口頸部が直立し，頸部と体部境の凸帯上に板状工具による刻目文をめぐらす。		淡灰色	
底部	591 592 593 594	底径 6.9 cm 〃 9.1 cm 〃 8.8 cm 〃 14.2 cm			内灰褐色 外淡褐色 内淡褐黒色 内赤茶褐色 外淡茶褐色 内褐色 内灰褐色 外暗緑褐色	
D_2	581	口径 11 cm	口縁直下に5条の凹線文を施す。	内面は箆磨きを行う。		
E_1	583	口径 30.6 cm	「く」の字状に外反する口縁部を持つ。頸部に指頭圧痕文を施す。	体部外面は刷毛，内面は箆磨き調整を行う。		
E_2	584 585	口径 19.3 cm 〃 21.3 cm	584は口縁端部に2条の凹線文をめぐらす。 585はさらに円形浮文上下に箆描沈線を，頸部凸帯上には箆刻目文を施す。	584の体部内面の上端部を2回横方向に箆削りを行い，その下は刷毛によって調整している。		



第44図　第3地点南谷西再トレンチ出土遺物　(1)



第45図　南谷西再トレンチ出土遺物 (2)

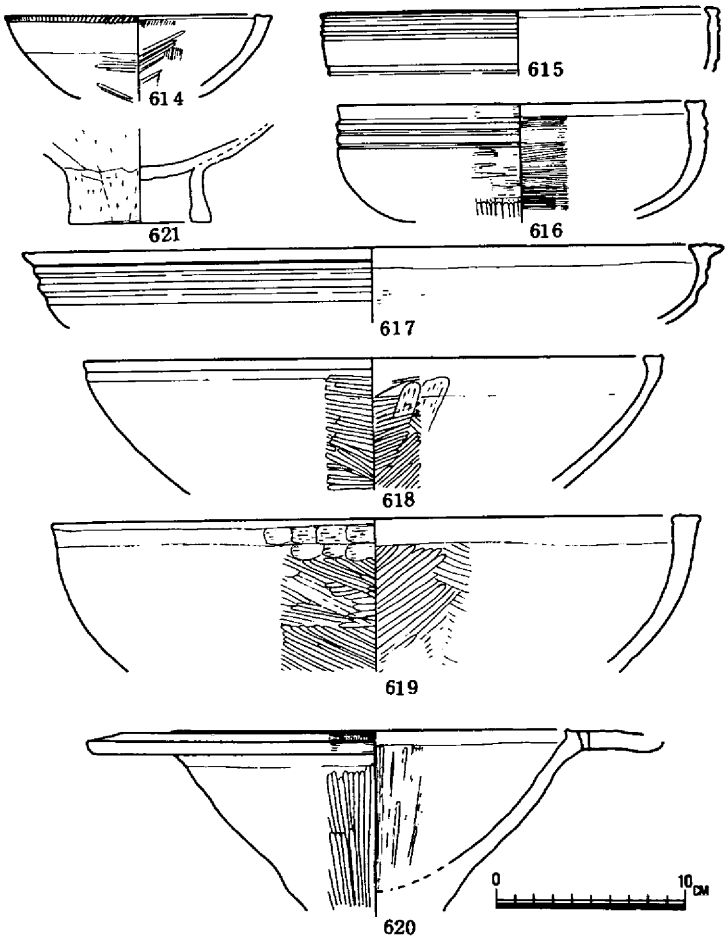
＜甕形土器＞（第45図）

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
甕1	597 598 599 600 601 602 603 604	口径 16.6 cm 〃 16.6 cm 〃 18.0 cm 〃 17.0 cm 〃 17.8 cm 〃 23 cm 〃 22.4 cm 〃 24.7 cm	口縁直径が17cm前後のもので，「く」の字状に外反する口縁部に余り肩がはらずにすんなりした体部を持ち，底部につづくものと，肩が強く張り重心が高くなるものがある。	体部外面上半部は刷毛目，下半部は篦磨きを行い，599は体部中程に板状工具による列点文を2列施す。 内面は刷毛，部分的には篦磨きによって調整している。	内—赤(褐)色 内—淡黄褐色 外—淡灰（褐）色 茶褐色 内—濃茶褐色 外—茶褐色 赤褐色	
底部	605 606 607 608 609 610 611 612	底径 18.6 cm 〃 5.0 cm 〃 5.8 cm 〃 5.7 cm 〃 6.5 cm 〃 6.5 cm 〃 14 cm 〃 9 cm		底部内面下半部には篦削りは行われていない。	外—黄灰色 内—黒褐色 外—赤褐色 内—暗灰紫色 暗黄褐色 外—灰紫色 外—淡灰紫色 内—赤褐色 外—褐（紫）灰色	

＜高杯形土器＞（第46図）

A1	614	口径 12.2 cm	浅い鉢形の杯部をもつ。	口縁端部外面に刻目文を施し，杯部内外面とも篦磨きを行っている。	灰色	
	618 619	口径 28.4 cm 〃 31 cm	口縁直径が30～35cmで，614に比べれば大型のものである。	杯部内外面とも丁寧な篦磨きを行い，部分的に618では内面に619では外面に篦削りを行っている。	内濃茶褐色 外茶褐色 内淡茶褐色 外褐色	
C2	615 616	口径 19.4 cm 〃 17.2 cm	椀状の杯部を持ち少し大型のものである。	口縁部に数条の凹線文を持つ。616の杯部外面は横方向の，底部は縦方向の篦磨きを行っている。	赤褐色 内：灰黄色 外：赤黄色	
E1	620	口径 20.0 cm	鉢形の杯部からほゞ水平に伸びる口縁部を有する。	杯部内外面とも丁寧な篦磨きを行っている。	内—幼黒色 外—乳白色	

類	土器番号	法量	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	色調	備考
E_1	620	口径 20 cm	杯部と口縁部境に隆起帯がめぐる。口縁部水平面に孔をうがつ。			
		＜製塩土器＞				
脚部	621	脚径 5.3 cm		外表面は脚部から篦削りを行い，内面は篦磨きが行われている。	内：体部－赤茶褐色 脚－褐色 外：茶褐色	



第46図　南谷西再トレンチ出土遺物(3)

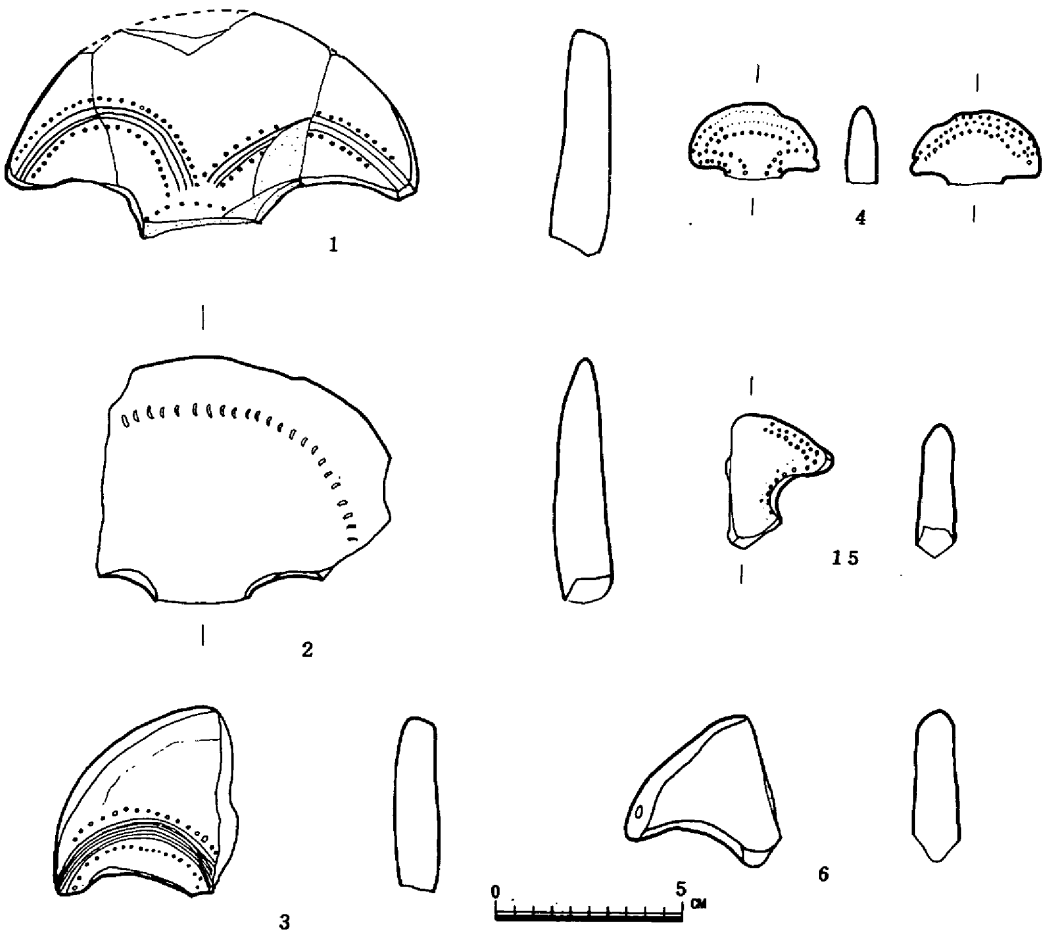
第４節　その他の出土遺物

1）分銅形土製品（第47図）

分銅形土製品は岡山県を中心に１６０個近くが知られている。この城遺跡からは６例出土している。このほとんどが包含層内の出土である。

1.　第１地点南斜面トレンチ出土である。３個に別々に出土したが整理中に接合できたものである。上半部のみであるが，横（最大径）10.7 cm，現存長 5.4 cm，くびれ部幅 3.5 cm，厚さ１～1.5 cmを測る。表面は中央部で凸状になり，くりこみ部にそって三条の櫛描弧文を描き，その両側とくびれ部を横断するように連続刺突文で飾る。裏面は篦磨きを行う。表面は黄褐色を呈し，１mm前後の砂粒，雲母をかなり多く含む。

2.　第１地点南斜面トレンチ出土。現存横幅 7.6 cm，現存縦 6.5 cm，くびれ部幅 2.5 cm，最厚 1.4 cm を測る。表面は風化しているが上弧にそって刺突文で飾る。表裏面とも黄褐色を呈し，１mm前後の砂



第４７図　各地点出土分銅形土製品

粒，雲母をわずかに含む。

3. 第1地点東斜面出土。現存横幅4.6㎝，縦5㎝，最厚1.2㎝を測る。左側のみの破片である。表面に6～7条の櫛描文を描き，両側に連続刺突文で飾る。表裏面とも黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。

4. 第1地点北斜面（C区）出土。横3.4㎝，現存長2㎝，くびれ部幅1.5㎝，最厚0.8㎝，を測る小型品である。表面は上弧にそって3列くりこみ部にそって2列の，裏面は上弧にそろって3列の連続刺突丈で飾る。

表面とも暗黄褐色を呈し，砂粒も少なく，焼成も堅緻である。

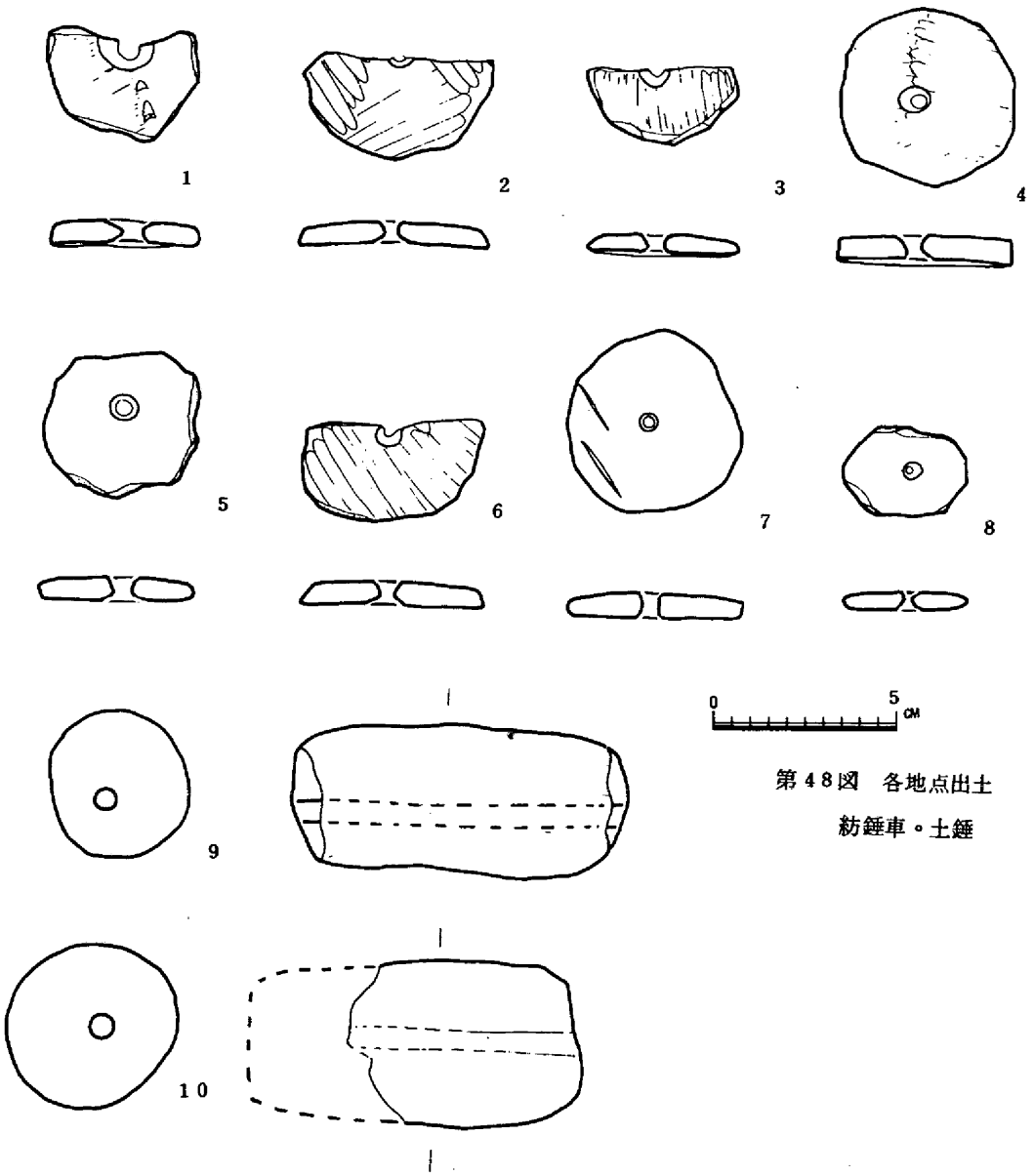
5. 第3地点　　出土。現存横幅3㎝，縦3㎝，最厚1㎝の右側の小破片である。上弧とくりこみ部にそって2列の連続刺突丈で飾る。表裏面とも黄褐色を呈し，1㎜以下の小砂粒，雲母を多く含む。

6. 第3地点第2号住居址周辺出土。現存横幅4㎝，縦4㎝，最厚1.2㎝の左側の破片である。上弧端からくりこみ部にむけて幅2～4㎜の孔を穿っている。表裏面とも暗褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含むが，雲母は少ない。

2）紡錘車・土錘（第48図）

紡錘車（1～8）は土器の胴部等を利用して，円板状に打ちかき中央部を穿孔したものである。
土錘（9. 10）は円柱状の中心に5㎜前後の穴が貫通している。

	直　径	出　土　場　所	
1	39.5（㎜）	第1地点3トレンチ	
2	50.0（〃）	第1地点E	
3	41.0（〃）	第1地点E	
4	47.0（〃）	第3地点トレンチ4	
5	41.5（〃）	第3地点南谷トレンチ(4)	
6	49.0（〃）	第3地点南谷トレンチ	
7	47.5（〃）	第3地点南谷西再トレンチ	
8	33.7（〃）	第3地点南谷西再トレンチ	
		長　さ	
9	41.0（〃）	90.0（㎜）	第3地点西半部
10	45.0（〃）	89.0（〃）	第3地点　〃



第48図　各地点出土
紡錘車・土錘

3）打製石庖丁（第47図1～3，第48図1～5）

サヌカイト剝片を素材としたもので，全て打製品である。

形態は，短冊形を呈す例（第47図1，第48図1・2・4・5），楕円形を呈す例（第47図3，第48図3），鎌形を呈す例（第47図2）の三形態である。

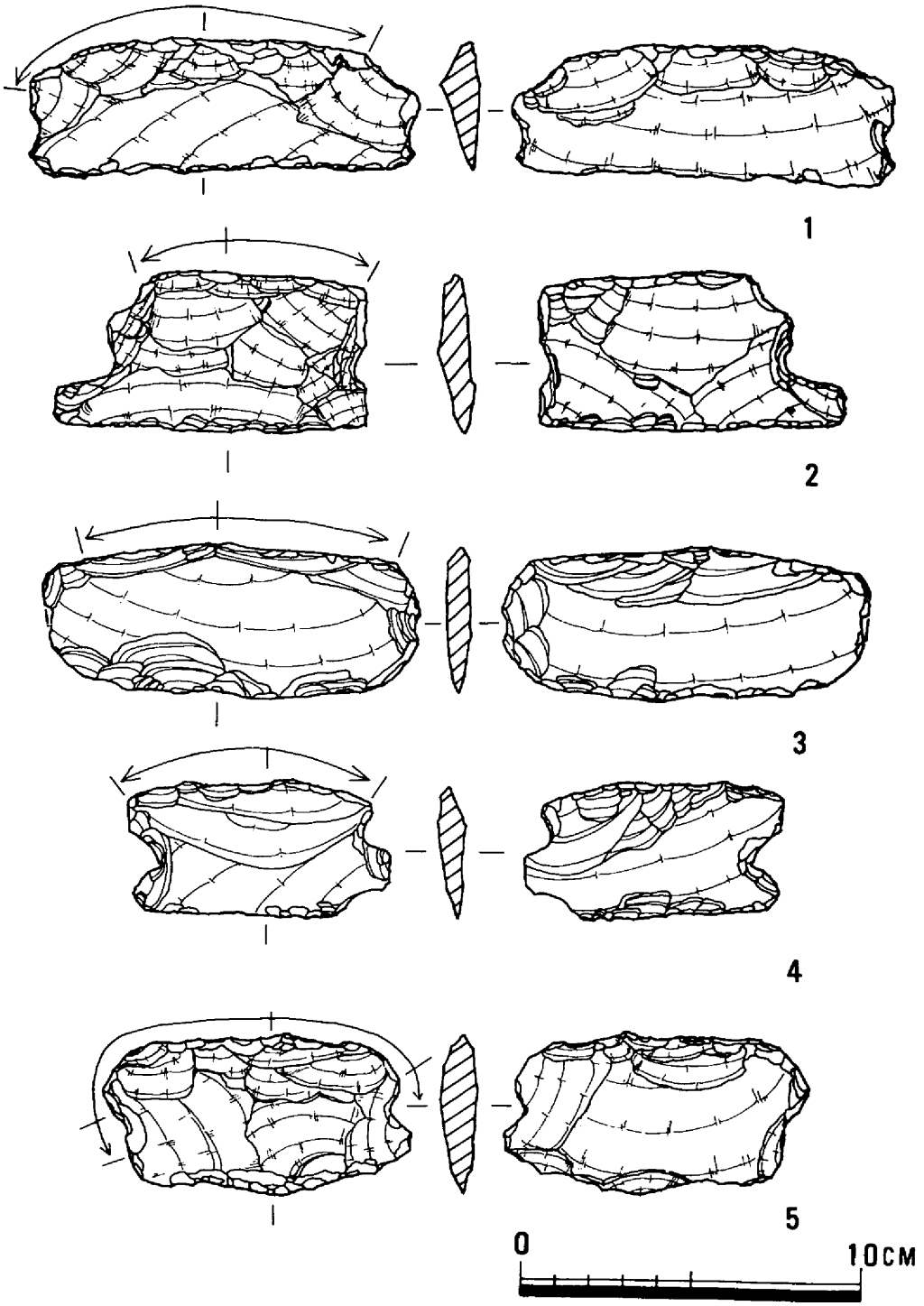
素材はヴァルヴォを背部に，尾部を刃部としている。全て打面を有しており，或る一定の剝離技術の存在を思わしめる。背とする打面部には，すりつぶしを施しているものが殆んどであるが，すりつぶしを施さない例（第47図2）も存在する。背部は，その厚さを減じるための調整剝離を両面（第47図1，第48図1・2・3・4・5），片面（第47図2・3）から施しており，ステップ・フレーキング，フリー・フレーキングを併用している。

紐掛けの抉りは，両小口部に2抉1対で敲打調整されており，すりつぶしが施されている。大形品ほど浅く，小形品ほど深く調整されており，その使用法とも関連している。

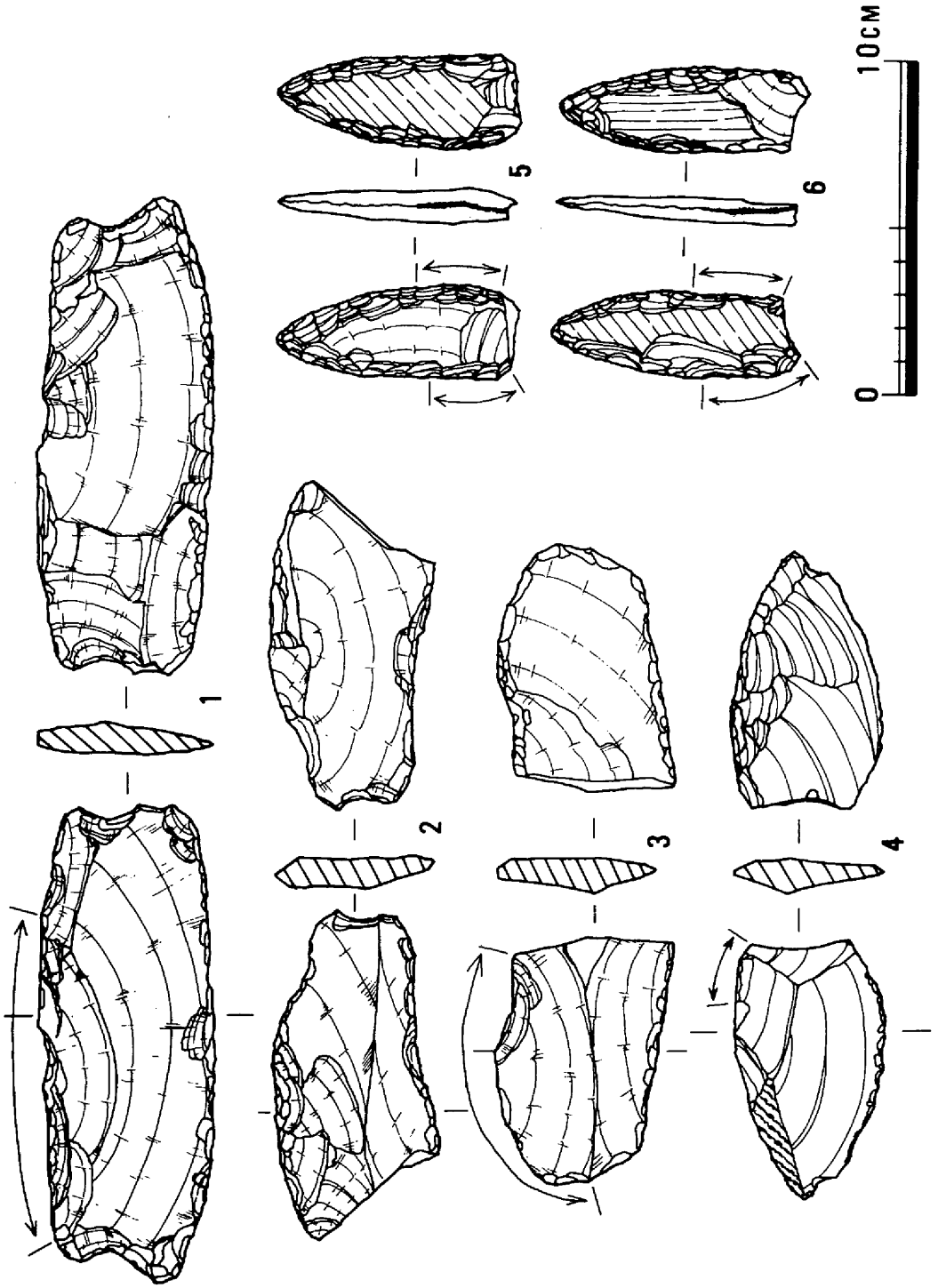
また，石庖丁は掌中に納めて使用される性質上，幅・厚さは有機的関連性を有している。そこで，当遺跡出土の石庖丁の幅・厚さの平均値を出してみると，幅4.675 cm，厚さ0.925 cmとなり，掌にすっぽり入る数値と思われる。例を用木山遺跡にとると，幅4.85 cm，厚さ0.89 cm，紫雲出山遺跡においては，幅4.85cm，厚さ0.995cmを数え，当遺跡出土石庖丁の数値に近い。つまり，石庖丁の幅の平均値は当然の事ながら手によって決定されるのである。この事は，素材として剝出される剝片の調整手法にも影響を与えている。第4 図2・第48図5は，幅広の剝片の尾部を折（切）断し，ステップ・フレーキングを施してその厚さを感じ，爾後フリー・フレーキングによって施刃する方法が実施されている。この調整手法が，刃部の形状（直線刃・内彎刃・外彎刃）の在り方にも影響しているものと考えられる。

このように，石庖丁の製作は，幅と厚さを主としており，長さは従的存在とされている。この事は，長い石庖丁と短かい石庖丁（抉りが深い）の併存という事実からも証左される処であろう。

No.	形　態	長さ	幅	厚さ	重　さ	刃部形状	出土場所
47図－1	短冊形	14.2	5.3	0.95	99.4	外　彎	第1地点A区
2	鎌　形	9.8	5.0	0.9	51.8	若干内彎	第3地点X区
3	楕円形	7.3	5.2	1.05	48.9	外　彎	第1地点　T－6アゼ
48図－1	短冊形	11.2	3.9	1.1	60	若干内彎	第1地点　A区
2	短冊形	8.9	4.7	0.95	50.5	直　刃	第1地点　Z区
3	楕円形	10.8	4.5	0.7	57.9	外　彎	第1地点　南西隅拡張区
4	短冊形	7.5	4.0	0.75	32.25	直　刃	第3地区　南谷トレンチ
5	楕円形	8.9	4.8	1.1	58.05	外　彎	第3地点　H－2，P－1



第49図　各地点出土石器　(1)



第50図　各地点出土石器 (2)

4) 打製石鏃（第51・52図）

全てサヌカイト剝片を素材とした打製の石鏃で，当遺跡において32個検出されている。

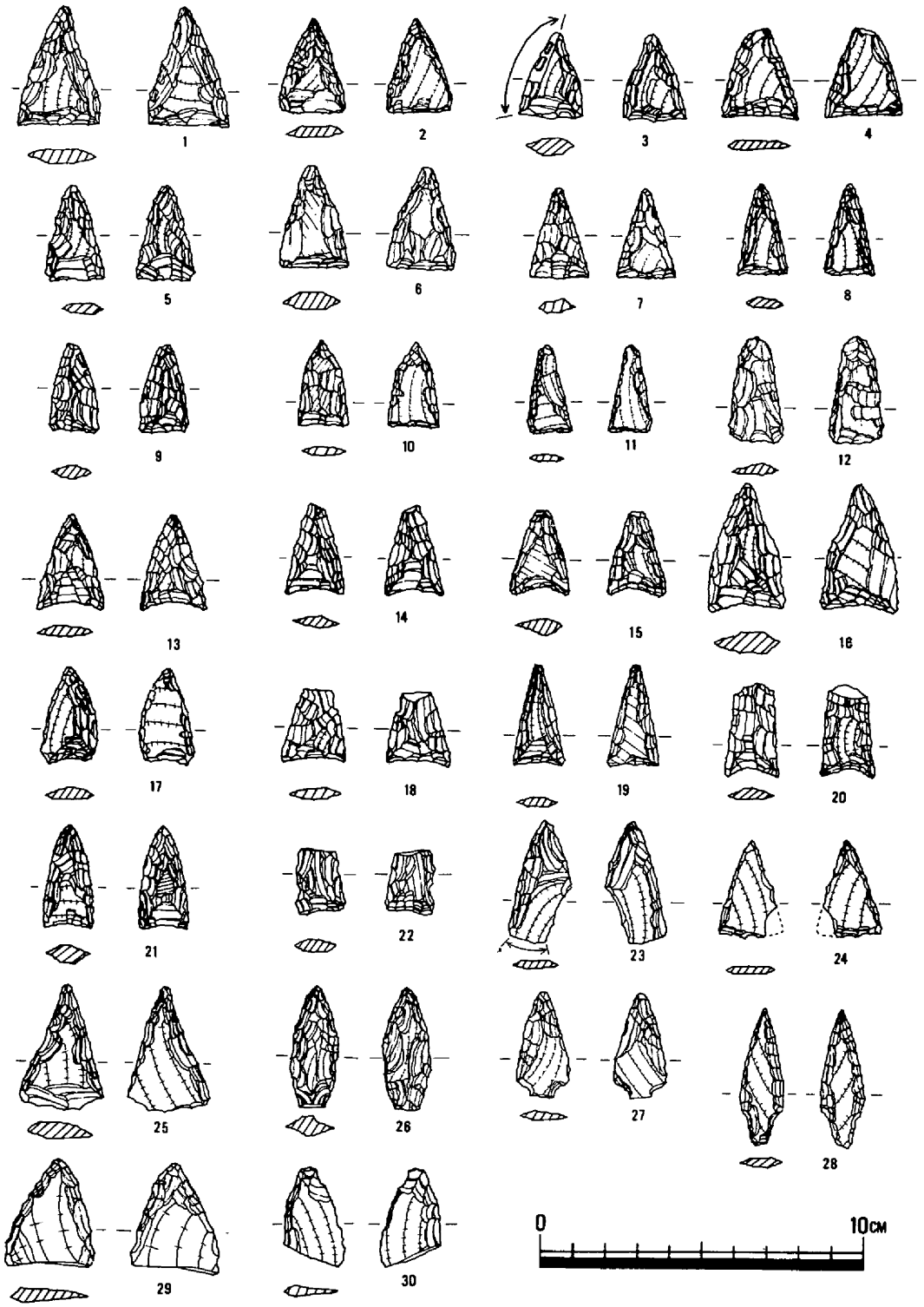
石鏃基部の形状によって2分類すると4形式ある。平基式（第51図1～12），凹基式（第51図13～22），凸基無茎式（第51図23～25，第52図32），凸基有茎式（第51図26～28）となり，基部欠損により不明3個を数える。

各石鏃とも，ほぼ同巧の調整手法を示すが，精粗の差は若干見受けられる。周縁よりの調整剝離が，ほぼ中央部まで施され，断面菱形を呈するもの，剝片の周縁より若干の調整剝離を施し，断面扁平な六角形を呈するもの，及び剝片の周縁を充分に利用して，他縁辺部に調整剝離を加え，断面扁平な三角形を呈すものがある。形態による調整剝離の差異は顕著ではない。

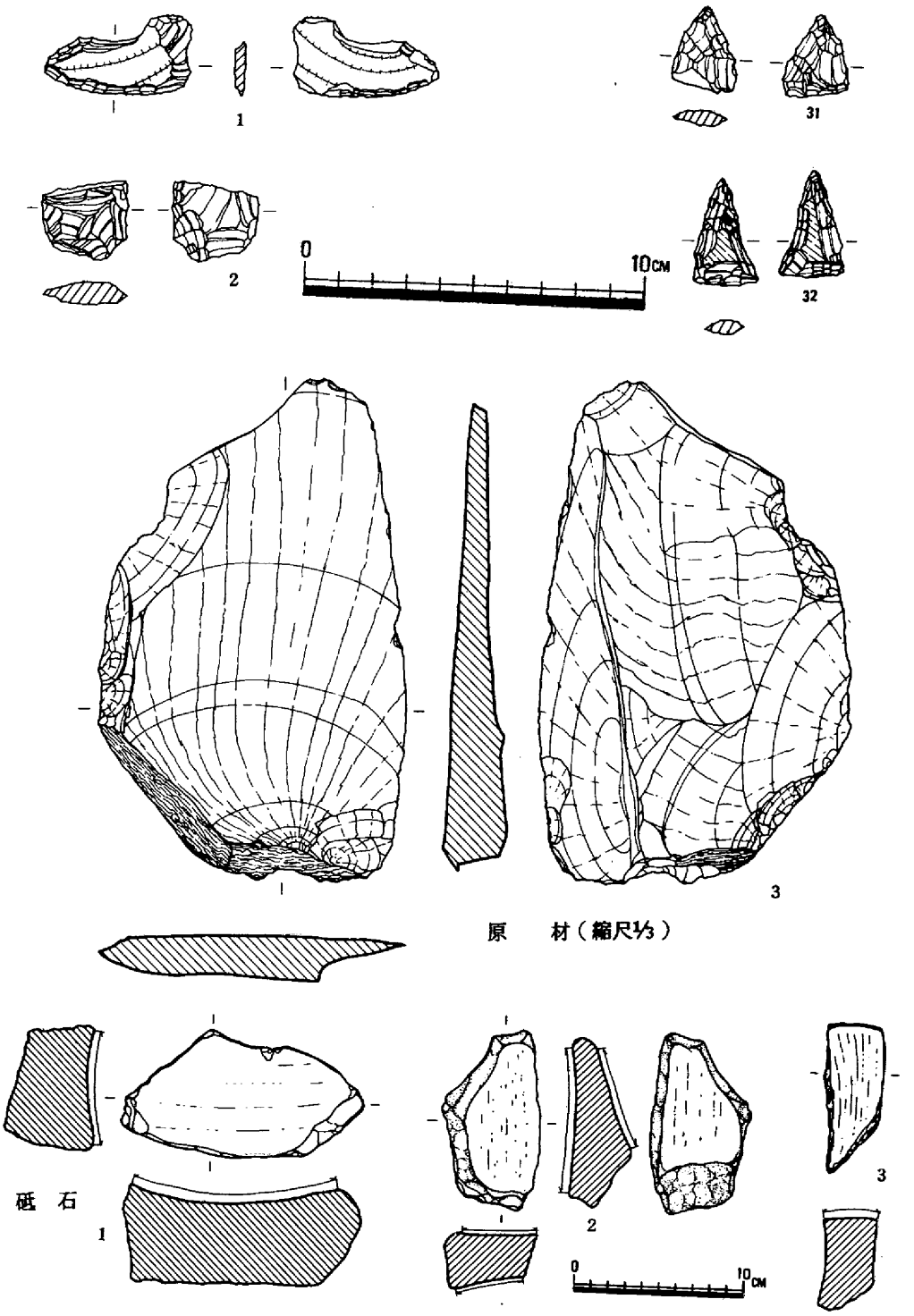
石鏃の欠損例は約4割32例に達し，就中H－2出土の6例はH－2出土石鏃12例の5割に当る。欠損部位は先端部（第51図4・9・14・15・18・19・20・22），基部及び翼部（第51図23・24・29・30，第52図31）である。第51図29・30及び第52図31の3例は基部の欠損例として取り扱ったが，折り取られたままの状態を呈しているものと考えられる。特に第51図25の石鏃は素材剝出面を多く留め，調整剝離は周縁のみに実施され，基部は3回の加撃によって仕上げられている。前出3例よりも更に調整過程を経たものとも理解される。このように，基部欠損例として取り扱った石鏃が，使用によるものなのか，製作途時にあたるものなのか，或いは折（切）断のままで製品として機能し得るものであるのか俄かに判断し得い面を有している。

No.	形式	幅	長さ	厚さ	重さ	出土地点
1	平基	2.5	3.6	0.4	4.05	第3地点，H－2，ピット4
2	〃	2.0	2.8	0.35	2.3	〃，西谷トレンチ6～7段目黒色土層
3	〃	2.0	2.6	0.5	2.5	〃，南谷西再トレンチ，左側縁被研磨
4	〃	2.4	2.9＋a	0.3	2.0	〃，H－2，ピット4
5	〃	1.8	2.85	0.35	1.7	〃，H－1，土手内
6	〃	2.1	3.1＋a	0.55	3.75	〃，H－2
7	〃	1.8	27	0.45	1.3	〃，H－2
8	〃	1.6	2.75	0.3	1.45	〃，A・Z区
9	〃	1.55	2.7＋a	0.4	1.45	〃，X区
10	〃	1.55	2.55	0.25	1.05	〃，H－8
11	〃	1.4	2.7	0.2	0.8	〃，H－8
12	〃	1.7	3.1	0.4	2.5	〃，H－2
13	凹基	2.0	2.8	0.35	1.5	〃，南谷トレンチ，6～7段目黒色土層
14	〃	1.8	2.7＋a	0.4	1.65	〃，T－7（西拡張区），風化著し
15	〃	1.85	2.55＋a	0.5	1.65	〃，11トレンチ

No.	形　式	幅	長　さ	厚さ	重さ	出土地点
16	平　基	2.4.	3.9	0.65	4.7	第3地点，南谷トレンチ，（主）黒褐色土
17	〃	1.7	2.9	0.4	1.9	〃　，H－2
18	〃	1.95	2.2＋α	0.35	1.6	〃　，南谷トレンチ，6～7段目黒色土層
19	〃	1.7	3.3＋α	0.3	1.35	〃　，H－2，床面内（埋土）
20	〃	1.7	2.8＋α	0.35	1.75	〃　，（T－7）北斜面土手，風化著し
21	〃	1.55	3.1	0.55	1.85	〃　，南谷トレンチ（4段目）
22	〃	1.5	1.8＋α	0.4	1.5	
23	凸基無茎	1.6	3.6	0.3	2.55	第3地点，H－2，基部被研磨
24	〃	2.0	2.9	0.25	1.4	〃　，H－2
25	〃	2.55	3.75	0.5	3.65	第1地点，A区
26	凸基有茎	1.5	3.6	0.6	3.05	〃　，南西隅南拡張区
27	〃	1.6	3.15	0.3	1.65	第3地点，11トレンチ
28	〃	1.35	4.1	0.3	1.8	〃　，H－2
29	〃	2.7	3.2	0.45	4.5	
30	〃	1.9	3.0	0.35	1.75	第3地点，H－2
31	〃	1.9	2.45	0.45	2.05	〃　H－2
32	凸基無茎	1.9	3.25	0.45		



第５１図　各地点出土石器　(3)



第52図　各地点出土石器(4)

5）石　　斧（第53図）

1は第3地区H－1出土である。

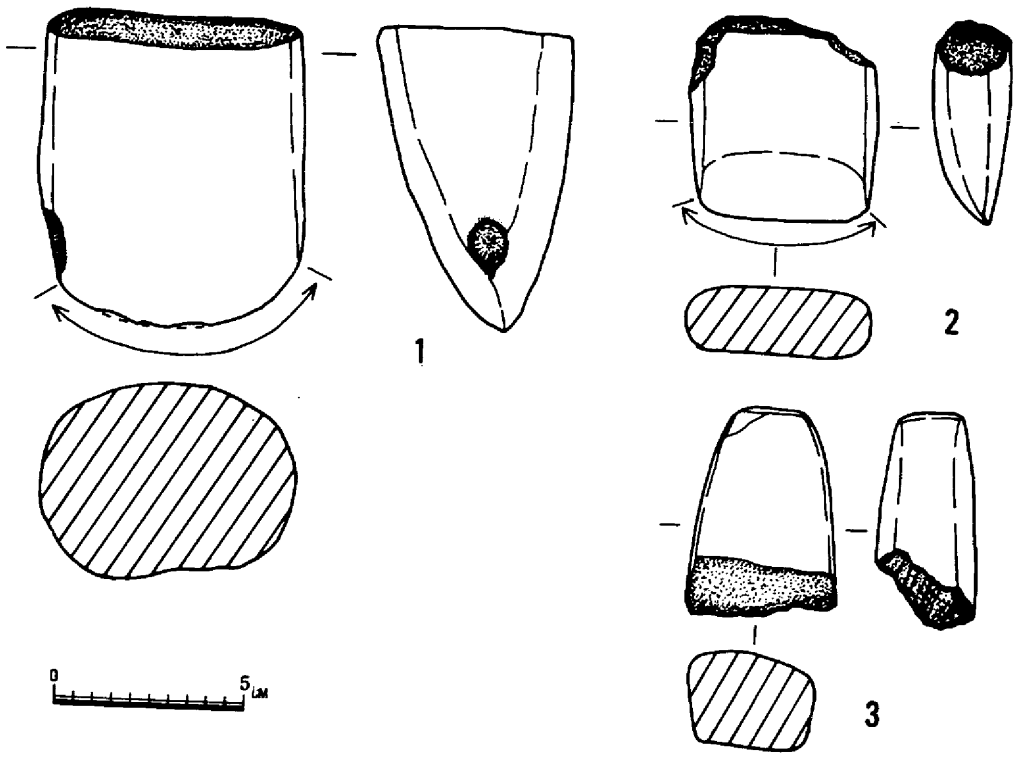
硬質砂岩を素材とした太型蛤刃斧の刃部片である。刃部は蛤状をなし，使用痕が明瞭に残る。叩き石等に転用された可能性がある。現存長8.2 cm，最大幅7.1 cm，最大厚5.2 cm，重さ423.5 gを計る。

2は第3地点南谷西再トレンチ出土である。

硬質砂岩を素材とする扁平片刃石斧の刃部片である。片部には微細な使用痕跡を残す。現存長53cm，最大幅6.0 cm，最大厚2.0 cm，重さ92 gを計る。

3は第3地区南谷西再トレンチ出土である。

粘板岩を素材とした柱状石斧の頭部片である。現存長5.4 cm，最大幅4.0 cm，最大厚2.7 cmを計る。



第53図　各地点出土地石器(5)

6）片面加工器（第47図4）

第1地点E区出土である横長のサヌカイト剝片を素材としており，一部自然面を留める。主要剝離面には入念な調整剝離を施し，その厚さを減じている。打面右端より約1.6cm程の部位まですりつぶしが施される。刃部には使用痕が残る。長さ7.7cm，幅4.4cm，重さ31gを計る。

7）打製石槍（第47図5・6. 第52図）

第47図5・6は両者とも第3地点南谷トレンチから出土しているサヌカイト剝片を素材としており，相似た形状を示す。最大幅は基部付近にある。相平行する側縁部は基部より4cm程の部位より先端にかけて漸次その幅を減じ若干ずんぐりとした形態を示している。調整剝離は周縁のみに施され，槍身中央部には多くの素材剝出面を留めるため，断面は扁平な六角形を呈している。基部より約3cm程までは両側縁に着柄のためのすりつぶしが施されている。

第52図左下は前二者と異なり入念な調整剝離によって仕上げられている。しかし，両側縁にはすりつぶしは施されていない。形態等より石槍基部と思われる。

8）石　　匙（第52図）

第1地点A区出土であるサヌカイト剝片を素材としている。形態は横形を呈し，つまみは一方に片寄っており，つまみ作出の調査は顕著でない。刃部作出は両面よりなされている。長さ4.4cm，幅2.3cm，厚さ03cm，重さ4gを計る。

9）原　　材（第53図）

3は第2号住居址内から出土したサヌカイト原材でA面は強い一つの敲打により大きな剝離面を残す。後数度に渡る細かな剝離面が見られる程度で一部に自然面（風化面）を残している。B面は，面に対して直角の敲打あるいは横斜めの方向の敲打が数回に渡って行われ，無理な剝離によりフィシャーが整然と表れていない。この石材は第2号住居址内から出土していることと大きさからいって石庖丁，石鏃等の石器類を作る原材であろう。

10）砥　　石（第53図）

4は，第1地点北斜面出土で一面のみに磨面が残る。細かい目の砂岩で中砥～荒砥であろう。

5は，第1斜面北斜面出土で両面に磨面が残る。花崗岩質で中砥～荒砥に使用されたのであろう。

6は，第3地点東半部の出土で硬質の岩石で一面のみに磨面が残る。仕上げ砥に使用されていたものと思われる。

第4章　まとめにかえて

これらこれまでの成果を引用しながら城遺跡の土器分類を試みまとめにかえたい。この遺跡出土の遺物は住居址内の一括出土遺物を除いてはほとんど斜面堆積の一括として地点ごとにとらえて，各地点出土の一括を指標にⅠ式～Ⅲ式に分類を試みた。以下その特徴の概略を記してみよう。

児島城Ⅰ式

第3地点南谷各トレンチから出土しているものを指標にする。壺形土器A_1，A_2，B_1，C_1，D_2，E_1，E_2，甕形土器1，高杯形土器A_1，A_2，B_1，C_1，E_1，大型高杯形土器，大型鉢形土器，製塩土器（脚部のみ）からなり，壺形土器A_2，E_2，高杯形土器C_2などの口縁部に凹線文手法を取り入れているが，甕にはまだ使用されていない。壺形土器B_1・高杯形土器E_1はこの時期のみ存在する。

児島城Ⅱ式

第1地点南斜面，北斜面の一部，第3地点西半部，東半部から出土しているほとんどがⅡ式に含まれる。壺形土器A_2，C_2，D_2，E_2，F_2，F_3，G，甕形土器2，2，高杯形土器A_1，A_2，B_2，C_2，大型高杯形土器，器台形土器，鉢形土器，製塩土器U，U_L，V，V_L，からなりほとんどの器種に凹線文手法を取り入れている。Ⅰ式との間には差がありもう一型式入る可能性がある。

児島城Ⅲ式

第1地点北斜面の一部，第3地点西半部，東半部の一部から出土している。壺形土器A_3，F_3，甕形土器2，3，高杯形土器B_3などからなり，Ⅱ式の段階が凹線手法のピークまでの上昇期とすればⅢ式は下降期にあたり，高杯形土器B_3，甕形土器3に凹線文手法というより撫でだけで終ってしまう器形が出現する。その後，凹線文手法は，後期の上東遺跡鬼川市Ⅰ式の段階でほとんど消失してしまい，壺形土器は縁部，器台形土器脚部などにわずかに残る程度で頸部は沈線に変わり，鬼川市Ⅱ式の段階では壺形土器からも消失しわずかに中期の凹線文手法の範中に入らない手法が見られるようになる。鬼川市Ⅱ式の段階ではどの器種からも凹線文手法は消失してしまうのである。

中部瀬戸内北岸における弥生時代中期の土器編年

岡山県南部における弥生時代中期の土器編年を中心にふり返ってみよう。1938（昭13）年，小林行雄氏等による全国的な「弥生式土器聚成図録」が編纂され中部瀬戸内第1様式から第5様式までが設定された。また地元では鎌木義昌氏によって1950（昭25）年「吉備考古」に報告された前山遺跡がある。この段階では図示して報告されなかったが，北斜面と東斜面から出土する土器には差異があることが指適され，前者を弥生式土器聚成図録にいう中部瀬戸内第2様式（古）に，後者を同第3様式に比定している。1953（昭28）年には，近藤義郎氏により備中新邸貝塚の発掘調査報告が公にされ中期中葉として新邸Ⅰ式，Ⅱ式を設定した。その後，1960（昭36）年には弥生式土器集成資料編が編集され，鎌木義昌氏により先の前山遺跡の資料を南斜面（前山Ⅰ式），東斜面（前山Ⅱ式）とし

てとらえられ，又本編では菰池遺跡の資料が公にされ前山Ⅰ式の資料が追加され，前山Ⅰ式とほとんど同時期的であるがわずかに新しい時期とし菰池式とした。その後の編年研究にある一定の役割を果した。

また一方，1960（昭36）年に編集された「農耕文化の生成」に見られるように，前期遺跡の追跡研究による高田遺跡の報告が見られ，中部瀬戸内における前期に続く中期最初の時期としてとらえられ，高田式と仮称された。また倉敷考古館研究集報には児島保育園遺跡，仁伍遺跡など児島をはじめとして中期後半～終末にかけての諸遺跡の報告がなされている。

その後，岡山県南部地方では，山陽新幹線の建設など大型の開発計画が進む中でそれに対応する行政発掘調査が行われ，その結果がまとめられ，弥生時代中期の一括資料が取り上げられている。山陽新幹線建設に伴う1971（昭・47）年の南方遺跡の報告における，前期の南方Ⅰ式に続く南方Ⅱ式は高田式を中期Ⅰ古の段階とすれば，新の段階にあたるものとされ，それに続く南方Ⅲ式を設定した。これは前山Ⅰ式，菰池式，新邸Ⅰ式と併行する時期にあたるものである。

1974（昭・49）年，同じく山陽新幹線建設による雄町遺跡の調査においては，中期を4型式7類に分類を行っている。それは，雄町3類を南方Ⅱ式に，雄町4類を前山Ⅰ式・菰池式より後出で前山Ⅱ式より古いタイプの一括として捉え，前山Ⅰ式とⅡ式を埋めるものと考えている。雄町5類は前山Ⅱ式に，雄町6類を中期最終末とされる仁伍式に併行させている。また，赤磐郡山陽町山陽団地造成に伴い，丘陵斜面から菰池式～前山Ⅱ式にわたる大住居址群が調査されている。

1973（昭・48）年には，児島半島東端の山頂に位置し貝塚を伴う貝殻山遺跡の調査が岡山大学考古学研究室によって行われ，この調査において住居址6棟が検出され良好な遺物を伴っている。この出土遺物をⅠ類からⅢ類に分類している。Ⅰ類は畿内第Ⅲ様式（古）に，第Ⅱ類を前山Ⅱ～仁伍式＝畿内第Ⅳ様式に併行させ，第Ⅲ類を中期最終末においている。

また岡山県北部美作地方においても，中国縦貫道建設による事前調査により，南部との比較検討をすることのできる資料が増加している。その一つは，英田郡作東町高本，高本遺跡，津山市押入，押入西遺跡である。前者は，中期中葉以降の，後者は，中期後半の一括資料としてとらえることができ，美作地方に於ける好資料である。

そして美作地方におけるこれらの資料は，岡山南部との共通性は当然のことながら，壺形土器，高杯形土器などは，播磨から畿内の影響をより強く受けている。

今ここで再度中期の様相をまとめ城遺跡の出土遺物の位置付けを考えておきたい。

中期1の段階

前期にひきつづく時期にあたる。壺形土器は「く」の字状に外反し，頸部に貼付け凸帯を持つ。甕形土器は箆描沈線から櫛描文に変わる時期にあたり，高田式と呼ばれていたものがこれにあたる。瀬戸内地方では，備後・亀山Ⅱ式，安芸・中山Ⅲ式，播磨・千代田Ⅱ式など前期から続く遺跡に広く分布が見られるものであり，畿内第Ⅱ様式に併行する。

中期2の段階

高田式につづく時期にあたり，南方Ⅱ式，雄町遺跡第3類とされるものがこれにあたる。壺形土器

は，南方遺跡では4種類ありA1 タイプのものは体部から，D1 タイプのものは頸部から櫛描平行線と波状文が交互に施され，その下に2～3列の刺突文をめぐらしている。甕形土器は「く」の字状に折れ，高田式に見られた口縁部の刻目文，口縁下の櫛描沈線はめぐらされず無文になり体部中央に1～2列の刺突文をめぐらす。高杯はA1 タイプのものが出現する。凹線文技法はまだどの器種にも見られない。畿内第Ⅲ様式（古）の段階に併行するものと思われる。

中期3の段階

壺形土器などに凹線文の手法が取り入れられ始まるが一般的ではない。新邸式，菰池式，南方Ⅲ式，山陽団地惣図遺跡の住居址群の大部分，用木遺跡の住居址群の一部など現在まで知られている遺跡は数多く，貝殻山山頂の遺跡もこの段階に始まり中期終末まで続く。城遺跡第Ⅰ式もこの段階に相当し，壺形土器Aタイプのものの頸部には貼付け凸帯あるいは指頭圧刻目文が頸部下端，体部境にめぐらす。新邸，南方遺跡出土のものには，口縁部に刻目文，体部上半部に櫛描平行沈線，波状文を交互にめぐらすものが残る。甕形土器は中期2の段階を継承するが，高杯形土器の器種は4～5種類見られる。美作地方では高本Ⅰ式，播磨・川島遺跡・中期4，紫雲出遺跡第Ⅱ式，畿内第Ⅲ様式（新）に併行するものと思われる。

中期4の段階

菰池式の新しい段階とする雄町遺跡第4類，川入遺跡第6号住居址からの出土一括資料，美作地方では高本Ⅱ・Ⅲ式に分けているが，Ⅱ式の一部分がⅠ式に組みこまれⅢ式の大部分もこの期に入ると思われる。壺形土器A2 タイプのものの頸部に貼付け凸帯がこの期までは残る一方，凹線文手法が頸部にも取り入れられるA3 タイプのものも出現する。甕形土器は口縁部を少し肥厚，あるいはわずかに上方に拡張して凹線文を数条施す。あらゆる器種に凹線文手法が用いられ始める時期である。畿内第Ⅳ様式（古）に併行するものと思われる。

中期5の段階

中期4にひきつづき壺形土器，甕形土器，高杯形土器の凹線文手法が極度に発達し大型の器台形土器が出現し始める。前山Ⅱ式，雄町遺跡第5類とされる第3調査区第5号住居址の一括遺物，山陽団地門前池遺跡第Ⅱ類，惣図遺跡の住居址群の一部，用木遺跡の住居址群の大部分，美作地方では押入西遺跡などがこの時期にあたり，城遺跡第Ⅱ式もこの時期に含めているが，部分的には中期4にさかのぼるものも混在する。紫雲出遺跡第Ⅲ式，播磨川島遺跡中期5（新），畿内第Ⅳ様式（新）に併行するものと思われる。

中期6の段階

これまで岡山県南部では仁伍式と仮称されていたものであり，仁伍遺跡，山陽団地門前池遺跡第Ⅲ類とされる第12号住居址埋立上層遺物，上東遺跡においては鬼川市O式と仮称されている一群であり，中間最終末に位置付けすることができる。上東遺跡のこの一括資料が器種構成上からも今後一つの目安となるであろう。この段階において凹線文手法は盛期を下り，高杯B3，甕3，などでは凹線文手法が取り入れられなくなる一方，壺形土器，器台などには依然として多く使用されている。城遺跡第Ⅲ式はこの段階にあたる。

（参考文献）

鎌木義昌　「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」
吉備考古第８０号　1950年

近藤義郎　「備中新邸貝塚」
古代学研究第８号　1953年

鎌木義昌　「各地域の弥生式土器―中国」
日本考古学講座４，弥生文化　1955年

高橋　護　「戸津田遺跡出土の弥生式土器」
遺跡２６号　1957年

鎌木義昌・近藤義郎　「岡山県高田遺跡」
日本農耕文化の生成　1961年

鎌木義昌・高橋　護　「岡山県高尾遺跡」
日本農耕文化の生成　1961年

鎌木義昌　「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」
弥生式土器集成・資料篇２　1961年

小林三郎・杉原荘介　「兵庫県千代田遺跡」
日本農耕文化の生成　1961年

潮見　浩・松崎寿和　「広島県中山遺跡」
日本農耕文化の生成　1961年

潮見　浩・松崎寿和　「広島県亀山遺跡」
日本農耕文化の生成　1961年

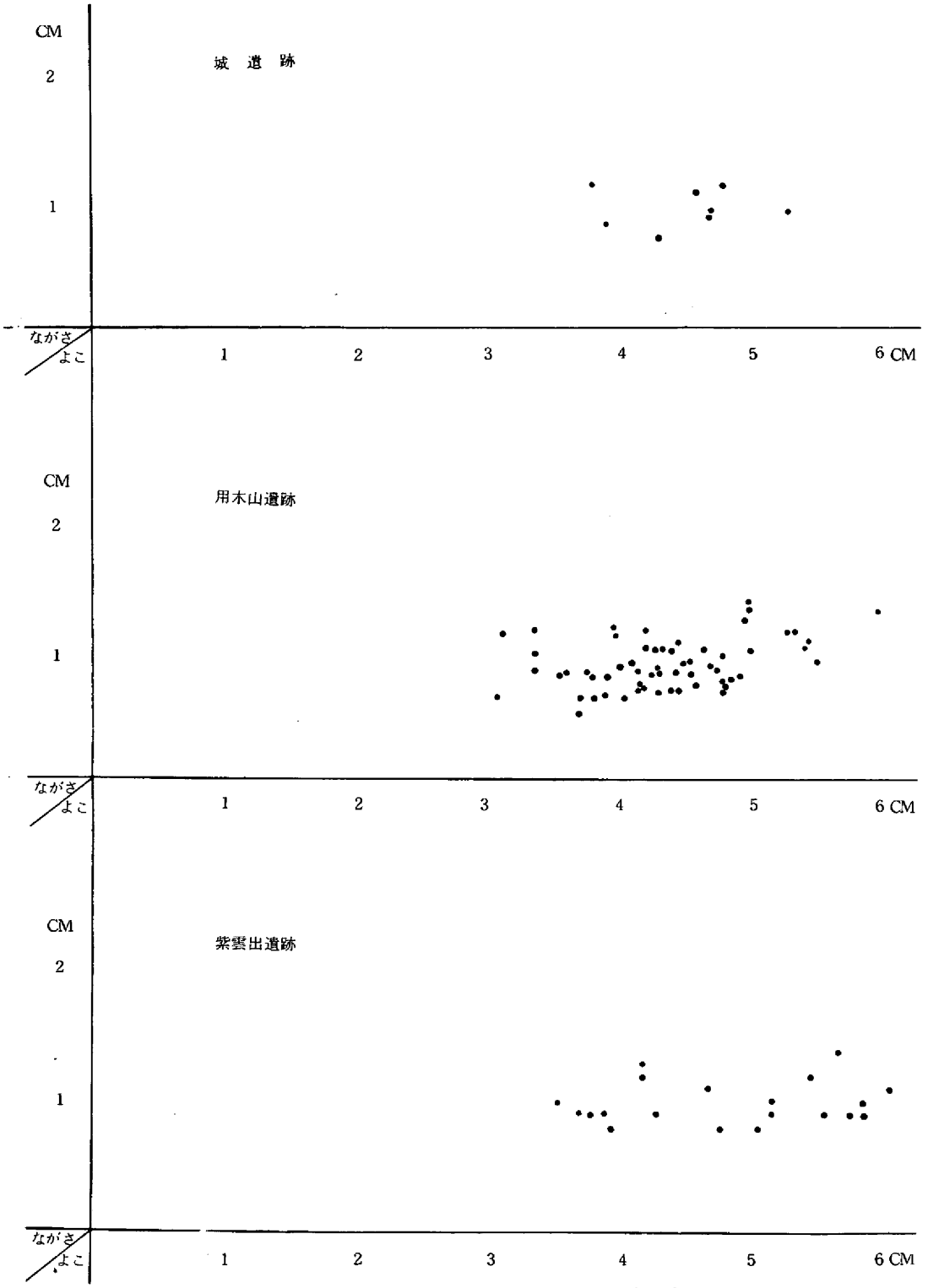
鎌木義昌　「山陽地方Ⅱ」
弥生式土器集成・本篇１　1964年

小林行雄・佐原　真　「紫　雲　山」
香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究
詫間町文化財保護委員会　1964年

間壁葭子　「倉敷市児島上之町保育園内の遺跡」
倉敷考古館研究集報第６号　1969年

山本三郎　「川島・立岡遺跡」
本文篇　太子町教育委員会　1971年

正岡睦夫　他　「山陽新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」
雄　町　遺　跡
岡山県教育委員会　1972年



付 表　打製石庖丁・横幅・長さ法量表

図 版 1

1－1　遺跡遠景（西羽鷲山有料道路から）

1－2　遺跡遠景（南仁伍遺跡から）

図 版 2

2－1　第1地点北斜面全景（北西から）

2－2　第1地点東斜面（東から）

図 版 3

3－1　第1地点南斜面第3号・4号住居址（南から）

3－2　第1地点南斜面第4号・5号住居址（南から）

図 版 4

4－1　第1地点南斜面3・4号住居址（南から）

4－2　第1地点南斜面3～5号住居址および建物址（東から）

図 版 5

5－1　第1地点南斜面第6号住居址（西から）

5－2　第1地点北斜面土層断面（北から）

図 版 6

6－1　第3地点西半部全景および建物群（西から）

6－2　第3地点南谷トレンチ（南から）

図 版 7

7－1　第3地点西半部第1号住居址周辺全景（南から）

7－2　第3地点西半部第1号住居址全景（南から）

図 版 8

8－1　第3地点東半部第2号住居址（西から）

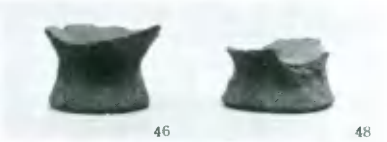
8－2　第3地点西半部第8号住居址（北西から）

図 版 9

9－1　第3地点西半部建物址群（東から）

9－2　第3地点西半部建物址群（北から）

図 版 10



第1地点南斜面および北斜面出土遺物

85

87

95

101

119

106

120

113

126

177

176

第1地点北斜面出土遺物

第 1 地点北斜面出土遺物

図 版 13

366

367

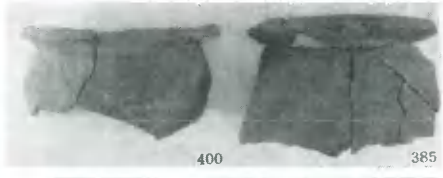
370

365

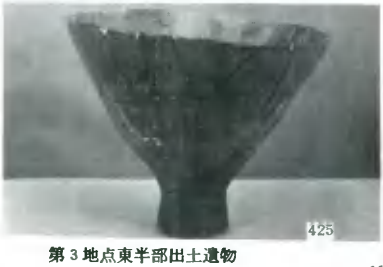
372

389 387

399/377

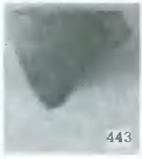

400 385

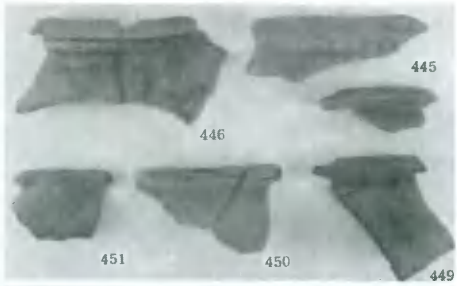
409

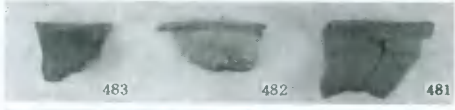

425

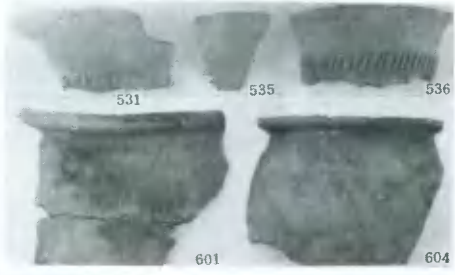
410

第3地点東半部出土遺物









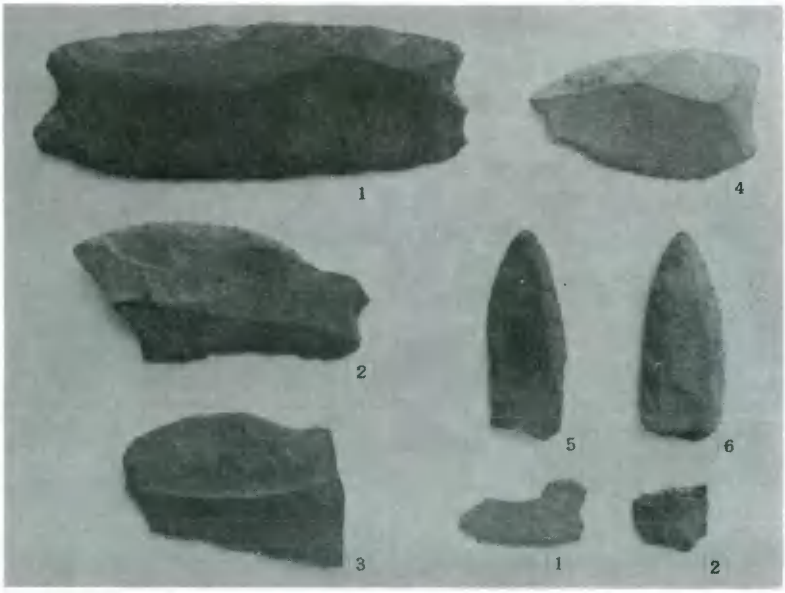
第3地点西半部および南谷各トレンチ出土遺物

図 版 15

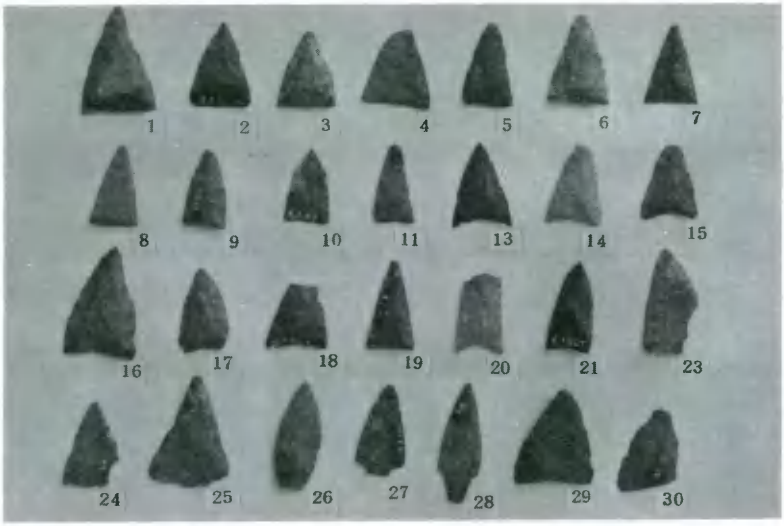
15－1　分銅形土製品

15－2　石 庖 丁（第49図右面）

図 版 16



16－1　各地点出土石器類（第50図左面，右下2個第52図）



16－2　石　鏃（第51図右面）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (19)

倉敷市(児島)
城遺跡発掘調査報告

―県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査―

1 9 7 7 年 3 月

岡 山 県 教 育 委 員 会